

博士学位論文（東京外国語大学）  
Doctoral Thesis (Tokyo University of Foreign Studies)

氏 名	高京美
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博甲第 187 号
学位授与の日付	2014 年 9 月 10 日
学位授与大学	東京外国語大学
博士学位論文題目	現代日本語の使役文に関する一研究 —文中における「V-サセル」の形・機能と意味とのかかわり—

Name	Ko Kyoungmi
Name of Degree	Doctor of Philosophy (Humanities)
Degree Number	Ko-no. 187
Date	September 10, 2014
Grantor	Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN
Title of Doctoral Thesis	<b>Research about Causative Sentence in Modern Japanese</b> -The relationship between form and function of V- <i>saseru</i> in a sentence and the causative meanings-

# 現代日本語の使役文に関する一研究

—文中における「V-サセル」の形・機能と意味とのかかわり—

東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程  
高京美

## 〈目次〉

第Ⅰ部 序論 .....	5
第1章 はじめに .....	5
1.1 研究の目的 .....	5
1.2 考察の対象 .....	6
1.3 論の進め方 .....	7
1.4 資料・用語について .....	8
第2章 先行研究と本研究の立場 .....	11
2.1 使役文に関する先行研究 .....	11
2.1.1 使役文の意味に関する二つの観点 .....	11
2.1.2 二つの観点からみた使役文の意味 .....	12
2.2 文中での形・機能と文法的な意味に関する先行研究 .....	16
2.2.1 文中での形・機能を考慮することの重要性 .....	16
2.2.2 使役文に関して文中での形・機能に注目した研究 .....	17
2.3 「V-サセル」に補助動詞がくみあわさった形に言及した研究 .....	18
2.4 本論文の立場 .....	23
第Ⅱ部 文中の形・機能による「V-サセル」 .....	26
第3章 連用の形で用いられる「V-サセル」 .....	27
3.1 使役主体と使役対象の種類（ヒト/モノ/コト） .....	28
3.2 連用の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅰ） .....	29
3.2.1 「V-サセテ」 .....	29
3.2.2 「V-サセ」 .....	35

3.2.3 「V-サセナガラ」 .....	40
3.2.4 まとめ .....	43
3.3 連用の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅱ） .....	44
3.4 連用の形の「V-サセル」と主節とのかかわり .....	48
3.5 第3章のまとめ .....	52
<b>第4章 条件の形で用いられる「V-サセル」 .....</b>	<b>54</b>
4.1 使役主体と使役対象の特定/不特定性 .....	54
4.2 条件の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅰ） .....	56
4.2.1 「V-サセルト」 .....	56
4.2.2 「V-サセレバ」 .....	58
4.2.3 「V-サセタラ」 .....	60
4.2.4 「V-サセルナラ/サセタナラ」 .....	62
4.3 条件の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅱ） .....	64
4.4 第4章のまとめ .....	66
<b>第5章 終止の形で用いられる「V-サセル」 .....</b>	<b>69</b>
5.1 「終止の形の「V-サセル」」とは .....	69
5.2 単文の述語としての終止の形の「V-サセル」 .....	70
5.2.1 単文の述語としての終止の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅰ） .....	70
5.2.2 単文の述語としての終止の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅱ） .....	73
5.3 複文の主節述語としての「V-サセル」 .....	75
5.3.1 従属節述語の種々 .....	75

5.3.2 連用の形の従属節があらわす事態 .....	77
5.3.3 複文の主節述語としての終止の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅰ） .....	86
5.3.4 複文の主節述語としての終止の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅱ） .....	88
5.4 連用の形の従属節と主節述語の「V-サセル」 .....	92
5.5 第5章のまとめ .....	92
◆第Ⅱ部のまとめ .....	93
第Ⅲ部「V-サセル」と補助動詞とのくみあわせ .....	95
第6章「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」 .....	98
6.1 対象とした用例、および考察方法 .....	98
6.2 「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」が表す使役の意味（観点Ⅰ） ...	100
6.2.1 《引き起こし》 .....	100
6.2.2 《許可》 .....	104
6.2.3 《放任》 .....	106
6.3 「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」が表す使役の意味（観点Ⅱ） ...	108
6.4 「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」のVの語彙的な意味 .....	111
6.5 恩恵性がうかがえない「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」 .....	115
6.6 第6章のまとめ .....	116
第7章「V-サセテオク」 .....	118
7.1 対象とした用例、および考察方法 .....	118
7.2 「V-サセテオク」が表す使役の意味（観点Ⅰ） .....	118
7.2.1 《引き起こし》 .....	118

7.2.2 《許可》 .....	123
7.2.3 《放任》 .....	123
7.3 「V-サセテオク」が表す使役の意味（観点Ⅱ） .....	126
7.4 「V-サセテオク」のVの語彙的な意味 .....	130
7.5 第7章のまとめ .....	133
<b>第8章 「V-サセテシマウ」 .....</b>	<b>135</b>
8.1 対象とした用例、および考察方法 .....	135
8.2 「V-サセテシマウ」が表す使役の意味（観点Ⅰ） .....	135
8.2.1 《引き起こし》 .....	135
8.2.2 《放任》 .....	138
8.3 「V-サセテシマウ」が表す使役の意味（観点Ⅱ） .....	143
8.4 「V-サセテシマウ」のVの語彙的な意味 .....	144
8.5 第8章のまとめ .....	147
<b>◆第Ⅲ部のまとめ .....</b>	<b>147</b>
<b>第Ⅳ部 結論 .....</b>	<b>150</b>
<b>第9章 むすび .....</b>	<b>150</b>
9.1 本研究で明らかになったこと .....	150
9.2 本研究の意義 .....	152
9.3 今後の課題 .....	153
《参考文献》 .....	156
《用例出典》 .....	161
《表の一覧》 .....	164

# 第 I 部 序論

## 第 1 章 はじめに

### 1.1 研究の目的

あるもの (X) が他のもの (Y) に働きかけて動作をさせるという事態を表す日本語の使役文は、【X (使役主体) が Y (使役対象) に (Iを) (Z (動作対象) を) V-サセル】という構文で現われる。

そして、使役主体である X と使役対象の Y がどのようなものであるか、すなわち、ヒトであるか、モノやコトであるかによって「V-サセル」文は次のように分けられる。

母親が子供に荷物を運ばせる

ヒト      ヒト      ・ ・ ・ ヒトに対するはたらきかけ

母親がゼリーを固まらせる

ヒト      モノ      ・ ・ ・ 他動詞的表現

母親の病気が子供を悲しませる

コト      ヒト      ・ ・ ・ 因果関係

中でも、使役主体と使役対象がヒトである場合の「V-サセル」(「母親が子供に荷物を運ばせる」) が典型的な使役であると言われている。そして、使役主体と使役対象がヒトである「V-サセル」文が表す意味は、研究者によってその名づけはそれぞれ異なるものの、おおむね次の 4 つに分けられる (2.1 で詳述)。

母親が子供に命令して部屋の掃除をさせる ・ ・ ・ 《強制》

母親が留学したいと言う子供をアメリカへ留学させる ・ ・ ・ 《許可・許容》

母親がまだ寝ている子供をそのまま寝させる ・ ・ ・ 《放任》

母親が子供を戦争で死なせる ・ ・ ・ 《不本意ながらの放任》

ところで、従来の研究では、「V-サセル」が文の中でどのような形・機能、たとえば、「V-サセル」が終止の形であるか、連用の形であるか、連体の形であるか (それぞれ「母親が子供に掃除をさせる」/「母親が子供に掃除をさせて部屋をきれいにする」/「子供に掃除を

させる母親」)にはあまり注目しないまま、もっぱら「V-サセル」文の表す意味に関心があったように思われる。本論文では、これまで先行研究で明らかになっている「V-サセル」文の意味が、「V-サセル」の文中の形・機能とどのようにかかわっているのかという点に注目して改めて考えてみる。また、先行研究の中で、使役の意味とかかわりがあるとされている、「V-サセル」のテ形に補助動詞がついた形、すなわち、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」、「V-サセテオク」、「V-サセテシマウ」の実例をもとに、これらの形が実際にどのような使役の意味を表すのかを明らかにしたい。

このような考察を通じて、「V-サセル」文が表す意味を支える構文的な条件がより明らかになるのではないかと思う。そして、このような考察が、「V-サセル」文のみならず、ある文法形式の表す意味が、その文法形式の文中での形・機能に支えられているという事実の一つの傍証として示したい。

以上のことから、本論文では、【X(使役主体)がY(使役対象)に(Iを)(Z(動作対象)を)V-サセル】という使役文のうち、もっとも典型的とされる、使役主体Xと使役対象Yがヒトである場合(冒頭の「母親が子供に荷物を運ばせる」や「母親が子供を眠らせる」のような例)について、「V-サセル」の文中での形・機能による使役の意味の特徴、および「V-サセル」のテ形に補助動詞がくみわさった形が表す使役の意味の特徴を明らかにすることを目指す。

## 1.2 考察の対象

「V-サセル」は文の中で様々な「形」で現れるのだが、本論文では、次のような二つの性質における形をわけてそれぞれについて考える。

一つは、「V-サセル」の文中での形・機能に焦点を当てて考える。具体的には、まず、「V-させる」が文の中で広い意味で連用修飾の機能を果たしているもののうち、形としては連用の形で現れる場合(「先生が学生に手伝わせて荷物を運ぶ」)と文の仮定条件節をなす条件の形で現れる場合(「先生は学生にお水を持ってこさせると、おいしそうに飲んだ」、そして、文の述語であるという機能を果たす終止の形の「V-サセル」(「先生が学生を廊下に立たせる」「先生が学生を黒板の前に呼んで問題を解かせる」)を考察する。

もう一つは、「V-サセル」のテ形に補助動詞がついた場合をとりあげる。具体的には、「V-サセル」のテ形に「アゲル(ヤル) / クレル」「オク」「シマウ」がついた、「V-サセテアゲル(ヤル) / クレル」「V-サセテオク」「V-サセテシマウ」という形を考察の対象とする。これらの補助動詞以外にも「イル」「アル」「ミル」など、多くあるが、本論文でとりあげるこれらの形は、「V-サセル」の意味といくらか関連があるものとして先行研究で言及されてい



るものである。たとえば、「V・サセテアゲル（ヤル）/クレル」は《許可》の意味を、「V・サセテオク」は《放任》の意味を、そして「V・サセテシマウ」は《放任》のうちの《不本意ながらの放任》を表わしやすくなるとされ（たとえば、藤井（1971）、青木（1977）、阪田・倉持（1993）など）、「V・サセル」の形が使役の意味にかかわるものとして捉えられている。しかし、実際にこれらの形がどのような使役の意味を表すのか実証的に考察した研究はなさそうである。

本論文では、このように、文中での機能に規定されるものとしての「V・サセル」の形（「V・サセテ」「V・サセルト」等）と、補助動詞のついたものとしての「V・サセル」の形（「V・サセテヤル」「V・サセテオク」等）とを分けて、前者を第Ⅱ部、後者を第Ⅲ部でとりあげ、それぞれにおける使役文の意味の特徴を明らかにする。

### 1.3 論の進め方

本論文の構成について簡単に述べる。本論文はⅣ部構成になっている。

まず、第Ⅰ部は序論であり、この第Ⅰ章と次の第Ⅱ章がこれに相当する。この第Ⅰ章では、本論文の研究の目的、そして考察の対象および資料について述べた。そして、次の第Ⅱ章では先行研究について簡単に述べる。

第Ⅲ章から第Ⅷ章までが本論文の本論に相当し、上述の第Ⅲ章から第Ⅴ章までを第Ⅱ部、第Ⅵ章から第Ⅷ章までを第Ⅲ部とした。

まず、第Ⅱ部では、「V・サセル」の文中での形・機能に注目し、第Ⅲ章では「V・サセル」が連用修飾の機能を果たし、かつ連用の形で現れる場合（「V・サセテ」「V・サセ」「V・サセナガラ」）、第Ⅳ章では仮定条件節の機能を果たし、条件の形で現れる場合（「V・サセルト」「V・サセレバ」「V・サセタラ」「V・サセルナラ/サセタナラ」）、そして、第Ⅴ章では「V・サセル」が文の述語として機能する終止の形で現れる場合（「母親が子供を学校に行かせる」「母親が子供に頼んで掃除をさせた」）をとりあげ、それぞれにおいてどのような意味を表すのかその特徴を明らかにする。

そして、第Ⅲ部の第Ⅵ章から第Ⅷ章までは、「V・サセル」のテ形に補助動詞がついた形のなかで、使役の意味と関わりがあるとされてきたものを対象に考察する。第Ⅵ章では「V・サセテヤル/アゲル/クレル」、第Ⅶ章では「V・サセテオク」、そして第Ⅷ章では「V・サセテシマウ」をとりあげる。これらの形は先述したように、それぞれ、使役の意味として、《許可》、《放任》、《不本意ながらの放任》の意味を表しやすいものとして先行研究で指摘されている（後述）が、実際にこれらの形がどのような使役の意味を表しているのか実証的に考察されてはいない。本論文ではこれらの形を積極的にとりあげ、それぞれの形における使役

の意味の特徴をあきらかにしたい。

そして、第Ⅳ部の第 9 章では本論文の考察から明らかになったこと、および本研究の意義を簡単にまとめ、今後の課題について述べる。

#### 1.4 資料・用語について

本論文で考察の対象とした資料は、次のものである。

- ①『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』の中の 46 冊（作品一覧については稿末の《用例出典》参照）
- ②電子化されていない文学作品（36 冊）から「V-サセル」を手作業により全例収集したもの（作品一覧については稿末の《用例出典》参照）。
- ③『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ モニター公開データ 2009 年度版）の書籍データ<sup>1</sup>

①、②の資料は、基本資料として各章において考察の対象として扱ったものである。それに対して、③の資料は補助資料として、本論文の第Ⅱ部の第 4 章「条件の形の「V-サセル」」、および第Ⅲ部の第 6 章、第 7 章、第 8 章で①、②とともに用いた。これらで補助資料も合わせて用いたのは、それぞれの形の「V-サセル」の用例が基本資料だけでは数が少なかったことによる。

そして、①と③の電子化資料においては、次のような文字列検索によって「V-サセル」の用例を検出した<sup>2</sup>。

まず、第Ⅱ部の第 3 章、第 4 章、第 5 章の「V-サセル」に関して、以下のような文字列検索を行った。

【[[かがさたなばまらわ]せ]

---

<sup>1</sup> 国立国語研究所が 2006 年から 2010 年にかけて構築した大規模な日本語研究用の書き言葉コーパスであり、本論文では 2009 年度に公開された「モニター公開データ」の中の書籍データから用例を収集した。「モニター公開データ」には次の量の言語データが収録されている。

書籍：約 3,000 万語（10,423 サンプル）

白書：約 480 万語（1,500 サンプル）

ヤフー知恵袋：約 520 万語（45,725 サンプル）

国会議事録：約 490 万語（159 サンプル）

<sup>2</sup> 本論文では、動詞のいわゆる未然形に「-(s)aseru」がついたもの、すなわち「行かせる」、「食べさせる」のようなもののみを使役動詞として考察の対象としている。「行かす」「食べさす」のような形は、使役形の「短縮形（short form）」（寺村 1982）とされることがあるが、寺村（同）も述べているように、たとえば「飛ばす」を「飛ばせる」の短縮形としてよいかどうか等の疑問もあるので、考察対象としなかった。

次に、第Ⅲ部の各章で考察する形については以下のような正規表現を用いて用例を検出した。

第6章 「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」

【[[かがさたなまばらわ]せてや】【[[かがさたなまばらわ]せてあげ】

【[[かがさたなまばらわ]せてく】

第7章 「V-サセテオク」

【[[かがさたなまばらわ]せてお】【[[かがさたなまばらわ]せと】

第8章 「V-サセテシマウ」

【[[かがさたなまばらわ]せてしま】【[[かがさたなまばらわ]せちゃ】

上記の文字列検索によって検出された用例の中には、「V-サセル」の形ではないもの（たとえば「しあわせ」のようなもの）が多数検出され、それらを手作業で取り除いていった。

このようにして検出された「V-サセル」の用例のうち、使役主体と使役対象がヒトである「V-サセル」文のみを本論文の考察対象としている。このような手続きから得られた用例の数を各章で考察する形ごとに示すと、次のようになる。

表 1：本論文で考察の対象とした「V-サセル」の用例数

章	「V-サセル」の形・機能	用例数
第3章	連用の形の「V-サセル」	762
第4章	条件の形の「V-サセル」	238
第5章	終止の形の「V-サセル」	668
第6章	「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」	827
第7章	「V-サセテオク」	217
第8章	「V-サセテシマウ」	198
全用例数		2910

最後に、本論文での用語について簡単に述べておく。本論文では、人が人に働きかける使役文、たとえば「母親が子供に荷物を運ばせる」、「母親が子供を座らせる」のようなものを考察対象とするが、働きかける人（「母親」）を「使役主体」、何らかの働きかけをうけて動作を行う人（「子供」）を「使役対象」、使役対象が行う動作の対象となるもの（「荷物」）

を「動作対象」、そして動詞（V）に使役の接尾辞「-(a)seru」がついた使役動詞（「運ばせる」）を「V-サセル」とよぶ。

## 第2章 先行研究と本研究の立場

まず、2.1 では、本論文全体の考察にかかわる、これまでの使役文の意味に関する研究についてごく簡単にふれ、次に、2.2 では、第Ⅱ部とかかわる、ある文法形式の文中での形・機能に注目して文法的な意味を考察した研究をとりあげる。そして、2.3 では、第Ⅲ部と関連して、「V-サセル」の研究の中で「V-サセテヤル/アゲル/クレル」、「V-サセテオク」、「V-サセテシマウ」について言及したものについて紹介する。最後に 2.4 では先行研究を踏まえて本論文における立場を述べる。

### 2.1 使役文に関する先行研究

#### 2.1.1 使役文の意味に関する二つの観点

第1章で述べたように、「V-サセル」文は、使役主体と使役対象として現れるものがヒトであるかモノ・コトであるかによって大きく異なる。

母親が子供に荷物を運ばせる

ヒト      ヒト      ・ ・ ・ ヒトに対するはたらきかけ

母親がゼリーを固まらせる

ヒト      モノ      ・ ・ ・ 他動詞的表現

母親の病気が子供を悲しませる

コト      ヒト      ・ ・ ・ 因果関係

中でも、使役主体と使役対象がヒトである場合の「V-サセル」（「太郎が花子に荷物を運ばせる」）が典型的な使役であるとされ、使役主体と使役対象がヒトである使役文を中心に、それが表す意味について、多くの研究者によって研究されてきた。たとえば、山田（1908）の「使令作用」「干与作用」、青木（1977）の、「強制」「許可助成」「放任」、柴谷（1978）の「誘発使役」「許容使役」、佐藤（1986）の「指令」「許可・放任」「変化のひきおこし」「放置」「解放（非強制）」「禁止」「非ひきおこし」「非放置」、柳田（1994）の「拘束用法」「推奨用法」「許容用法」「放任用法」、早津（2006）の「つかいだての使役（他者利用）」「みちびきの使役（他者育成）」などである。使役主体と使役対象がヒトである使役文の意味・用法における研究の流れと観点の推移について早津（2007）が詳しく述べている。ここでは、本研究の考察と関連がある箇所のみを早津（2007）を引用しながら紹介することにする。

早津（2007：80）によると、これまでの使役文の意味・用法の分類には、動作実現の《原因局面/先行局面》に注目した分類と、動作実現の《結果局面/後続局面》に注目した分類という、大きく2つの観点からの分類があるとし、それぞれ次のように説明している。

#### 動作実現の《原因局面/先行局面》に注目した分類

使役主体が動作主体にどのようなしかたで関わって動作を行わせるのか、使役主体と動作主体のどちらが先に原動作の実行を望むか（どちらがきっかけで原動作が生じるか）、使役主体と動作主体のどちらが強く動作を望むか、といったことに注目した分類

#### 動作実現の《結果局面/後続局面》に注目した分類

原動作の実現によって生じてくる事態が使役主体・動作主体にとってどのような意義をもつのか、動作の実行は使役主体のためなのか動作主体のためなのかということについての認識がまず使役主体にあり、それによって、動作主体を方便として使うか否かという違いが生じたもの

そして、現在は、前者の観点からの分類に相当するもの（青木（1977）、柴谷（1978）、佐藤（1986）など）が主流となっており、後者の観点からの分類（山田（1908）、早津（2006、2007））はあまりなされていないという。次節で詳しく述べる。

### 2.1.2 二つの観点からみた使役文の意味

前節で、これまでの使役の意味における二つの観点を述べたが（以下、それぞれを「観点Ⅰ」と「観点Ⅱ」とよぶ）、ⅠとⅡの観点による使役の意味・用法について簡単に述べる。まず、観点Ⅰの動作実現の《原因局面/先行局面》に注目した分類として、それにも2類のもの、すなわち、使役主体および使役対象の意志の強弱に注目したもの（観点Ⅰ-ア：青木1977（1995））と、使役主体と使役対象のどちらの動きがきっかけになっているのかというもの（観点Ⅰ-イ：柴谷1978、佐藤1986）がある。前者（観点Ⅰ-ア）として、青木（1995）は「使役」とは「ある者が他者に対して、他者自らの意志において或いは主体性をもってその動作を行うようにしむけること（この場合の他者とは有情物に限らない。非情物の持つ動作実現能力・本性は、有情物の意志・主体性と同様にみなし得る）」（1995:114）と定義し、「使役」は「「させられ手＝動作のなし手」の意志と、しむける者即ち「させ手」の意志との関係」（1995:114）であると言う。そして、使役の表す意味を次のように分け、

説明している。

《強制》—「させ手」(本論文でいう「使役主体」)の意志が「なし手」(本論文でいう「使役対象」)の意志に反して強い場合。

【遊びたがる子供を風呂にはいらせる】

《許可助成》—「させ手」の意志が「なし手」の意志に反しない場合。

【交替に休憩させる】

《派生的用法》:《放任》—「させ手」には積極的な意志がなく、「なし手」の行為(この行為には意志的な場合と無意志的な場合とがある)を妨げない場合。

「…ておく」を添えれば放任の意が、「…てしまう」を添えれば不本意ながら放任した意になる。

【何時までも寝かせておく】

【あの子を非行に走らせてしまったのは親の愛情不足だ】

一方、後者(観点 I・イ)として、柴谷(1978)は「日本語の使役文は、多くの言語がそうであるように、二つの反対の使役状況をあらわす。」(p.310)と述べ、二つの使役状況を《誘発使役》と《許容使役》に分けて次のように説明し、それぞれ次のような例をあげている。

《誘発使役》—ある事象が使役者の誘発がなければ起こらなかったが、使役者の誘発があったので起こった状況を指す。

【そこで家人を豆腐屋に走らせ、おからを買わせる一方、……】(「続々パインのけむり」)(柴谷(1978: 311)(110)アの例)

《許容使役》—ある事象が起こる状態にあって、許容者(使役者と形態的に同じ)はこれを妨げることができた。しかし、許容者の妨げが控えられ、その結果その事象が起こったという状況を指す。

【「先生、先生。わたくしもお供させてください」】(「菊枕」)(柴谷(1978: 311)(111)アの例)

同じく、観点 I・イから、構文的な条件によって使役の意味を分類したのが佐藤(1986)である。佐藤(1986)は、使役主体と使役対象がヒトである使役文(「人間が人間にはたら

きかける」ことを表現する文)」について、動作の源泉のありか<sup>3</sup>（「動作の源泉＝使役主体」と「動作の源泉＝動作主体」）、動詞の意志性（「意志動詞」と「無意志動詞」）、および「V-サセル」の肯定／否定の形（「みとめ」と「うちけし」）という3つの条件によって使役の意味に違いがあり、次のように《指令》、《許可・放任》、《変化のひきおこし》、《放置》、《解放（非強制）》、《禁止》、《非ひきおこし》、《非放置》という文法的な意味が表わされるとしている<sup>4</sup>。

表 2： 佐藤（1986）の「人間が人間にはたらきかける」文」の文法的な意味

動詞の形	みとめ		うちけし	
動詞の意志性	意志動詞	無意志動詞	意志動詞	無意志動詞
動作の源泉 ＝使役主体	《指令》	《変化の ひきおこし》	《解放 (非強制)》	《非ひきおこし》
動作の源泉 ＝動作主体	《許可・放任》	《放置》	《禁止》	《非放置》

上に表に示した佐藤（1986）の使役の意味に相当する簡単な例を以下に示す。

《指令》：叔母は彼女にいいつけて、みんなの茶碗に飯をよそわせた<sup>5</sup>。

《許可》：「あるく」というから防波堤の上をあゆませた。

《放任》：鳶次は米子に委細をしゃべらせて、へーえ、へーえときいてばかりいる。

《変化のひきおこし》：客の一人が冗談をいって娘たちを笑わせた。

《放置》：二人の息子を戦死させる。

《解放（非強制）》：かみさんは娘に客の注文したものをめったに運ばせない。

《禁止》：かみさんは娘をけっして遊ばせておかなかった。

《非ひきおこし》：美夜はどんな男もあきさせず愛されつづける女であろう。

<sup>3</sup> 「動作の源泉が使役主体にある場合」とは、使役主体のなんらかのうごき（はたらきかけ）がなければ使役対象の動作そのものが生じえない場合をいい、「動作の源泉が動作主体（本論文でいう使役対象）にある場合」とは、使役主体のうごき（はたらきかけ）のありなしにかかわらず、動作主体（本論文の使役対象）の動作が生じる場合であると述べている。この点では、柴谷(1978)の観点と通じるところがある。

<sup>4</sup> 表 2 には示さなかったが、佐藤（1986）も動作の源泉が使役主体である場合、それぞれの意味の中に「利害の授受」（利益／めいわく付与）という観点からも触れている。「利害の授受」は、観点Ⅱの『動作実現の結果局面/後続局面』に注目しているともいえるが、早津（2006）の述べる『動作実現の結果局面/後続局面』はあくまでも使役主体と使役対象のどちらのための動作であるかという点に注目しており、その性質が異なる。

<sup>5</sup> 佐藤（1986）があげている用例を簡略化したものである。



《非放置》：彼はただ相手をつけあがらせない用心をするより他にしかたがなかった。

以上が観点Ⅰからの研究であるが、それに対して観点Ⅱの動作実現の《結果局面/後続局面》に注目したものとして、山田（1908）の「使令作用」と「干與作用」を継承した早津（2006）がある。早津（2006）は、人の意志動作の引き起こしを表す「V-サセル」が表す意味を《つかいだて（他者利用）の使役》と《みちびき（他者育成）の使役》の二つの極があるとし、それぞれについて次のように説明している。

《つかいだて（他者利用）の使役》

使役主体が、自ら享受したいある事態を成就させようという意図をもち、しかしその実現のために必要な動作を使役主体自身では行わず、他者（動作主体）に対してその動作を要求する働きかけをして動作を行わせるという事態である。

動作主体がその動作を行うことによって、使役主体が享受したい事態が実現することに大きな意義（重き）がある。

【上級生は自分のユニフォームやタオルも後輩たちに洗わせる】

《みちびき（他者育成）の使役》

使役主体が、他者の身の上に他者にとって意義のある事態を生じさせたいと思い、その実現のために必要な動作をその他者（動作主体）に行わせるという事態。

動作主体がその動作を行うことによって、動作主体自身に何らかの変化が引き起こされることに大きな意義（重き）がある。

【子供に栄養のあるものを食べさせる】

ここまで述べてきた、動作実現の《原因局面/先行局面》と《結果局面/後続局面》という二つの局面は、「V-サセル」文が表す事態の複合性をそれぞれとらえたものである。したがって、使役文の意味を考えるにあたっては、両者のうち的一方から考えるのではなく、二つの局面からそれぞれ使役文の意味を考えてみる必要があると思われる。本論文では、動詞の使役の形「V-サセル」の文中での形・機能による使役の意味を二つの局面からともに考えてみたい。

## 2.2 文中での形・機能と文法的な意味に関する先行研究

### 2.2.1 文中での形・機能を考慮することの重要性

使役文に限らず、広く単語（構文的要素）の文中での形・機能が単語および文の文法的な意味と深くかかわっていると言及している研究がある。奥田（1975（1996）：58f.）は、「終止形におけるはなやかな mood の体系は、それが述語としてはたらくということから生じているとすれば、動詞の文法的な機能は、その形態的な性質を規定しているといえるだろう」といい、「構文的な要素の文法的なちがいが、その文法的な意味の体系をことなるものにしているのである」と述べている。

また、工藤（2005）は、「従来、文の中での「位置」のちがいや、他の部分との「きれつき（断続関係）」にもとづく「機能」のちがいといった〈構造〉的な〈条件〉を精密に規定しないまま、叙法性形式（助詞、助動詞）の意味の「本質」を「主観的か客観的か」もしくは「主体的か客体的か」などと、単純二項対立的に峻別しようとする論議が多かったが、多くは実り豊かな論争にはならなかった」（p.9）と述べている。そして、「通常の助動詞は、〈終止述語〉のほか〈中止述語〉や〈条件述語〉や〈連用修飾〉〈連体修飾〉等の機能的位置にたちうる多機能の形式だということになり、その機能的位置ごとに、つまり、連文構造や複文構造の中で記述を深める必要がある」（p.20）とし、いくつかの叙法形式をあげて説明している。その一つとして、「してほしい」という形式をあげ、本来他者への〈希求〉を表す「してほしい」は構文的条件において制約を受けることはない（「この本を買ってほしい／昨日遊んでほしかった／クリスマスに買ってほしいおもちゃ／遊んでほしいければこっちに来なさい」）が、形態的に〈肯定〉の〈現在〉の形をとり、構文機能的に〈終止〉の位置にたったうえで、構文意味的に〈一人称のシテ〉と〈二人称のウケテ〉と組み合わせると（「私はあなたに来てほしい」）、〈依頼〉に準ずる意味を表すようになるという。

受身文についての研究の中にも、文法形式の文中での形・機能によって表す意味に特徴があることに言及しているものがある。

川村（2003）は、日本語の受身文における「被影響」の有無について、これまでの受身文に関する先行研究にふれながら述べている。その中で、次のような例をあげ、動詞の受身の形が従属節に用いられた場合、受身文が表す「被影響」が薄れる傾向が認められるといい、「受身述語の構文的位置と「被影響」の意味の関係については従来あまり指摘されておらず、今後の研究が望まれる」（p.48）としている。

太郎が花子に手を引っ張られた

太郎が花子に手を引っ張られて歩いている

また、新井（2004）は、動詞の連用形「V-シテ」の研究の中で一緒に扱われていた「V-シテイル」のテ形、すなわち「V-シテイテ」（たとえば「すわって」「並んで」に対する「座っていて」「並んでいて」の形）をとりあげて考察している。これらの形が表す意味は、次の例でわかるように、前者の「遅れて」の場合、二つの事象の「継起」からの「原因 - 結果」の関係が読み取れるのに対し、後者の「遅れていて」の場合、「電車が遅れている」という「状況」のもとで、「遅刻した」という事象が起きたものと解釈できるという。

電車が遅れて遅刻しました。

電車が遅れていて遅刻しました。

このように、これまでの研究において、ある文法形式における文中での形・機能に注目した考察は部分的に行われていたものの、全体において積極的になされていないのが現状である。このことについてはこれまでの使役文に関する研究も同様で、使役の意味を考える際に「V-サセル」が文の中でどのような形・機能をもって現れるのかについて注目することはなかった。しかし、工藤（2005）が言うように、「文の中での「位置」のちがいや、他の部分との「きれつづき（断続関係）」にもとづく「機能」のちがいといった〈構造〉的な〈条件〉を精密に規定」することが「V-サセル」の意味を考えるときに必要でないかと思われる、本論文では「V-サセル」の形・機能に注目し、それぞれの形・機能による使役の意味を考えてみようと思う。

## 2.2.2 使役文に関して文中での形・機能に注目した研究

使役文の意味を考える際に、動詞の使役の形・機能に注目して考察したものとして、早津（1991）がある。これは「太郎が目を輝かせる」のような使役主体と使役対象が「全体 - 部分」の関係にある使役文の特徴を考察したものであり、使役主体と使役対象が「全体 - 部分」の関係にある使役文の「V-サセル」の多くが「V-サセナガラ」「V-サセテ」などの複文での従属節に用いられると指摘している。このほか、本多（1997）もこの種の使役文を考察の対象としていて、「ほとんどの場合従属節に生じる」（p.36）と述べている。早津（同）、本多（同）は、「V-サセル」の文中での形に注目しているという点において本論文と重なるところがある。しかし、これらの考察対象が、使役主体と使役対象が「全体 - 部分」の関係にある「V-サセル」（使役文としては周辺的なもの）であるのに対して、本論文では使役主体と使役対象がともにヒトである「V-サセル」（使役文の中心的なもの）を考察の対象とし

ている。

また、早津（1998a）では複文構造の使役文について考察されているが、主節の述語が使役動詞、従属節の述語が中止形（「V-シテ」「V-シ」）であるものを考察の対象として、「従属節であらわされている事態と主節で表わされている使役事態との意味的な関係を考える」（p.57）ことを目的としている。早津（同）は、使役文は複文構造の使役文にすることによって、使役主体から使役対象への働きかけ・影響を従属節で表現することができる（「母親が子供に命じて山道を歩かせた」）が、従属節が必ずしも使役対象への働きかけや影響のありさまを表すわけではない（「母親は下の子を自転車にのせ、上の子を歩かせた」）と述べたうえで、複文構造の使役文における従属節と主節のかかわり方の種々について考察したものである。早津（同）での考察対象は、本論文の第 5 章で考察対象としているもので、重なるところも多いが、本論文では、従属節と主節との関係のみならず、従属節と主節の事態のかかわり方が「V-サセル」の意味にどのようにかかわるのか具体的に考える。

## 2.3 「V-サセル」に補助動詞がくみあわさった形に言及した研究

先にも述べたが、「V-サセル」の研究の中で、「V-サセル」に補助動詞がついた形について積極的に述べられているものはほとんどなく、多くがごく簡単に触れられているだけである。その中で、本論文のⅢ部で考察する「V-サセテヤル/アゲル/クレル」、「V-サセテオク」、「V-サセテシマウ」についてそれぞれ次のように述べられている。

### （ア）「V-サセテヤル/アゲル/クレル」

『日本文法大辞典』（1971：281）の「使役」の項をみると、使役の意味の一つとして「他の有情物の希望をかなえて、動作を行なうことを許可する」意味があるとし、「この場合口語では「……てやる」「……てもらう」をつけることができる」（執筆者：藤井正）と述べている。

2.1.2 節でも触れた佐藤（1986）は、「V-サセル」が肯定の形<sup>6</sup>の意志動作の使役について、「V-サセル」動作のきっかけが動作主体（本論文の使役対象）にある場合を、「許可」と「放任」に分け、後者をさらに「意図的放任」と「非意図的放任・不本意」に分けている。そのうちの「意図的放任」について、「意志動作の《意図的放任》は、動作主体がみずからの意志にしたがっておこす動作の実現をさまたげないこと、つまり、動作主体の意志にそう

<sup>6</sup> 佐藤（1986）は、「V-サセル」がみとめの形（いわゆる肯定形）であるか、うちけしの形（いわゆる否定形）であるかに分け、それぞれの意味を明らかにしている。その中でうちけしの形の「V-サセル」は、それが意志動作の使役である場合「解放（非指令）」「禁止」の意味を表し、無意志動作の使役の場合、「非ひきおこし」「非放置」の意味を表すという。

ことである。ふつう、人間の意志的な動作はなんらかの目的があって、その実現にむけてなされる。目的の動作が実現することのなかに動作主体の利益があるとすれば、その動作の放任は結果的に動作主体への利益付与をとまなう。うえにあげた例（〈勝手にしゃべらせておけ〉）はすべての述語を「～させてやる」におきかえることができる。」（p.130）としている<sup>7</sup>。

また、阪田・倉持（1993:43f.）は、「使役」という言葉は、相手の意志にかかわりなく何らかの制約を加えたり影響を及ぼしたりする意を表すが、当人の意志が実現することを妨げずに認めるという意を表すにも使役表現が用いられる」とし、「そんなにここが気に入ったのなら、家に下宿させてやるよ」のような例は「元来当人の意志だけでは行い得ないことについて、ある人が許可を与えた結果、当人の意志通りにそれが実現される意を表す。当然のこととして「～てやる」などの添えられることが多くなる。」としている。

#### （イ）「V・サセテオク」

「V・サセル」に関する従来の研究では、《放任》を表す「V・サセル」の場合、「V・サセテオク」の形で現れることが多いとされている。たとえば、佐藤（1986）は、《放任》を意図的、合目的に放任する場合の「意図的な放任」（【こういうときはいいだけいわせた方がいいのだ】）と、不本意ながら放任せざるを得ない場合の「非意図的な放任、放任＝不本意」（【お玉は何もいうことができずに、岡田を行きすぎさせてしまった】）に分けており、そのうち、「意図的な放任」はしばしば「V・サセテオク」のかたちをとる」（p.130）としている。

阪田・倉持（1993：44）は、使役表現の中で【彼も子供じゃないんだから、したいようにさせておこう】、【あの男、言わせておけばきりが無い】のような例をあげ、これらについて、「本来黙って見すごすわけにはいかない相手の行動をあえて黙認したり、我れ関せずと放任したりするような意を表している。この種の表現には、「～ておく」の添えられることが多い」としている。

石川（1994：20）も、「放置／放任」を表す場合、「V・サセテオク」の形が多いようであると言及している。そして、「V・サセテオク」は、「使役形の「許可／許し」と補助動詞「～て/でおく」の「放置」の用法とが結びついたものではないだろうか」と述べている。

<sup>7</sup> 佐藤（1986）は、《指令》の文から《許可》《放任》の文へ移行する場合として《利益付与》の文を取り出している。佐藤は「V・サセル」の形のみをとりあげているが、「利益の授受の文法的な表現手段としては「～してやる、～してもらう、～してくれる」などのくみあわせがあるが、これらの補助動詞と使役動詞とのくみあわせはさらに複雑な条件がからんでいて、独特な意味を実現する」（p.121）と述べている。使役動詞と授受動詞の補助動詞がついた形と《利益付与》の文との意味的なかわりを意識していることがうかがえる。

さらに、「V-サセテオク」について、「V-シテオク」の研究の中で触れているものがある。

吉川（1976：267）は、「しておく」の基本的な意味は「対象を変化させて、その状態を持続させること」であるとしたうえで、「しておく」の意味を次の7つに分けている（1976：268f.）。

① 対象の位置を変化させ、その結果の状態を持続させることをあらわす

私の家では、見かねて、このあいだ、「ごみをすてないでください。」と、立てふだを立てておきました（六上 51）

② 対象を変化させ、その結果の状態を持続させることをあらわす

「加藤さんは奥さんに鍵をあずけておいたんです」（女 10）

③ ある時までに対象に変化を与えることをあらわす

議題を予告し、資料があれば配っておく。（中二 37）

④ 放任をあらわす

「ほうっておけばいいんだよ！」（砂の女 74）

⑤ 準備のためにする動作をあらわす

……わしが人民どもの恭順をためそうとここに掛けておいた帽子に、敬礼を拒んだのか。（中三 263）

⑥ 一時的処置をあらわす

「……それじゃまア、あの絵はいただくか、お返しするか、一応預かっておこう」（白い巨塔 49）

⑦ いくつかの特例

お安くしておきます。

吉川（1976）は、「V-シテオク」だけでなく「V-サセテオク」も考察の対象としており、上の「しておく」の7つの意味のうち、「使役形に「ておく」のついたものは、放任の意味になることが多い」（p.281）と述べている<sup>8</sup>。

高橋（1969）は、すがた（aspect）動詞としての「テオク」の用法を、①対象を変化させて、その結果の状態を持続させることを表すもの（【いままで物置きにしておいた二階の

---

<sup>8</sup> ただし、次のような使役形に「ておく」が後接しても放任の意味にならない例についてもふれている。

・「ああしていい聞かせておくと、次の年からよくなるということじゃよ」（三下）

・「こんなに佐枝子が縁遠くなるんだったら、いっそあの時に財前さんと結婚させておいたほうが…」（白い巨塔）

三畳と六畳】）と、②対象にはたらきかけないで、そのままの状態を持続させることを表すもの（【君にはできるだけいままでの関係をそのままのこしておきたい気があるが】）にわけ、《放任》の使役を後者に分類している。

さらに、笠松（1993）は、「V-シテオク」におけるもくろみ性の考察の中で「V-サセテオク」についても言及しており、「V-サセテオク」の場合、①「あとにおこる事態にそなえて」という使役主体のもくろみをことさらに表現している場合（「…自分の病気がもしやうつるといけないからって、看護卒にたのんで、べつのところにしまわせておいたんですって…」）と、②「使役主体が、あとにおこる事態にそなえて、あいての動作を許可したり、放任したりする」ということを表している場合（「いいたがるものには、なんとでもいわしておくさ。…」）があるという。（p.133ff.）。

#### （ウ）「V-サセテシマウ」

まず、「V-サセル」に関する研究の中で、『日本文法大辞典』（1971）の「使役」の項（執筆者：藤井正）をみると、「監督の不行き届きから、子を非行に走らせてしまった」の例があげられ、他のものの動作の発現をとどめることができないで、不本意ながら、動作が行われるという意味を表わし、口語では「……てしまう」をつけることができると述べている。また、『国語学大辞典』（1980）の「使役表現」の項（執筆者：青木伶子）を見ると、「……てしまう」を添えれば不本意ながら放任した意が一層明瞭になるとしている（「あの子を非行に走らせてしまったのは親の愛情不足だった」）。さらに、阪田・倉持（1993）も「朝寝坊をして友達を1時間も待たせてしまった」「親を悲しませるようなことをしてはいけない」のような例をあげ、自分自身のしたことが原因となって、そうなることを意図していなかったのに、ある事態（多く好ましくない）を引き起こす結果になるという意を表し、これらは意図的でないという点で「～しまう」で文が結ばれることが多いとしている。

このように、「V-サセル」の研究の中で、《許可》の場合には、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」の形、《放任》の意味を表す場合には、「V-サセテオク」の形、そして《非意図的な放任》を表す場合には「V-サセテシマウ」の形で現れることが多いと指摘されているが、それはごく大まかなものにとどまっている<sup>9</sup>。そして、これらの形が実際にどのような使役の意味を表すのか実証的に考察されていないのが現状である。本論文では、第Ⅲ部でそれぞれの形について詳しく考察する。

<sup>9</sup> このようなことに言及している先行研究をみると、辞典類、または日本語教育の観点から書かれたものがほとんどである。

### (エ)「V-サセテイル」

本論文では考察の対象としていないが、「V-サセテ」に補助動詞「イル」がついた「V-サセテイル」が表す文法的な意味の特徴を見出そうとしたものとして、権（2008）がある。権（同）は、直接行為の使役（「赤ちゃんをチャイルドシートに座らせた」）と間接行為の使役（「その教師は自分では殴れないから、他の生徒に僕を殴らせたんだ」）とでは、その「している」形のアスペクトの意味も変わってくるのではないかという仮説を立て、考察を行っている。権（同）は独自に「V-サセル」の意味を分類しており、使役文の意味・用法に次のようなものがあるとしている（p.346）。

表 3：権（2008）の使役文の意味・用法

意味・用法		例文
[1] 典型的 使役文	指示	子供に魚を一人で <u>食べさせた</u> 。
	誘導	夫が自分を憎み、七年も犯人の子供を <u>育てさせた</u> 。
	許可	その手紙は私に <u>読ませて</u> ください。
	放任・放置	僕は黙って彼に <u>しゃべらせて</u> おいた。
[2] 非典型的 使役文	直接使役	熱を出した子供に寝巻を <u>着せて</u> 寝かしつけた。
	操作使役	僕は音楽を聞きながら車を <u>走らせた</u> 。
	自発使役	スプーンで軽にかき回して茶葉を <u>開かせる</u> 。
	原因使役	そのことが絹子を <u>驚かせた</u> ようだ。
	非使役行為	戦争で息子を <u>死なせて</u> しまった。

権（同）は、使役文を「典型的な使役文」と「非典型的な使役文」に大きく分けているが、その分類の根拠を使役主体の行為が間接的であるか否かにもとめている。そして、使役主体の行為が間接的である「典型的使役文」と、「非典型的使役文」のうちの使役主体の行為が直接的である「直接使役」と「操作使役」の例を考察の対象とし、そのアスペクトの特徴について比較・分析している。そして、使役主体の行為が間接的な「典型的使役文」の場合、使役行為が特定しにくいいため、使役行為の持続の局面が捉えにくく、使役行為の完結後の影響を表す「完了（パーフェクト）」の意味が優勢になるという。一方、使役主体の行為が直接的な「直接使役」と「操作使役」の場合、典型的なタイプから移行し、他動詞の動作行為に近づいた使役行為であることから、他動詞文と類似した特徴を見せるようになり、「シテイル」の意味は「使役動作の持続」の意味を表すという。権（同）は、使役



文の「シテイル」形、すなわち「V-サセテイル」をアスペクト的観点から考察し、使役の意味によってアスペクトの意味に異なりがあるということを明らかにしたものであり、本論文の第Ⅲ部で述べる「V-サセル」に補助動詞が組み合わさったものを考察するうえで参考になる。

## 2.4 本論文の立場

本論文では、上であげた先行研究を踏まえて、「V-サセル」の文中における形・機能に注目し、これらの違いによって表される意味・用法の特徴を明らかにする。考察にあたり、「V-サセル」の意味を、2.1.1 であげた二つの観点、すなわち、早津（2006）のいう、動作実現の《原因局面/先行局面》への注目（観点Ⅰ）と《結果局面/後続局面》への注目（観点Ⅱ）という観点から考える。

まず、前者の観点Ⅰは、先述したように従来多くいわれてきた観点であり、分類の仕方もそれぞれであるが、本論文では次のように分類する。

《引き起こし》：使役主体の何らかの動作がきっかけとなり、それによって使役対象が何らかの動作・変化を引き起こす。

【母親が子供に命令して部屋を掃除させる】（意図的な引き起こし）

【子供が毎日遅く帰ってきて親を心配させる】（非意図的な引き起こし）

《許可》：使役対象が望む動作を行うにあたり、使役主体がそれを行うことを許す

【母親が留学したいという子供をアメリカへ留学させる】

《放任》：使役対象が行う動作、または使役対象の何らかの変化に対して使役主体が積極的にかかわらない。

【母親がまだ寝ている子供をそのまま寝させる】（意図的な放任）

【母親が子供を戦争で死なせる】（非意図的な放任）

分類の大きな手がかりとして、動作のきっかけが使役主体と使役対象のどちらにあるかということに重きをおいており、佐藤（1986）を大いに参考にしている。佐藤（1986）は、先の 2.1.2 節で紹介したように、「V-サセル」が表す意味を考える際に、動作の源泉（動作を引き起こすきっかけ）が使役主体と使役対象のどちらにあるかによって大きく分け、さらに動詞の意志性や肯否の形（みとめの形/うちけしの形）によって意味を分類している。しかし、本論文では、動詞が意志的なものであるか否かについては問題にしない。そのため、佐藤のいう《変化の引き起こし》と《放任》はそれぞれ上の《引き起こし》と《放任》

の中に含めるということになる。「V・サセル」の研究において、動詞 V が意志的であるかそうでないかは大きな問題であり、それによって使役の意味を分けて考えることは充分有意義なことだと思う。しかし、「V・サセル」の形・機能による使役の意味の特徴を明らかにする本論文の目的から考えると、現在のところ、V の意志性によって分けて考えることがそれほど有効ではないので分けることはしない。さらに、佐藤（同）分類の観点の一つとした動詞の肯否の形、すなわち、みとめの形であるかうちけしの形であるかについても本論文では特に問題にしない<sup>10</sup>。

次に、もう一つの観点、観点Ⅱからは、2.1.2 で紹介した早津（2006）に倣い、《つかいだての使役》と《みちびきの使役》に分類する。この観点からは、意志的な動作の引き起こしを表す「V・サセル」が考察対象になり、V が無意志動詞であるものは対象にはならない。しかし、早津（同）の考察は使役主体と使役対象がヒトである「V・サセル」の大部分をとらえていること、そして、本論文で考察の対象としている用例の中に V が意志動詞であるものが大部分を占めていることから、本論文での「V・サセル」の意味を考える上での一つの観点としてとらえ、考察したい。

「V・サセル」を述語とする文は、おおざっぱに言えば、使役主体が使役対象に何らかの働きかけ（かかわり）と、それを受けた使役対象が行う動作という二つの複合的な事態を一つの文で表すことができる。上にあげた二つの観点から「V・サセル」の意味を考えることは、使役文が表す、使役主体が使役対象に対する何らかの動作と、使役主体からの何らかの動作を受けて使役対象が行う動作という二つの事態（複合的な事態）から考えることにつながるのではないかと思う。

ここまで述べた、使役の意味における二つの観点（「観点Ⅰ」「観点Ⅱ」）を簡単にまとめると、次のようになる。

「使役の意味（観点Ⅰ）」：使役主体が使役対象の行う動作に対してどのようにかかわっているのか、に注目した考察

分類－《引き起こし》《許可》《放任》

「使役の意味（観点Ⅱ）」：使役対象が行った動作の結果が誰のためのものであったのか（使役主体のためなのか、使役対象のためなのか）、に注目した考察

分類－《つかいだての使役》《みちびきの使役》

---

<sup>10</sup> それは、今のところ、肯定の形「V・サセル」と否定の形「V・サセナイ」によって文中での機能が大きく異なるとは思えないからである。

このような二つの観点からの考察が、日本語の使役文の意味を全体的にとらえることになるのではないかと考える。

## 第Ⅱ部 文中の形・機能による「V-サセル」

「V-サセル」はふつう次のように様々な形・機能をもって文中に現れる。

- (ア) 母親が子供に掃除をさせて部屋をきれいにする；中止形・連用修飾
- (イ) 母親が子供に掃除をさせると、子供は一時間かけてきれいにした；条件形・仮定条件節
- (ウ) 母親が子供に掃除をさせる；終止形・単文の述語
- (エ) 母親が子供に頼んで掃除をさせた；終止形・複文の主節の述語
- (オ) 母親が子供に掃除をさせた部屋は一番奥の部屋だ；連体形・連体修飾

1.2 節で述べたように、従来の「V-サセル」の研究では、このような「V-サセル」の文中における形・機能に注目することはほとんどなかった。そこで、この第Ⅱ部では「V-サセル」の文中での形・機能に焦点をあて、それによる使役の意味、さらに構文的な特徴を探ることを試みる。本論文ではとくに上の（ア）～（エ）の類、すなわち、「V-サセル」が中止形であり、かつ連用修飾の機能を果たしているもの（（ア）－「連用の形の「V-サセル」」）、「V-サセル」が条件形でかつ仮定条件節の機能を果たしているもの（（イ）－「条件の形の「V-サセル」」）、「V-サセル」が終止形であり、単文の述語、および複文の主節述語として現れるもの（（ウ）（エ）－「終止の形の「V-サセル」」）をとりあげ、それぞれ第3章、第4章、第5章で考察を行う。

### 第3章 連用の形で用いられる「V-サセル」

「V-サセル」が文の中で用言を修飾するという連用修飾の機能を果たしたり複文の従属節になったりするものの中で、「V-サセテ」、「V-サセ」、「V-サセナガラ」の形で用いられる「V-サセル」（以下、「連用の形<sup>11</sup>の「V-サセル」）がどのような使役の意味を表すのかその特徴を考察する。

これまで、動詞の「V-シテ」「V-シ」「V-シナガラ」（「V-サセル」ではなく単なる「V」の諸形式）について、主に主節事態とどのようなかかわりを持つのかという観点から多くの研究がなされている。その中で、言語学研究会・構文論グループ（1989a,b）は、従属節の「～シテ」と「～シ」とは主節とのかかわりが異なることに注目し、これらの形と主節との関係について詳しく考察している。言語学研究会・構文論グループ（同）では、「V-シテ」を「第二なかどめ」とよび、「V-シ」を「第一なかどめ」とよんでいる。そして、「従属的な関係のなかにある、ふたつの動作・状態は第二なかどめの形で表現されるのにたいして、非従属的な関係のなかにあるそれは、第一なかどめの形で表現されているのである。」（1989a：14）と述べている。たとえば、次の①の「山に行って」と「木を刈る」事態とは従属的な関係（「山に行って、（その山で）木を刈る」）で結ばれているのに対して、②の「山に行き」と「海へ行く」は並列的な関係で結ばれている。

①今日は山に行って木を刈る。

②今日は山に行き、明日は海へ行く。

さらに、「～シナガラ」の用法として、先行研究では、「付帯状況」と「逆接」を表すとされている（益岡・田窪（1992）、三宅（1995）など）。下の③の「テレビをみながら」は「付帯状況」の例であり、④の「わかっていながら」は「逆接」の例である。

③テレビを見ながらご飯を食べる。

④わかっていながら知らないふりをする。

本章では、「～シテ」「～シ」「～シナガラ」と主節とのかかわりも念頭に置きながら、連

---

<sup>11</sup> 本論文では、「V-サセル」の形だけでなく、文中における機能に注目しているため、「連用形」ではなく、「連用の形」とよぶ。

用の形の「V-サセル」がどのような使役の意味を表すのか考察する。

### 3.1 使役主体と使役対象の種類（ヒト/モノ/コト）

まず、連用の形の「V-サセル」は、使役主体と使役対象としてどのようなものが現れるのか、すなわち、使役主体と使役対象として立つヒト、モノ、コトがどのような分布で現れるのかその分布をみると、ほかの形式（後で述べる条件の形、終止の形の「V-サセル」）とは異なる傾向がみられる。考察の対象とした用例における分布を下の表に示し、それぞれの例を一つずつあげる。

表 4：連用の形の「V-サセル」における全体の分布

使役主体	使役対象	「V-サセテ」	「V-サセ」	「V-サセナガラ」	合計
ヒト	ヒト (a)	286	453	23	762
	モノ・コト (b)	90	87	48	225
	ヒトの部分 <sup>12</sup> (c)	478	278	160	916
モノ・コト	ヒト (d)	2	61	0	63
	モノ・コト (e)	19	79	5	103
	モノ・コトの部分 (f)	32	19	9	60
その他 <sup>13</sup>		14	8	2	24
合計		921	985	247	2153

(a) 直貴の隣にいた男が、彼に無理矢理コップを持たせ、そこに日本酒を注いだ。(手紙)

(b) 碇の目の前にそれ（プリント）を滑らせて、本間は言った。(火車)

(c) 加奈子は腰を浮かせながら、教え諭すような顔と声で言った。(ビタミン F)

(d) 街のうつくしさ、物価の安さ、内地にいるよりも奢った生活が、私をすっかり満足させ、その満足  
足を結婚生活にたいする満足だと考えていました。(海と毒薬)

(e) 秤にかけられた金物の籠の中で黒鯛が夕日を煌かせて跳ねている。(潮騒)

<sup>12</sup> 「部分」としたのは、使役主体がヒトである場合、身体部位（目、手など）、内面（心、気持ちなど）、生産物（足音、汗など）のようなものをいい、使役主体がモノである場合はその部分の一部分に属するもの、たとえば「(車の) 車体」、「(家の) 屋根」、「電気(の 明かり)」のようなものを言う。一方で、使役主体の身体・内面の一部ではない持ち物、たとえばハンカチ、メガネのようなものは「モノ」としてとらえた。

<sup>13</sup> 「その他」に分類したのは、使役対象が車などの乗り物である場合と、使役主体が不明な場合である。

(f) 地下鉄はまるで息を整えるように、モーターの音を高鳴らせて停車していた。(地下鉄に乗って)

表 4 で示したように、使役主体と使役対象として現れるもの（ヒト/モノ/コト）の分布に特徴がみられる。それは、使役主体と使役対象がともにヒトである場合（(a)）が最も多いとは言えないということである。連用の形の「V-サセル」の場合、全体としては使役主体がヒトで、使役対象が使役主体であるヒトの部分に相当するものが来る場合（(c)）が多く、各形式において「V-サセテ」が 921 例中 478 例で 51.2%、「V-サセ」が 985 例中 278 例で約 27.8%、そして、「V-サセナガラ」は 247 例中 160 例で約 64.7%を占める。一方、使役主体と使役対象がともにヒトである場合は、全体の中で「V-サセテ」は約 31%（921 例中 286 例）、「V-サセ」は約 46%（985 例中 453 例）、「V-サセナガラ」は約 9.3%（247 例中 23 例）に過ぎない。連用の形の「V-サセル」におけるこのような使役主体と使役対象の種類による偏りも、一つの特徴としてあげることができるだろう。

### 3.2 連用の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点 I）

前節で連用の形の「V-サセル」の使役主体と使役対象に現れるものにどのようなものがあるのかその分布を示したが、ここでは、次の例のように、使役主体と使役対象がともにヒトである場合の連用の形の「V-サセル」、すなわち「V-サセテ」「V-サセ」「V-サセナガラ」の形がそれぞれどのような使役の意味を表すのかみていく。

太郎が花子にチャーハンをつくらせて食べた。

太郎が花子をソファーに座らせ、お茶を振舞った。

太郎が花子に手伝わせながら荷物を運んだ。

#### 3.2.1 「V-サセテ」

##### 3.2.1.1 《引き起こし》

「V-サセテ」の場合、ほとんどのものが使役主体が望む事態の実現への積極的な働きかけにより使役対象が使役主体の意図通りに動作を行なう《引き起こし》の意味を表す。以下、できる限り構文的な特徴をあげながら、具体的にみていく。

【1】まず、例文（1）～（3）は、文中に使役主体が使役対象に対してどのように働きかけたかという働きかけの具体的なしかた（「命じて」、「注文して」、「押しつけるように」）

が現われていて、《引き起こし》の意味として解釈できるものである。

- (1) 吉田長官と反対に参謀長の高橋少将は大酒飲みで、葱の白いのが好物で、コックに命じて生葱に味噌を出させて始終酒を飲んでいる。(山本五十六)
- (2) 「大和見立先生の外科はカスパル直系の外科学です。そやよって道具類一切は和蘭陀式で、儂は同じものを注文して作らせて持って帰りました。(後略)」(華岡青洲の妻)
- (3) 「じゃ、社長さんはまず日本酒で。さ、どうぞ」と、おちょこを押しつけるように持たせて、徳利からみなみと注ぐ。(女社長に乾杯！)

これらは使役主体が主節に現れる事態を実現させるために必要な動作を使役対象に行わせる働きかけである。たとえば、(1)は、使役主体の「高橋少将」が主節の「お酒を飲む」ことをするのに生葱と味噌が必要だと思い、使役対象の「コック」に「生葱と味噌を出す」ように「命じた」のである。また、(2)は使役主体の「儂」が「(道具類を) 持って帰る」ことを実現したいと思い、使役対象に「(道具類を) 作る」ことをさせるために「注文する」という働きかけを使役対象に行ったのである。このように、使役主体が実現したい事態のために使役対象に働きかけたという具体的な働きかけが文中に明示されているということから、これらは《引き起こし》の意味を表すと言える。

【2】また、上のように、使役主体の積極的な働きかけが文中に現われないものの、主節の述語が使役主体の主節の動作を実現させたいという積極的な意志を表すものがある。これらは主節に「～つもり」、「～ため」、「～よう」などの意志を表すモーダルな形や、「目的」という意志にかかわる名詞が現れ、主節に現れる事態を実現するという使役主体の積極的な意志を表している。

- (4) 「いずれにしても、こういうわびしい連れこみ旅館にきて寝物語に交わした話ととられますから恐喝罪は客観的に成立しませんよ。もしそのつもりで、わたしに五千万円の領収証や念書を書かせて利用なさるつもりでしたら、おやめになったほうがいいと思います」(黒革の手帖(上))
- (5) 「君は、自分のやり方を他人に承認させてさ、そりゃ、そうだ、そりゃごもつともだ、と言ってほしいために、わざわざ我々を呼びつけたんだな」(太郎物語・高校編)
- (6) まず、追手を手間どらせて、覚慶門跡一行をできるだけ遠くへ逃がすことが目的である。(国盗り物語・織田信長)



- (7) 吾一は部屋の真ん中で海軍体操を始めた。<sup>イサウサヒクッシンシツキョシウンドウ</sup>位相差臂屈伸膝挙肢運動だ。(中略) 日系人が中国人を使って自分を陥れるつもりなのだ。ここを日本だと思い込ませ、油断させて軍極秘を聞き出そうという算段だろう。(僕たちの戦争)

(4) と (5) は「V-サセテ」の V が意志動詞であり、(6)、(7) は無意志動詞のものである。V が意志動詞の場合、使役主体が働きかけた結果、使役対象が意志的に行う V の動作は主節の事態の実現のための手段として用いられている。一方、「V-サセテ」の V が無意志動詞の場合、使役対象が意志を持って V という動作を行ったとは言えず、使役主体の何らかの働きかけが使役対象を無意志的な動作・状態に導くことで主節に現われる使役主体の望む事態を実現させようとしているのである。上の例で説明すると、V が意志動詞の (4) は話の聴き手である使役主体が「(使役対象である) わたし

が書いた領収書や念書を利用する」ために、「わたし」にそれらを「書く」ように働きかけている。V が無意志動詞の (6) も使役主体が「覚慶門跡一行をできるだけ遠くへ逃がす」という使役主体にとって都合のよいことを実現するために、使役対象の「追手」が「手間取る」ように何らかの働きかけを行ったのである。いずれにせよ、これらは使役主体自身が望む事態の実現のために使役対象に V という動作を行うようにさせている点から《引き起こし》の意味を表していると言える。

【3】さらに、文中に上のような使役主体の主節の事態を実現しようとする積極的な働きかけが現われていないものでも「V-サセテ」が《引き起こし》の意味を表しているとみなせるものがある。

- (8) (山口は)飛行場にまで<sup>バツター</sup>精神注入棒を持ち出し、いきなり全員を整列させて尻を殴りつける。(僕たちの戦争)
- (9) 「(大家さんが) あたしたちを立ち退かせて、更地にしてもっと高い値段で売るわけよ」(白夜行)
- (10) しかし(波子が) 総会屋<sup>14</sup>に金を出させて「サンホセ」という派手な店を開いたのは、あきらかに「カルネ」を見返してやろうという魂胆からだ。(黒革の手帖(下))
- (11) 中央官庁は、係官を出張させて買い占められた棕櫚の繊維の経路をたどらせた。(戦艦武蔵)

<sup>14</sup> この「総会屋」、および例(11)の「中央官庁」は組織を表すものであるが、本論文では組織は人の集合である点をとらえて、「ヒト」として扱う。

- (12) 「へええ、殊勝な心がけだね、それに比べると教授たちの欲の皮の厚いこと、一昨日、東教授は、事務の女の子に手伝わせて、ビールからウイスキー、日本酒、その他もろもろの中元の品を車に運ばせているのを見たが、あんなに沢山、シーズン毎に貰ってどうするんだろう、他人ごとながら気になるよ」(白い巨塔 (一))

これらがなぜ《引き起こし》の意味を表していると言えるのだろうか。それは「V-サセテ」と主節との意味的なかわり、すなわち、「V-サセテ」と主節の事態が意味的に密接なかわりを持っているということが関係していると思われる。その根拠の一つとして、上の文はいずれも「V-サセテ」の主語と主節の主語が同じ人、すなわち使役主体であることがあげられる<sup>15</sup>。そして、「V-サセテ」の主節の述語のほとんどが具体的な動作・状態を表しているもので、その主節の具体的な事態・状態は使役主体が実際に実現させたいできごとである<sup>16</sup>。使役主体は主節に明示されている事態の実現のために使役対象に働きかけ、主節の事態の実現のための何らかの動作を行わせているのである。上の例をもって説明すると、(8)は使役主体の「山口」が「全員の尻を殴りつける」ために使役対象の「全員」を「整列させた」のであり、(10)は使役主体の「波子」が「派手な店を開く」ために使役対象の「総会屋」に「お金を出させた」のである。収集した「V-サセテ」の用例のほとんどが、このように使役主体が主節に明示されている事態の実現のために使役対象にそれに必要な動作をさせており、その使役対象にさせた動作を従属節の「V-サセテ」で表している。

そして、(11)と(12)をみると、主節の述語も「V-サセル」の形で現れ、使役主体は使役対象に主節の「V-サセル」ことを実現したいという意図を持ち、その実現のために従属節のVの動作をさせている。(11)の場合、使役主体の「中央官庁」が使役対象の「係官」に「棕櫚の繊維の経路をたどらせる」ために「出張させた」のである。使役主体と使役対象がヒトである「V-サセテ」の286例の中で主節の述語も「V-サセル」のものは60例あったが、2例を除き、すべてが(11)と(12)のように「V-サセテ」が主節の事態のための動作であった<sup>17</sup>。

<sup>15</sup> このことは使役の形がついていない「V-シテ」形も同じである。言語学研究会・構文論グループ(1989a)では、「第二なかどめ(本論文でいう「V-シテ」)の形によってふたつの動詞がくみあわさっているばあい、そのふたつの動詞によってさしだされる、ふたつの動作のし手は、同一であることが圧倒的におおい。」(p.42)と述べている。

<sup>16</sup> 次のような「V-サセテ」の主節が具体的な動作・状態を表わさないものは少ないのだが、これらも主節の形が「～つもり」「～しようと」のようなモーダルな形であり、使役主体の積極的な意志が現れている。

- ・「答えてよ。あたしを妊娠させて、どうするつもりだったの？結婚もしていないのに、子供だけ作るなんて、そんなおかしいと思わないの？」(手紙)
- ・令子は何か言いかけた言葉を口の中にとどめると、そのまま黙り込んでしまいました。そんな年寄りのおとぎ話を俺に聞かせて、どうしようというのだ。(錦繡)

<sup>17</sup> 次のものは主節の述語も「V-サセル」であるが、従属節「V-サセテ」が主節の事態のための動作とは言

これらは主節に現われる、使役主体が望む事態の実現のために使役対象に働きかけて V という動作を行わせているということから、「V・サセテ」が《引き起こし》の意味を表すとみなすことができる。

〔4〕一方、次のように主節の事態が使役主体自身でなく使役対象のための事態であり、使役主体が使役対象のための動作を実現するために V という動作をさせているものがいくつか見られる。この場合、(13) (14) のように主節の述語が「V・シテクレル」の形で現れると、その意味がよりはっきりする。

(13) 百姓は光秀を家のなかに入れ、カマチにすわらせて、食物を与えてくれた。(国盗り物語・織田信長)

(14) 「そんなに酔っぱらって。ほら、入った」先生は溜息をつきながらも、私を立たせて部屋の中に入れてくれた。(きっと君は泣く)

これらは、使役主体が望む事態が使役主体自身のためでなく、使役対象のための事態であるという点では上で述べた (1) ～ (12) とは異なるものの、主節の事態を実現するために使役主体が使役対象に働きかけ、使役対象に V の動作をさせることは上のものと同様である。つまり、この場合の「V・サセテ」も《引き起こし》の意味を表している。

### 3.2.1.2 《許可》

「V・サセテ」の用例の中に、《許可》の意味として解釈できるものは次の 2 例しかみあたらない。

(15) 「法治国である以上法に従うのは致し方ない。だが女医者の場合は女の医者は困るというだけで、“女が医者になってはいけない”という条文はない。ない以上は受けさせて及第すれば開業させてやるのが筋だ。(花埋み)

---

えず、それぞれ並列的な関係、または単なる時間的な継起関係で結ばれているものである。しかし、使役主体と使役対象がヒトである「V・サセテ…V・サセル」の中にこのようなものはこの 2 例のみであり、他に見当たらない。

・「そうじゃないんです。うちにいると居心地悪くしたんです。茶碗洗わせて、掃除させて、風呂場のタイル磨きまでやらせたから。(太郎物語・大学編)

・「好彦は、明日、遠足なんですけど、ちょっと風邪気味のようですから、早く食事をさせ<sup>やす</sup>て、寝ませましたの」(白い巨塔 (一))

- (16) (村上さんは) 病棟で最高齢にもかかわらず、今もって配膳当番をしている。テーブルを拭き、食器を並べるだけの作業だが、決して若いものには任せない。一度ムラカミさんが風で熱を出したとき、ストさんが代役を申し出たことはあった。一日だけやらせて、二日目からは熱をおして当番についてしまった。(閉鎖病棟)

### 3.2.1.3 《放任》

「V-サセテ」が《引き起こし》以外の意味をもつ場合が若干見られる。次のものは《放任》を表しているものである。ただし、収集した用例の中ではこの3例しか見られなかった。

- (17) 性にあわぬ姉のふるまいを妻が訴えるとき、彼はわずかに顔をしかめた。といって、自分が腰をあげて解決に乗りだし、事を一層こんがらからせたりする気にはとてもなれなかった。せめて真平御免な波風が立たぬよう、母親を鄭重にあつかい、院代の言うことにはただ頷き、姉にも好き勝手にふるまわせて干渉はしなかった。(楡家の人びと)
- (18) 「(前略) こないだもお母はんの法事で妹たちが寄ったとき、話す話が姑の悪口ばかり。云えば気が晴れるかと思うて、云わせるだけ云わせて聞き役してましたけども、女二人の争いはこの家だけのことやない。(後略)」(華岡青洲の妻)
- (19) ゆみこが、「ノラが人になつくことって、まずないらしいから、その子ずっと今の状態を楽しんでいられるんじゃない？」と猫にしたいことをさせて放っておくようなことを言うものだから、人にも猫にも同じような言い方をすると思った。(プレーンソング)

これらは使役主体が使役対象の動作を放っておいているということが、文中に副詞((17)の「好き勝手に」、(18)の「云わせるだけ」)や主節述語の「V-シテオク」形((19)の「放っておく」)で明示されている。さらに、(17)、(18)の場合、副詞だけでなく、主節に現われている述語(「干渉はしなかった」、「聞き役していた」)が表す事態も使役対象のVの動作に対して《放任》したという具体的な使役主体の態度を表わし、従属節の「V-サセテ」と主節の事態はいわば対照的な関係で結ばれている。

さらに、使役主体が使役対象の動作に対して何も手を加えていない《放任》には、それが意図的ではなく、非意図的である場合がある。上にあげた(17)から(19)の例が《意図的な放任》であるとすれば、下の(20)から(24)は《非意図的な放任》と言えるものである。

- (20) 「みなにいやな気分をおこさせてすまないが、もうしばらく我慢をしてほしい。(後略)」  
(ビルマの豎琴)
- (21) 「いえ、とんでもない。お時間とらせて申し訳ないのはこっちのほうだ」(火車)
- (22) 「和恵さんによろしく言っといてくれよ。翔馬にケガさせて悪かった、って」(ビタミン F)
- (23) 「ごめんなさい、待たせて……」(太郎物語・高校編)
- (24) 「前途有為の若者を大勢死なせて、俺のような奴は無間地獄に堕ちるべきだが、地獄でも入れてくれんかも知れん」(山本五十六)

上の例からわかるように、(20)～(23)のように主節に評価的な形容詞(「すまない／申し訳ない／悪い」)、もしくは(24)のような評価的な意味を表す動詞述語が現われる(いずれも好ましくない、マイナスの評価を表すものである)という構文的な特徴をもつ場合、その文は《不本意ながらの放任》を表す。そして、この場合の「V-サセテ」のVのほとんどが使役主体の無意志的な動作を表すものである。

しかし、このような《不本意ながらの放任》を表す「V-サセテ」も17例しかなく、上の《放任》の3例と合わせても使役主体と使役対象がヒトである「V-サセテ」の用例全体(286例)を占める割合はごくわずかである。

以上、「V-サセテ」がどのような使役の意味を表すのかみてきた。対象とした用例の中に、「V-サセテ」で現れる文は《引き起こし》を表すものがほとんどであった。《放任》および《放任》の中の《非意図的な放任》を表すものが少しあったが、とりわけ《許可》を表すものが極端に少ないのが特徴である。

### 3.2.2 「V-サセ」

#### 3.2.2.1 《引き起こし》

使役主体が使役対象に意図的に働きかけてVの動作をさせる《引き起こし》の意味を表すものとして次のようなものがある。

まず、次のものは使役主体が使役対象に積極的に働きかけたということが文中に明示されていて(「強制的に」、「女中を呼んで」、「「あなたは、こちらでございますよ」」)、《引き起こし》の意味であることがはっきりわかるものである。

- (25) コンスタンティノープル攻略によって、陸海両面での大進攻の鍵を獲得したマホメッド二世は、それを使う時間を無駄にしなかった。コンスタンティノープルにあった教会を次々とモスクに改造させ、トプカピ宮殿の建造を命じ、トルコ人だけでなくギリシア人もユダヤ人も強制的に移住させトルコ帝国の首都を、アドリアーノポリから、イスタンブルと公式には名の変ったコンスタンティノープルへ移す準備を着実に進めながら、軍事行動でも、敵に衝撃から立ち直る時間を与えなかったのである。(コンスタンティノープルの陥落)
- (26) 内山は女中をよんで硯箱をはこばせ秋山大治郎の道場周辺の見取図を描き、三浦へわたした。(剣客商売・まゆ墨の金ちゃん)
- (27) その正式な晚餐の用意に、菊川昇がやや戸惑いするように、扉に近い席に座りかけると、／「まあ、そんな端近になどいけませんわ、どうぞ、正面にお坐り遊ばして——」／香水を匂わせながら、唄うような声で云い、東が、菊川の向い側に坐りかけると、／「あら、あなたは、こちらでございますのよ」／菊川の隣に坐らせ菊川の真向いは娘の佐枝子の席として空け、政子はその隣へ坐った。(白い巨塔 (一))

また、主節の述語が、「V-サセル」、または「～よう」、「～たい」のような意志的な動作を表す形で現われ、主節の事態が使役主体の実現したい動作が表されていて《引き起こし》であることがわかりやすい場合がある。

- (28) 何故あの時、博士がこの公式を書き付けたのか、繰り返し考える。怒声を上げるでもなく、机を叩いて脅すでもなく、ただひとつの式を書き残すだけで、博士は未亡人と私の争いを収めてしまった。結果的には、私を家政婦に復帰させルートとの交流を復活させた。(博士の愛した数式)
- (29) その男たちは皆、昔の友人である。彼はこまかく気を使っていた。女たちを男たちの間に坐らせ座を賑やかにしようと試みた。(砂の上の植物群)
- (30) ロンドン軍縮予備交渉から帰国する山本五十六を、無冠のリッペントロップが強いてベルリンに立ち寄らせヒットラーに会わせようと試みた時から、ちょうど三年後であった。(山本五十六)

これらは主節の事態の実現のために使役主体が使役対象にある動作 (V) をさせていて、従属節の「V-サセ」は主節の事態の実現のための手段・方法であると言える。たとえば、(28)

の場合、【博士】が【(博士と) ルートとの交流を復活させる】ための一つ的手段として【私】を【家政婦に復帰させた】のであり、(29) の場合、主節の主体の【彼】が主節の事態である【座を賑やかにしよう】という目的をもって【女たち】を【男たちの間に座る】ように働きかけたのである。

また、上のものとは違い、《引き起こし》を表すことが構文的にはっきりしなくても《引き起こし》の意味に解釈できるものがある。

- (31) そして翌々日の十一月十三日、南遣艦隊を除く各艦隊の司令長官、参謀長、前任参謀らを岩国海軍航空隊に参集させ作戦命令の説明と打合せとを行い、開戦概定期日は十二月八日であること、機動艦隊主力は千島列島択捉島の単冠湾に集結ののち、十一月下旬同湾を抜錨し北方航路をとってハワイに向うべきことなどを示した。(山本五十六)
- (32) (鵜飼は患者を) 長椅子の上に仰向かせ腹部を触診して、肝臓、胃の工合を調べてから、血圧計のマンシェットを右腕に巻いて血圧を測定すると、一八〇ミリであった。(白い巨塔 (一))
- (33) ロ々に勝手なことを云いながら、木箱からビールを出し、生ぬるいまま、かまわず飲む者もいれば、若い医局員に氷を貰って来させコップの中へ氷を入れてまでして、冷やして飲む者もいる。(白い巨塔 (一))
- (34) さっそく、日護上人は寺僧に食事をつくらせ赤兵衛、杉丸をまじえて馳走した。(国盗り物語・斎藤道三)

これらの例を見ると、主節に明示されている事態は使役主体自身の動作であるが、その使役主体の動作が使役対象、もしくは動作対象とかかわっている動作である。すなわち、(31) の場合、主節の【作戦命令の説明と打ち合わせを行う】動作の相手が使役対象の【各艦隊の司令長官、参謀長、前任参謀ら】であり、(33) の場合、動作対象の【氷】を主節に現れている【コップの中に入れる】ために【医局員】に【貰って来る】ように働きかけている。つまり、主節に明示される使役主体が実現させたい事態を実現させるために必要である準備的な動作(「V・サセル」)を使役対象に働きかけて行わせているのである。準備的な動作を使役対象に行わせたという働きかけを「V・サセ」が表していることから、「V・サセ」が《引き起こし》の意味を表していると言える。

これまでの例は「V・サセ」の V が意志動詞の例であったが、V に無意志動詞が用いられ

ている「V-サセ」も見られる。

- (35) このあと義昭は酒をくだして座をやわらげると、藤吉郎は戦場の滑稽譚などや市井の女ばなしなどを持ち出して大いに義昭を笑わせ二時間ほど歓談して退出した。(国盗り物語・織田信長)
- (36) 彼奴等は今まで何べんも党は壊滅したとか、根こそぎになったとか云ってきた。それを自分たちの持っている大きな新聞にデカデカと取り上げて、何も知らない労働者にそのことを信じこませ大衆から党の影響を切り離すことにムキになってきた。(党生活者)
- (37) 戦争に傷ついて帰ってきた父親を裏切って、失望させ、六歳も年下の、子持ちの男と暮らすという母親の生き方を、私が許せなかっただけです。(閉鎖病棟)
- (38) 図々しい人間は、その図々しさを周囲に慣れさせどんどん図々しくなっていく。(義父のヅラ)

考察の対象としている「V-サセ」(453 例)の中に、Vが無意志動詞であるものは27例(約5%)みられたが、これらの場合、使役対象がVという動作を意志的に行うのではない。使役主体の何らかの働きかけによって使役対象が無意志的な動作を誘発している。その使役主体の働きかけは、(35)から(37)のように、文中に明示されている場合もあれば((35)「戦場の滑稽譚などや市井の女ばなしなどを持ち出して」、(36)「(党が壊滅したとか、根こそぎになったとかという話を)大きな新聞にデカデカと取り上げて」、(37)「裏切って」、(38)のように明示されない場合もある。このように使役主体が使役対象に誘発させた無意志的な動作は、使役主体が望む動作、もしくは使役主体が働きかけると、使役対象がこうなるだろうと予測した動作である。使役対象の動作が無意志的なものであるにしろ、使役主体の働きかけによって誘発された使役対象の動作が、使役主体が意図した動作であるという点において《引き起こし》に通じるものであると考えられる<sup>18</sup>。

さらに、次のようなものも構文的な特徴を見出すことは難しいが、使役主体と使役対象の人間関係と「V-サセ」の動作の性質からして、《引き起こし》の意味を表すと言えるだろう。

<sup>18</sup> 佐藤(1986)では、このように使役主体と使役対象がヒトで、「V-サセル」のVが無意志動詞であるものを《変化の引き起こし》としている。



- (39) レストランに着くと、彼を外に待たせ彼女だけが中に入っていった。(手紙)
- (40) 長い間昭八ちゃんを入院させ見舞いにも来なかったのは姉さんだった。(閉鎖病棟)
- (41) だが、有権者のなかには「あんなことを言っても、最後は慣例どおりさ」と信じない者もあった。投票の前夜、星の運動員が金を持って買収に来るはずだと、巡査を酔いつぶれさせ朝まで起きてむなしく待っていた村もあったという。(人民は弱し官吏は強し)

### 3.2.2.2 《許可》

「V・サセ」の例の中に、《許可》の意味を表すものとして、次の3例しかみられなかった。

- (42) 禅道はこころよく世話をひきうけてくれ、門前の借家にかれらを住ませ、米塩だけを提供してくれていたのである。(国盗り物語・織田信長)
- (43) いこう、いこうとせかす親之介くんたちを先にいかせ、人の少なくなった多聞寺で手を合わせる。(八日目の蝉)
- (44) 質問があれば、これも二分以内の規定で質問させ、無ければ、次の演者を登壇させるから流れるような速さで、一日平均五十題近くの研究発表がこなされて行く。(白い巨塔(一))

### 3.2.2.3 《放任》

使役主体と使役対象がヒトである「V・サセ」の中で、「V・サセ」が表す使役の意味が《放任》と解釈できるものがある。

- (45) 「だから五郎ちゃんは、どんなことがあっても次期教授にならんと、財前家における立場がなくなるやないの、財前家が月収五万七千円也の助教授のあんたに、サラリーをそのまま小遣いにさせその上、バーのツケも、財前産婦人科医院へ廻せばよいことになっているのは、五郎ちゃんが教授昇格株だと期待してはるからやわ、……」(白い巨塔 (一))

上の例では、文中に【そのまま】と主節の述語である【～ばよいことになっている】があることで「V・サセ」が《放任》の意味を表すと解釈することができる。ただし、《放任》と解釈できるものは用例の中では上の1例しか見当たらなかった。

以上、使役主体と使役対象がヒトである場合の「V-サセ」が表す使役の意味について考察した。考察の結果、ほとんどのものが《引き起こし》およびそれに準じるものを表わし、《許可》を表すものは3例、《放任》の意味を表す「V-サセ」は1例しかみられなかった。

### 3.2.3 「V-サセナガラ」

#### 3.2.3.1 《引き起こし》

「V-サセナガラ」の全用例（23例）のうち、すべてが使役主体が自らの意図を持って使役対象に働きかける《引き起こし》の意味を表す。具体的にみていくと、まず、次のように、使役主体が使役対象に働きかけたということが文中に明示されている場合（(46)の【髪結いを呼んで】、(47)の【(客を)茶室に案内し】）がある。

- (46) ある時、敏子や千代子を混えての長麻雀の果てに、女二人が、もう打ちやめにして髪結いさんに行かなくてはと言い出すと、「金出すから、髪結いに此处へ来てもらえよ」と、山本がやめさせたがらず、結局席へ髪結いを呼んで、髪を結わせながら麻雀のつづきになったことがある。（山本五十六）
- (47) 「いかが、いま一椀」といって、藤孝はくすくす笑っている。茶室に案内し、客を炉の前にすわらせながら茶ではなくとろろをすすめている自分がおかしかったのであろう。（国盗り物語・織田信長）

しかし、上のように使役主体から使役対象への働きかけが文中に明示されているものは上の2例しかなかった。そして、上の例もそうであるが、「V-サセナガラ」の使役主体と使役対象の関係をみると、使役主体が雇い主、もしくは地位が上の人など、力関係が上の人であり、使役対象は使用人、もしくは地位・力が使役主体より下の人がほとんどである。

- (48) 「十兵衛はあるか、明智の」と、信長は小姓たちに着更えを手伝わせながらせかせかと叫んだ。（国盗り物語・織田信長）
- (49) 庄九郎は、懐しいわが家のかまちに腰をおろし、美濃から連れてきた下人に足を洗わせながら「お万阿」とふりかえった。（国盗り物語・斎藤道三）
- (50) 突然、手術室につながる手術予備室の扉が開いたかと思うと、財前五郎であった。入って来るなり、手洗い消毒器の前へ寄り、診察衣を脱いだ。看護婦がすぐ消毒した手術衣を着せかけると、手術衣のうしろ紐を結ばせながら消毒石鹸で手を洗い、さらに

消毒薬で丹念に洗って、両手を前へ突き出した。（白い巨塔（一））

ところで、3.2.1 の「V-サセテ」と 3.2.2 の「V-サセ」の場合、主節の事態が使役対象、もしくは動作対象にかかわる動作である場合であった（（1）コックに明示して生葱に味噌を出させて（ソレをつまみにして） 始終酒を飲んでいる、（32）鵜飼は患者を長椅子の上に仰向け（ソノ） 腹部を触診した）。しかし、「V-サセナガラ」の例の中に、主節の事態が使役対象、もしくは動作対象にかかわるものは、上にあげた（47）の例（客を炉の前にすわらせながら（ソノ客に）とろろをすすめている）以外は見当たらない。

これらの「V-サセナガラ」の主節の事態を見ると、使役主体が動作を行うという事態が表現されているが、使役主体は主節の動作（「叫ぶ」「ふりかえる」「手を洗う」）を自分でいながら、同時に地位・身分が自分より下である使役対象に「V-サセナガラ」の V の動作を行わせている。さらに、これらの使役対象に行わせている「V-サセナガラ」の V の動作に注目すると、使役主体自身にかかわる動作である。たとえば、（48）の場合、使役主体の【信長】が【小姓たち】に使役主体自身の【着更え】を【手伝う】ことをさせる間、使役主体自身は【「十兵衛はあるか、明智の」と叫んだ】のである。「V-シナガラ」は本来、複文の従属節に現れ、主節の動作に付随する付帯的な動作を指し示すものであり、その機能が「V-サセナガラ」にも生きているのだと考えられる。このような使役主体と使役対象の関係、そして「V-サセナガラ」と主節とのかかわりから、《引き起こし》の意味がうかがえるのではないと思われる。

前節でみた「V-サセ」と同様、「V-サセナガラ」にも V が無意志動詞である場合が見られる。この場合、V が意志的な動作ではないことから、使役対象が自らの意志をもって動作を行うということではない。しかしながら、使役主体の何らかの働きかけによって使役対象に使役主体が望む無意志的な動作を引き起こすように誘導しているのである。「V-サセナガラ」の V が無意志的な動作であるにしろ、使役主体が望む変化のために使役対象に働きかけるという点においては、《引き起こし》に通ずるものであると言えるだろう。ただし、収集した用例の中に、V が無意志動詞である「V-サセナガラ」は、次の 3 例しかなかった。

- （51）私は、悲しみと喜びの二つの共存を、言葉を使わずに人間に教えることが出来た、それを妙なる音楽という、言葉では説明出来ない調べに包んで、いとも簡単に、しかも人をここちよくさせながら表現出来たということが、モーツァルトという人間の奇蹟

だったと言いたかったのですが、御主人の目に射すくめられて、ぜんぜん考えもして  
いなかった言い方で答えていたのです。（錦繡）

- (52) また、事実、自分は、そんな用事をいちども断ったことは無く、平気でなんでも引受け、へんにぎくしゃくして、犬（同志は、ポリスをそう呼んでいました）にあやしまれ不審問などを受けてしくじるような事も無かったし、笑いながら、またひとを笑わせながら（中略）彼等の称する仕事を、とにかく正確にやっていた。（人間失格）

- (53) そしてその夜、嘉津彦は店がはねてからの相手にもその女の前でほかの新顔を口説いたのだ。「ずい分ねえ」と、女給達に言わせながら<sup>19</sup>彼が義久に語ったように嘉津彦にとって一度か二度つき合い、その時は狂ったように打ち込んで遊んだ女の体は、知限りの曲を掻き鳴らして音階の狂ってしまった楽器に過ぎなかった。（灰色の教室）

### 3.2.3.2 《放任》

「V-サセナガラ」が表す使役の意味が《放任》を表すものとして読み取ることができるのは、次の1例しかなかった。

- (54) それは寒気のするような光景でもあり、体の奥が熱くなるような光景でもあった。それ以後、本を読んでいて「獲物を狙う獣のような眼」といった文章に出くわすたびに、私は、打たれながら、いや打たせながら、相手を冷たく見据えていたメデルの眼を思い浮かべ、納得することになった。（一瞬の夏）

上の例を見ると、文中に受身の形（【打たれる】）があるということによって、使役主体である【私】の積極的な意志によるものではないという読みができ、《放任》の意味を帯びるのではないと思われる。

以上、使役主体と使役対象がヒトである場合の「V-サセナガラ」がどのような使役の意味を表すかについて考察した。「V-サセナガラ」が表す使役の意味は、《放任》を表す1例を除いて、すべてが《引き起こし》を表し、《許可》、《不本意ながらの放任》を表すものは「V-サセナガラ」にはみられなかった。

---

<sup>19</sup> 本来、「言う」は無意志的な動作ではないが、(53)の例では実際「「ずい分ねえ」と言う」ように働きかけたのではなく、【「ずい分ねえ」と言わせる】が「感心させる」、「驚かせる」のような無意志的な動作として用いられていると考える。

使役主体と使役対象がヒトである場合の「V-サセナガラ」は、《表 4》に示したように、23 例しかない。少ない用例でこのような結論を出すのは性急かもしれないが、おそらく今後用例を増やしても同じ分布になるのではないと思われる。

### 3.2.4 まとめ

以上、使役主体と使役対象がヒトである「V-サセテ」、「V-サセ」と「V-サセナガラ」が表す使役の意味について動作実現の《原因局面/先行局面》に注目して考察した。それぞれの連用の形の「V-サセル」が表す使役の意味の分布を示すと、次のようになる。

表 5：連用の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点 I）の分布

使役の意味 形式	《引き起こし》	《許可》	《放任》	不明	合計
V-サセテ	260	2	22	2	286
V-サセ	448	3	1	1	453
V-サセナガラ	22	0	1	0	23
合計	730	5	24	3	762

表 5 を見ると、「V-サセテ」「V-サセ」「V-サセナガラ」のいずれの形式においても、《引き起こし》の意味に圧倒的に偏っていることがわかる。そして、《許可》を表す例は、「V-サセテ」に 2 例、「V-サセ」に 3 例しかみられない。

なお、もう一つの特徴として、「V-サセテ」には《放任》の中でも《非意図的な放任》を表すものが見られる（3.2.1.3 の（20）から（24）の例）ものの、他の「V-サセ」、「V-サセナガラ」にはみられないということがあげられる。しかし、これに関して高（2009）に述べたが、実際、「V-サセテ」が《非意図的な放任》を表す場合、「V-サセテ」の V が無意志動詞であり、主節の述語は、具体的な動作を表す動詞らしい動詞ではなく、好ましくない評価・感情を表す形容詞、もしくはそれに準じる動詞述語である場合に限られるのである。

- ・「もちろん、彦根さんの妹さんはそうではありませんでした。びっくりさせてごめんなさい。（後略）」（祝・殺人）
- ・「いろいろと手間をとらせて悪かったです」と男は言った。（世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド）

- ・「前途有為の若者を大勢死なせて俺のような奴は無間地獄に堕ちるべきだが、地獄でも入れてくれんかも知れん」(山本五十六) (= (24))

このように、主節の述語に評価・感情を表す形容詞・動詞述語が現れうるのは「V-サセテ」ならではの特徴で、他の「V-サセ」、「V-サセナガラ」の主節には現れない。

### 3.3 連用の形の「V-サセル」が表す使役の意味(観点Ⅱ)

3.2 の考察から、「V-サセテ」、「V-サセ」、「V-サセナガラ」の連用の形の「V-サセル」のほとんどが《引き起こし》を表すということが明らかになった。しかし、一言で《引き起こし》と言ってもその《引き起こし》による動作の実現が結局誰のためのものであるのか、つまり、早津(2006)のいう、動作の実現の《結果局面/後続局面》の観点から考えることができる。早津(2006)の観点については先述したが、具体的な例で簡単に説明すると、次の2例は、いずれも《引き起こし》に相当するものであるが、前者の例は動作の実現が使役主体自身のためのものである《つかいだて(他者利用)の使役》であり、後者の例は動作実現が使役対象のためのものである《みちびき(他者育成)の使役》に相当する。

- お母さんが仕事で帰りが遅いので、子供に頼んで夕飯の買い物に行かせる  
お母さんが子供の将来のために子供をアメリカへ留学させる

ここで、3.2 節で考察した《引き起こし》を表す連用の形の「V-サセル」のうち、Vが意志動詞であるものをこの観点から考察してみると、ほとんどのものが使役主体が自分自身のために、もしくは使役主体が望む事態の実現のために使役対象に働きかける、《つかいだて(他者利用)の使役》に相当する。このことは次の例を含め、これまで各節でみた「V-サセテ」((55) (56))、「V-サセ」((57) (58))、「V-サセナガラ」((59))の例をみても明らかである。

- (55) 加藤はトラックの運転手に手伝わせて荷物を運びこむと靴を脱いであがった。(孤高の人)
- (56) 群賢に試着させて買った <sup>クダン</sup> 件のスーツを、私はショップの袋ごと彼に渡した。(きっと君は泣く)
- (57) 昭八ちゃんは、チュウさんを敬吾さんと秀丸さんの間に立たせシャッターを切った。

(閉鎖病棟)

(58) 夜になって、公平は若手団員たちが共同で借りているウィークリー・マンションを訪ねた。エリに料理を作らせ缶ビールと一緒に持参した。(空中ブランコ)

(59) 頼芸は、児小姓に足もとを照らせながら長い廊下を歩いた。(国盗り物語・斎藤道三)

(55) の例は主節の使役主体の【加藤】が【荷物を運びこむ】ために【トラックの運転手に手伝う】ように働きかけた事態、(57)の例は、主節の【シャッターを切る(写真を撮る)】ことを望み、【チュウさんを敬吾さんと秀丸さんの間に立つ】ように働きかけた事態、そして(59)は、【頼芸】が主節の【廊下を歩く】という事態成立のために【児小姓に足元を照らす】ようにさせたのである。このように、使役主体と使役対象がヒトである連用の形の「V-サセル」のほとんどが、主節に明示される事態の実現のために、もしくは使役主体自身のために使役対象に働きかけるものである。

一方、使役主体が自分自身のために使役対象に働きかけて何かをさせるのではなく、使役主体が使役対象のために働きかけて何かをさせる、《みちびき(他者育成)の使役》に相当するものとして、次のようなものがある。

(60) 「どういふんだか、詳しくはわからん。只、前から不眠症になっていたらしかったんだけだね。状態がひどくなったもんで、奥さんが入院させて今、睡眠療法をさせてるらしい」(太郎物語・大学編)

(61) 百姓は光秀を家のなかに入れ、カマチにすわらせて食物を与えてくれた。(国盗り物語・織田信長)

(62) (女婢は) 又一のうしろに廻って、診察衣と服を脱がせ羽二重の長襦袢を着せて、その上に大島の袷を重ねて博多独鈷の帯を締めた。(白い巨塔(一))

(63) 自分たちの仕事に誇りを持ちたい。犯罪者を矯正させ社会復帰への道を開き、ひいては社会的脅威を取り除く—教育刑の高邁な理念は、どこへ行ってしまったのか。(13階段)

(64) 翌日、朝方はいくらか熱が治まったが、午後からまた三十九度を越す熱が現れた。状況は夜に入っても同じだった。二日間の高熱で志方は急に衰えた。眼は窪み頬は落ち、

気の故か頭髮の白さが一層増した。時たま吐き出す痰には赤い血栓が交っていた。無理に無理を重ねた体の疲れが一度に志方に襲いかかってきたようであった。湿布をし、薬を服ませながら吟子はただ神に祈り続けた。(花埋み)

- (65)「三日も眠り続けでは、手術のあとの患者の体力回復にはちょっと長過ぎるのと違うだろうか」門弟たちは一様に息を止めた。誰も答えるものはなかった。青洲の性格を知悉している彼らは、人体実験がこれで終ったとは考えていなかった。これらの若い医者たちは、加恵が目をさましただけでは単純に喜びきれなかった。しかし加恵に食べさせながら自身も音をたてて井から粥を啜っていた青洲はまだ上機嫌で喋り続けていた。(華岡青洲の妻)

(60)、(61)は「V-サセテ」の例、(62)、(63)は「V-サセ」の例、そして(64)、(65)は「V-サセナガラ」の例であるが、それぞれの形式においてこのような《みちびき(他者育成)の使役》を表すものは少数である。特に、「V-サセナガラ」においては、上の2例しかみられない。さらに、(62)～(65)の「V-サセル」((62)【(うしろに回って)脱がせる】、(63)【更生させる】、(64)【服ませる】、(65)【食べさせる】)は使役動詞というより他動詞に近いものであるという特徴がみられる。

これまでの例は、連用の形の「V-サセル」が《引き起こし》を表すものであったが、《許可》《放任》を表すものの中には、どちらか判断できるものもあるものの、下の(66)の例のみが《つかいだての使役》を表し、他は《みちびきの使役》を表すものであった。

- (66) (村上さんは) 病棟で最高齢にもかかわわず、今もって配膳当番をしている。テーブルを拭き、食器を並べるだけの作業だが、決して若いものには任せない。一度ムラカミさんが風で熱を出したとき、ストさんが代役を申し出たことはあった。一日だけやらせて、二日目からは熱をおして当番についてしまった。(閉鎖病棟)

- (67)「法治国である以上法に従うのは致し方ない。だが女医者の場合は女の医者は困るというだけで、“女が医者になってはいけない”という条文はない。ない以上は受けさせて及第すれば開業させてやるのが筋だ。(花埋み)(= (15))

- (68)「(前略) 財前家が月収五万七千円也の助教授のあんたに、サラリーをそのまま、小遣いにさせ、その上、バーのツケも、財前産婦人科医院へ廻せばよいことになっているのは、五郎ちゃんが教授昇格株だと期待してはるからやわ、(後略)」(白い巨塔(一))



以上、3.2 で考察した連用の形の「V-サセル」のうち、V が意志動詞である場合を、早津（2006）の《つかいだての使役》《みちびきの使役》の観点から考察した結果、次のような結果が得られた。

表 6：連用の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅱ）の分布

	《つかいだての使役》	《みちびきの使役》	不明	合計
「V-サセテ」	160	39	29	228
「V-サセ」	288	61	36	385
「V-サセナガラ」	20	2	0	22
合計	468 <sup>20</sup>	102	65	635

このように、使役主体と使役対象がヒトである連用の形の「V-サセル」のほとんどは、使役主体自身が実現したい事態の成立のために、すなわち、使役主体自身のために、使役対象に働きかけて動作をさせるものである。つまり、連用の形の「V-サセル」の場合、《つかいだての使役》に相当するものが多くあり、それに比べて《みちびきの使役》のものは少ないと言える。

早津（2006）は、《つかいだての使役》と《みちびきの使役》の違いを、まず「V-サセル」の V の語彙的な意味<sup>21</sup>、そして使役対象がどのような人であるか、動作対象と使役主体・使役対象がどのような関係にあるか、さらに、使役主体が使役対象にどのようにかかわっているかに注目して考察している。しかし、《つかいだての使役》と《みちびきの使役》の分類において「V-サセル」が文中でどのような形で現れ、どのような機能を果たしている場合にそれぞれの意味を表すかという観点からは積極的に論じられていない。ここで考察した使役主体と使役対象がヒトである連用の形の「V-サセル」のほとんどが《つかいだての使役》であるということは、「V-サセル」が《つかいだての使役》を表す場合の構文的な特徴の一つとしてあげることができると思う。

<sup>20</sup> 《つかいだての使役》と《みちびきの使役》の観点は、V が意志動詞である場合のものであり、表に示した用例の合計数も、各形式において V が意志動詞である場合の用例数である。

<sup>21</sup> 早津（2006）は意志動作の引き起こしを表す使役文の意味を考察する際に、動詞をまず、他動詞であるか自動詞であるか、そして、他動詞の場合その動作が何らかの変化を引き起こすかどうか、引き起こすのであればそれは何の変化なのかという観点から分類している。詳しくは第Ⅲ部で紹介する。

### 3.4 連用の形の「V-サセル」と主節とのかかわり

前節では、連用の形の「V-サセル」、すなわち「V-サセテ」「V-サセ」「V-サセナガラ」がどのような使役の意味を表すのか具体的に見てきた。上で確認した意味的な特徴は、それぞれの連用の形の「V-サセル」と主節とのかかわり方に大きくかかわっているのではないと思われる。ここでは、それぞれの連用の形の「V-サセル」が主節とどのような関係をなしているのか、使役動詞ではない元の動詞の「V-シテ」「V-シ」「V-シナガラ」と違いは見られないのか（「運ばせて」と「運んで」、「書かせて」と「書いて」など）少し考えたい。

本章のはじめに、連用の形「V-シテ」「V-シ」「V-シナガラ」と主節とのかかわりについてごく簡単にふれた。まず、「V-シテ」の場合、主節とのかかわりにおいてさまざまな関係を表しうるが、基本的に主節とは従属的な関係をなしている。一方で、「V-シ」の場合、主節と非従属的な関係をなしているものがほとんどである。そして、「V-シナガラ」の場合、付帯状況を表す場合と逆接を表す場合がある。それぞれの形のごく単純な例を一つずつ下にあげる。

オムライスを作って食べる。

昼間は会社で働き、夜は学校に通っている。

音楽を聴きながら本を読む。

知っていながら答えない。

ところが、動詞の使役の形「V-サセル」にこれらの形が後続した場合、主節とのかかわりにおいて少し異なる様相をみせる。

まず、「V-サセテ」に関しては、ほとんどが主節の事態の実現のための必要な動作が示されていて、主節に現れる事態とのかかわりは従属的なものといえる。それは、3.2.1 であげた例を見ても明らかであり、次のような例からもうかがえる。次の例をみると、(69) の場合、主節の動作（「奥へ案内した」）は使役対象（「二人」）に向かった動作であり、(70) の場合は動作対象（「シンデレラやアラディンのランプの話」）による使役主体の心理的な状態（「涙が出るほど笑っていた」）が明示されている。

(69) 女は笑いながら、そんな心配はいらないと云い、二人を立たせて、奥へ案内した。（さぶ）  
【二人を立たせて、その二人を奥へ案内した】

(70) ニッセンの伝えるところによれば、モオツァルトは、この歌劇の序曲を書きながらポンチを飲み、妻に、シンデレラやアラディンのランプの話をさせて、涙が出るほど笑

っていたという。(モオツァルト) [シンデレラやアラディンのランプの話をさせて  
それを聞いて涙が出るほど笑っていた]

このように、「V・サセテ」のほとんどは、主節の事態に対して従属的な事態、いわば「準備」、「契機」的な事態が現れている。ただし、対象とした用例の中には次のように主節の動作に対して従属的とは言えないもの、すなわち並列的、または対比的なものもあるが、用例全体から考えると、少数である。

- (71) 「そうじゃないんです。うちにいると居心地悪くしたんです。茶碗洗わせて、掃除させて、風呂場のタイル磨きまでやらせたから。(太郎物語・大学編)
- (72) 「うちのおふくろなんか、てんで有能じゃないよ。スカート丈、出したり縮めたりするの、考えただけでいやなんだって。だから、ひどい時には、田舎から来た友達をうちに泊めて、その人にスカート丈つめさせて、自分はいいい気になってお茶なんか飲んでぐでぐでしてんだよ。(太郎物語・大学編)

次に、「V・サセ」について考えてみる。先行研究によると、「V・シ」の場合、主節の事態に対してほとんどが非従属的な関係を表しているとしている。しかし、「V・サセ」の場合、主節との関係において非従属的なものより、むしろ従属的な関係で結ばれているものが多い。3.2.2 であげた例のほとんどを含め、次のような例もそうである。

- (73) 彼等は、昼食運搬係も兼ねていた私に、炊事場から醤油を毎日茶碗一杯ずつ持ってこさせ、それをひと息にあおって分教場の校庭を駆け足でぐるぐるまわり、そうして褐色の泡を吹いて倒れたのである。(驢馬)
- (74) 海岸につくと、役人は男たちに命じて火をたかせ、イチゾウとモキチとの濡れた体をあたためました。(沈黙)
- (75) 私はルートに仕事机の引き出しから定規を持ってこさせ、カードがばらけてしまわないように注意しながら、それを差し込んで底を持ち上げた。(博士の愛した数式)
- (76) 朝のうちはお客さんは殆ど無かったので、笠原の食うごはんのように装わして飯を炊かせ、腹につめこんだ。(党生活者)

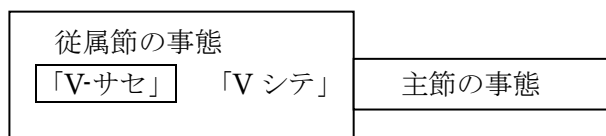
ところで、「V・サセテ」の場合、すぐ後に主節が続くことが多いのだが、「V・サセ」の例をみると、「V・サセ～する」という単純な複文構造で現れるのではなく、「V・サセ～シテ/シ ～

する」のように、「V-サセ」の後に他の従属節を含むものが目立つ。

(77) というままに、家来の十数騎にも弓に矢をつがえさせ、ぐるりと上皇の御車をとりかこみ、犬追物の競技のように駆けまわり駆けちがっては、さんざんにおどし矢を射かけた。(国盗り物語・斎藤道三)

(78) 山本は毎日見舞いに行っていたが、これは何とかしなくては徳子が参ってしまうと、ある晩徳子に、彼女の普段着の大島緋と帯とを出させ、自分でそれを着て山下の枕頭に坐った。(山本五十六)

これらの「V-サセ」は文の主節に直接かかっているものではない。すぐ後につづく従属節にかかっている。つまり、「V-サセ」で現れる事態だけでは文全体の主節の事態に対する直接的に準備的な動作を表すことができず、後に続く従属節（多くが「V-シテ」の形）と合わさって文全体の主節の事態に対する準備的な動作を表している。このような関係を簡単に図示すると、次のようになると思う<sup>22</sup>。



このように、「V-サセ」のあとに他の従属節が現れることが多いのをみると、主節とのかかわりが「V-サセテ」に比べていくらかゆるやかな関係をなしているということは否めない。言語学研究会・構文論グループ（1989b：169）は、「ふたつの動作がある目的によって統一されていて、ひとつの《活動》をなしている」場合は「V-シ」の形でも用いられるとされている。今回対象とした「V-サセ」の形の従属節を伴う文の多くは、使役主体が主節の事態を実現するために使役対象をその実現にむけて必要な動作を行わせるという事態が文全体で現れるということから考えると、ひとつの《活動》とみなすことができるだろう。そのために「V-シ」よりも「V-サセ」のほうがより従属的な関係で結ばれることが多いということだと思う。

しかし、「V-サセ」にも主節とのかかわりにおいて非従属的な関係をなしているものがある

<sup>22</sup> 新川（1990）は、動詞の第二なかどめの形（「行って」「食べて」のようないわゆるテ形）と第一なかどめの形（「行き」「食べ」のような動詞の連用形）が文の中で共存している場合、どのような関係で結ばれているのか考察していて、学ぶところが多い。

る。3.2.2.1 の (39) (40)、(41) がそうであり、次のようなものもそのように解釈できるものであるが、「V-サセ」の例全体から考えるとそれほど多いとはいえない。

(79) レストランに着くと、彼を外に待たせ、彼女だけが中に入った。(手紙)

(80) (古賀は) 志木と池上をソファに座らせ、「三号調べ室」のドアに足を向けた。(半落ち)

(81) 徹吉は彼女に睡眠剤を与えて早く休ませ、自分は一度上甲板へ出て行った。(楡家の人びと)

さらに、「V-シ」と「V-サセ」の相違点として、従属節と主節における主語の異同をあげることができる。言語学研究会・構文論グループ(1989b)によると、「ふたつの動詞が第一なかどめの形でならべられるばあい、ふたつの動作・状態の主体がたんに同一であるばかりでなく、ことになっているばあいもそれとほぼおなじぐらいあるという、文の構造上の特徴がみられる。」(p.165)と指摘しているが、「V-サセ」に関していうと、「V-サセ」と主節の動作の主語が同じである場合がほとんどで、異なる場合は次の例しかない。

(82) 登美子の産んだ孫は母を悲しませ、康子の産んだ孫は母を狂喜させる。(青春の蹉跎)

(83) (鶴飼は) 婦長に外来診察室にいる助手を呼ばせ、助手が入ってくると、「君、外来診察の方で、検尿と検血をして、中検(中央検査室)へ廻し、僕だと云ってすぐ検出するように云い、心電図をすぐとってくれ給え」(白い巨塔(一))

(84) いつもより敵機の数も多かったから、病院でも患者のうち歩ける者は歩かせ、それが出来ぬ者は担架に乗せて地下室に避難させた。(海と毒薬)

(85) 店で契約しているハイヤー会社から車をよこさせ、安島と元子は座席にならび、助手席にホステスの美津子がすわった。(黒革の手帖(上))

このように、従属節「V-サセ」と主節の主語が同じであるものが多くみられるということは、「V-サセ」は「V-シ」より従属的な事態を表しうることだろう。言い換えると、主節とのかかわりにおいては、「V-サセ」は「V-サセテ」とほぼ変わらない働きをしているともいえる。そして、このような特徴がみられるのは、「V-サセル」文がもつ複合性によるものではないかと思われる。

最後に、「V-サセナガラ」と主節とのかかわりを考えてみる。先にも述べたように、「V-シナガラ」は主に付帯状況と逆接の意味を表すとされている。対象とした用例の中の「V-

サセナガラ」と主節とのかかわりを見ると、そのほとんどが主節の事態に対する付帯状況を表している。これは「V-サセル」が具体的な動作であることがかかわっているのだろう。

「V-サセナガラ」の例の中に逆接の関係で結ばれているととらえられるものとして次の例がみられたが、この場合の「すわらせながら」は動作的というよりもむしろ状態に近いものとして解釈できる。

- (86) 「いかが、いま一椀」といって、藤孝はくすくす笑っている。茶室に案内し、客を炉の前にすわらせながら茶ではなくところろをすすめている自分がおかしかったのである。(国盗り物語・織田信長) (= (47))

このように、連用の形「V-シテ」「V-シ」「V-シナガラ」と主節とのかかわりと V が使役動詞である場合の「V-サセテ」「V-サセ」「V-サセナガラ」と主節のかかわりにいくらか違いがみられる。このような違いは、使役文がもつ、使役主体の使役対象への働きかけとそれによる使役対象の動作という複合性と大きくかかわっていると思われる。

### 3.5 第3章のまとめ

本章では、使役主体と使役対象がヒトであり、「V-サセル」が「V-サセテ」、「V-サセ」、「V-サセナガラ」の、文中でいわゆる連用の形で用いられる場合に、どのような使役の意味を表すかについて考察した。その結果、3つの形式に共通して、使役主体が使役対象に働きかける、いわゆる《引き起こし》の意味を表すものがほとんどであるということが明らかになった。さらに、《引き起こし》といっても、使役対象への働きかけは、使役主体自身のために、もしくは使役主体自身が望む事態の実現のためのものであり、これはすなわち、早津(2006)の《つかいだて(他者利用)の使役》に相当するものが多いということがわかった。

使役主体と使役対象がヒトである「V-サセル」文は、《引き起こし》、《許可》、《放任》など、いろいろな意味を表しうるが、「V-サセル」が連用の形である場合にはもっぱら《引き起こし》に偏るということは、これまで指摘されていない。また、早津(2006)の「《つかいだて(他者利用)の使役》/《みちびき(他者育成)の使役》」の観点からの論考は、様々な構文的な特徴に注目しながら考察されているものの、「V-サセル」の文中での形・機能までは考慮していない。本章で明らかにしたことは、早津(2006)の《つかいだて(他者利用)の使役》の構文的な特徴について、早津(2006)では気づかれていなかった点をさらに明らかにできたといえる。

また、本章で連用の形としてとりあげた「V・サセテ」「V・サセ」「V・サセナガラ」と主節とのかかわりをみると、V が使役動詞ではない場合の連用の形、すなわち、単なる「V・シテ」「V・シ」「V・シナガラ」との違いが確認できた。「V・サセテ」の形は「V・シテ」と同様に主節との関係において従属的な関係を表しているが、「V・サセ」の形は、「V・シ」が主節とのかかわりにおいて非従属的な関係を表すのが一般的であるのに対して、主節と従属的な関係をなしているものが多く、その点は「V・サセテ」と同じである。そして、「V・サセナガラ」の場合も、本章で考察の対象とした少ない例から考えると、「V・サセル」が動作・変化を表すものであり、状态的なものでないことから、ほとんどが主節の事態に対する付帯状況を表し、逆接を表すのは1例しかなかった。このことは動詞が原動詞（「V」）であるか使役動詞（「V・サセル」）であるかということが、その諸形式が表す本来の意味にいくらか影響を及ぼしているということを示している。

## 第4章 条件の形で用いられる「V-サセル」

第4章では、使役主体と使役対象がヒトであり、「V-サセル」が文の中で仮定条件節の機能を果たし、形としては条件の形で現れるもの、すなわち、「V-サセルト」「V-サセレバ」「V-サセタラ」「V-サセル(イタ)ナラ」がどのような使役の意味の特徴を表すのか考察する。対象とした資料、および用例の検出方法については第1章の1.4節に示した通りである。

### 4.1 使役主体と使役対象の特定/不特定性

「V-サセル」が文中に「V-サセルト」「V-サセレバ」「V-サセタラ」「V-サセル(イタ)ナラ」の、いわゆる条件形で用いられる場合、使役主体がヒトであってもそれが特定できない不特定のヒトであるものがある。条件の形の各形式における使役主体が特定のヒトであるか否かによる分布を示すと、次のようになる。

表7：条件の形の「V-サセル」における使役主体の特定・不特定による分布

使役主体の 特定・不特定	「V-サセルト」	「V-サセレバ」	「V-サセタラ」	「V-サセル (イタ) ナラ」	合計
特定のヒト	145 (80.1%)	43 (58.9%)	38 (60.3%)	12 (100%)	238 (72.3%)
不特定のヒト	36 (19.9%)	30 (41.1%)	25 (39.7%)	0 (0%)	91 (27.7%)
合計	181 (100%)	73 (100%)	63 (100%)	12 (100%)	329 (100%)

条件の形で用いられる「V-サセル」の場合、使役主体がヒトであってもそれが特定できない不特定のヒトであるものが一条件の形それぞれの分布は異なるものの一全体として約27.7%を占めている。とくに、「V-サセレバ」と「V-サセタラ」は使役主体が不特定のヒトである例がそれぞれ41.1%、39.7%とかなり高く、「V-サセルト」にも19.9%みられる。

そして、使役主体が不特定のヒトである場合、使役性が弱まる傾向がみられる。「V-サセル」が条件の形で現れる文については早津（2012）が詳しく論じており、早津（同）は使役主体が特定のヒトである文と不特定のヒトである文とでは主節で述べられる内容に違いがあることを明らかにしている。さらに後者の使役主体が不特定のヒトである文では、使役対象が主題として現れることが多く、そこでは条件の形の「V-サセル」の使役性が希薄になり（それゆえ「V-サセルト」と「V スルト」の対立が弱くなり）、主節は使役対象について



ての叙述を表すものとなっていて、文全体で佐久間（1941）のいう「品定め文」の一つの下位タイプ<sup>23</sup>であるという。

（ア）松井のおっさんだつて、昔は酒のませたら会社で一番つよくってさ、絶対に崩れたりしなかったんだ。……」（新橋烏森口青春篇）（早津（2012）（26）の例）

：【松井のおっさんは酒を{飲ませたら≡飲んだら}会社で一番強い】

（イ）（彼は）顔はあんなににきびだらけで汚いけれど、歌を唄わせるとほんとうに素敵よ。（痴人の愛）（早津（2012）（28）の例）

：【（彼は歌を{唄わせると≡唄うと}ほんとうに素敵よ】

手元にある使役主体が不特定のヒトである条件形の「V-サセル」にも、早津（2012）で説明できる例がみられ、たとえば（ウ）の例も使役対象（「男性」）の性質を述べる文になっている。

（ウ）いまなお男性は槍を携え、怒らせたらこわい人々として周辺の住人たちに少しばかり怖れられています。（カスピ海ヨーグルトの真実）

：【男性は{怒らせたら≡怒ったら}怖い】

（ウ）のような使役主体が不特定のヒトである条件の形の「V-サセル」について、表す使役の意味を考えることはむずかしく、これらの文がどのような事態を表すのかについて早津（同）以上のことを述べることはできない。本章では、使役主体が特定できるヒトである場合のみをとりあげ、これらがどのような使役の意味を表すのか、その特徴を探っていく。

なお、「V-サセレバイイ」、「V-サセタライケナイ」「V-サセタラドウカ」「V-サセタラダメダ」のような、条件の形の「V-サセル」と主節の「イイ」「イケナイ」「ドウカ」「ダメダ」とは従属節と主節の関係であるとはいいいにくいため、考察の対象から除外する。

・「そうしたら、その若者がこう言ったんだ。『店の壁に描かれるのが嫌だったらガードマンでも雇って、監視させればいいんだよ。（後略）」（重力ピエロ）

<sup>23</sup> 佐久間（1941：155）の用語で、「物事の性質や状態をいひあらわす場合」の「（何々）は（かうかう）だ」のような表現形式が一般に現れるものをいう。

## 4.2 条件の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅰ）

### 4.2.1 「V-サセルト」

「V-サセルト」が従属節の述語ではあるが、その従属節の中に連用の形の従属節がさらに含まれ（「V-シテ V-サセルト」）、使役主体の使役対象への働きかけが「V-シテ」形に具体的に明示される場合がある。

- (1) この騒ぎの最中、御座所で女どもを相手に酒を飲んでいたが、やがて事態を知り、蒸坊主を走らせて様子をさぐらせると、西美濃衆一万が城内に入りこんでしまったという。（国盗り物語・織田信長）
- (2) 泰造は誠の肩を叩いて一緒に立たせると、リビングを出て行った。（さまよう刃）
- (3) 「ちょっとお母さんを見てきなさい」心配になって長女に様子を見に行かせると、びっくりした顔で戻ってきた。「たいへん。お母さんが、お店のおじさんとけんかしてる」（フレッシュャーのための読むクスリ）

また、使役主体と使役対象の関係が、「雇用人 - 使用人」、「上司 - 部下」、「目上 - 目下」の関係にあり、人間関係の上で上位者の立場にある使役主体が下位者の使役対象にはたらしかけて動作をさせていることがうかがえるものがある。

- (4) ちょうど大通りに二百リグスダラーで手にはいる家がありました。その家を取りこわして、あとに新しい家をたてても、なお引合いそうでしたので、それを買うことにしました。かべやと大工に見積りをさせると、費用が千二百リグスダラーかかるということです。（自立）
- (5) ブラントは眠そうな顔で玄関に迎えに出てきた従僕を下がらせると、鍵のかかっているコーナーキャビネットにブランディがあるからと言ってジェニーをロンドンのオフィスに使っている二階の小さな居間へ連れてきた。（黄金の誓い）

次の例のように、「V-サセルト」の事態と主節の事態が密接にかかわっているものもある。

- (6) 肩幅が広く胸板も厚い沼尻婦長は、ざるそばを一本も残さず食べ終えた。女店員にそば湯を持ってこさせると、音をさせてそれを飲んだ。（札幌殺人夜曲）
- (7) 良太は、男の子たちに肩をくんで人馬をつくらせると、す早くその上にとびのった。

(野の鳥のように)

- (8) 先生は、(ようこを) いすにかけさせると、のどをのぞきこんだり、むねに耳をつけ、しばらくじっと音をきいたりした。(ネコまんがのほけん室)

これらの例を見ると、主節の動作((6)「飲む」(7)「とびのる」)が「V-サセルト」の動作対象((6)「そば湯」(7)「人馬」)にかかわる動作であつたり、主節の動作((8)「(のどを)のぞきこむ」)が直接使役対象((8)「ようこ」)に向かつての動作である。これらの「V-サセルト」の動作は、主節の動作を実現するために必要な動作として現れ、これらは使役の意味として《引き起こし》を表すといえる。

これまでのものは、使役主体の使役対象へのはたらきかけが、使役主体が使役対象に対して直接手を下すものではない、いわば間接的なものであるといえるが、条件形の「V-サセル」の中には、使役主体の使役対象への直接的・物理的なはたらきかけがあつたものもいくらか見られる。

- (9) このおばあさんボケているのかと思い、いい加減な相槌を打っていると、看護婦がやって来て、「おばあちゃん！ふらふら出てきちゃだめ！こっち、こっち」と邪険にひっぱり上げ、背中を押して五、六歩、歩かせると、「ああ、びしょびしょだ」と言いながら、私が見ているのもかまわず、さっと着物をはいでしまった。(姉妹の盃)
- (10) ほどなく車が来て、真鍋と智美が伸子を両側からかかえて立たせると、バーから表へ出た。(女社長に乾杯！)

これらは、使役主体が使役対象に命令したり、お願いするというような間接的な働きかけによるものではなく、使役主体が自ら使役対象に直接手を下して使役対象に動作をさせるもので、使役主体の直接的な働きかけが文中に明示されている。これらのものは、使役主体の働きかけにより使役対象が自分で動作をしたとは言えず、この場合の使役対象は、いわばモノのような存在である。このことから、「V-サセル」は、使役動詞というよりも他動詞に近いものであると言えるだろう。対象とした資料の中には、このようなものが13例みられたが、これらのVを見ると、姿勢にかかわる動詞【立ち上がる(6例)、立つ、起き上がる/すわる、うずくまる/歩く】、再帰動詞【脱ぐ(2例)】で、すべてが自動詞あるいは自動詞相当の動詞であつた。そして、このように使役動詞というより他動詞的なふるまいをするのは、ほかの条件の形の「V-サセル」にはほとんどみられない、「V-サセルト」のみ

にみられる特徴である<sup>24</sup>。なぜこのような特徴がみられるのか、考えてみると、「V-サセルト」の場合、主節に現れる事態として、すでに起きた具体的な動作が多くみられることと関連しているように思われる。次節以降に述べる「V-サセレバ」「V-サセタラ」の場合、主節に現れる事態のほとんどはまだ起きていない、しかも仮定的な事態を表すものが多い。そのため、使役主体が使役対象に直接的・物理的に働きかける、いわば他動詞的な動作は働きかけた結果の状態が確実な具体的な動作であるため、他の条件の形の「V-サセル」とはむすびつかず、「V-サセルト」のみに現れうるのではないだろうか。

一方、「V-サセルト」が使役の意味として《引き起こし》以外の意味を表すものは、次の1例しかなかった。次の例は《許可》を表すものと解釈できるだろう。

- (11) 「だから尊師が、われわれに指示した。『田口は精神が錯乱状態で、悪化するばかりのようだから、いまのうちにポアしてやらないと、これまでの功德がムダになり、悪業をつむことになる。本人が望むように下向かせると、真島のことについて、どんなことをしゃべるかわからない。宗教法人化について、申請が順調に進んでいる時期だから、ポアはやむをえないだろう』と」（三つの墓標）

上の例だけで特徴を述べることはむずかしいが、後で述べる《放任》を表す「V-サセタラ」と共通したところがある。これに関しては後述する。

#### 4.2.2 「V-サセレバ」

「V-サセレバ」の場合も、使役主体の使役対象への働きかけが具体的に文中に明示されているものがある。

- (12) 彼は江戸表の無宿者が増加するのに対して、無宿者を捕えて鉾山に強制就労させれば江戸に帰ってくことはあるまいという考えで、当時佐渡奉行二人のうちの一人、依田十郎兵衛にかけあった。（江戸の犯科帳）
- (13) 本野の場合は（刑事が）客を装って、スナック『内海』に行き、道でも尋ねるふりをして本野に地図を書かせれば、嫌でも、メモ用紙に本野の指紋が付着する寸法だ。（白樺湖殺人事件）

---

<sup>24</sup> 「V-サセタラ」にも他動詞的なふるまいをするものが少しあるが、その場合のVは「聞く」のみであり、使役主体の使役対象への物理的な働きかけとはいえない。

- (14) トップの決断が下って、ポスト・イットはまず四都市でテスト販売されることになった。相変わらず市場調査では否定的な回答しか返ってこなかったが、「とにかく手に取らせろ。使わせろ」という方針で事業部長から技術部長までがあちこちの会社を回って、使い方を説明しながらサンプルを配って歩いた。「いったん使わせればこっちのもの。みんな、やめられなくなる」(人・ひんと・ヒット)

「V-サセレバ」の場合、「V-サセルト」に比べて文中に現れる使役主体の働きかけが明示されているものは多くない。しかし、文中に働きかけが明示されているものをみると、「V-サセルト」と同じく使役対象に対して V という動作を行うように、命令したり、頼んだりするものはあまりみられない。上の例をみると、使役対象への働きかけが抽象的に明示されていたり((12)「捕まえて」)、使役対象が V という動作を行うように使役主体が誘導するような動作((13)「道でも尋ねるふりをして」(14)「(ポストイットの) 使い方を説明しながらサンプルを配って歩く」)であるという点において特徴的である。

また、(15)のように、使役主体が使役対象に V の動作をさせる目的が文中に現れ、その目的を実現させるために使役対象に働きかけたことがうかがえるもの、さらに(15)もそうだが、(16)から(18)のように、主節に「～でしょう」「～だろう」、「～のではないか」「～という確信」、ほかに、「～はずだ」、「～と考えた」など、ある結果の推量・判断を表す述語が多く現れ、その結果の実現をもくろんだ使役主体による使役対象への働きかけがうかがえるものがある。「V-サセレバ」の場合、後者のものが多くみられる。

- (15) それは、小学校の一年生、二年生の学習にもいえることです。たとえば、教科書に出てくる字を教えようと何回も書かせれば、形は覚えるでしょう。(間違ってます、お母さん)

- (16) 谷岡：「私もそのあたりのこと、つまり谷川さんのような天才棋士が、どんな家庭環境で育ったのかをうかがいたいわけですが…。谷川さんの子ども時代のことはいろいろな本に書かれていますが、最初はお父様が将棋のセットを買ってこられて、そこから始まったんですか？」谷川：「私が五歳のときですね。兄とケンカばかりしているものですから、「将棋でもやらせれば静かに遊ぶだろう」と思ったらしくて。」(「ツキ」と「実力」の法則)

- (17) 「そうおっしゃっていただくと……。まあ、尾島を取り調べている連中も、夫人に会わせれば、気持ちをほだされて尾島が自白するんじゃないかと期待してるようです」

(女社長に乾杯！)

- (18) そして川崎たちの目的は、絵摩の父親である長峰重樹に任意出頭を求めることだった。  
逮捕にまで踏み切らないのは、出頭さえさせれば自白させられるという確信が捜査陣にあるからだ。(さまよう刃)

これらの例の主節に現れる事態はどちらかというに使役主体が望む事態の実現を表すものともいえ、使役主体が主節に現れる事態の実現をもくろみ、その実現のために使役対象に「V-サセレバ」の V という動作を引き起こしているもので、使役の意味として《引き起こし》を表している。実は上にあげた、(16) から (18) の例の主節の述語も使役主体が使役対象に動作を行わせたあとの結果を予想・推量した事態が述べられているものであった。このように、「V-サセレバ」の多くは、主節に使役主体が使役対象に V という動作を行わせることで実現させたい事態が明示されている。手元にある「V-サセレバ」の例のほとんどがこのようなものであり、使役の意味として《引き起こし》を表している。

なお、「V-サセレバ」には《引き起こし》以外に《許可》、《放任》を表すものは見られなかった。

#### 4.2.3 「V-サセたら」

「V-サセたら」の場合も、文中に使役主体の働きかけのあり方が具体的に文中に表されるものがある。

- (19) 「外まわりの清掃班もこの際全員呼び戻して、雌餓鬼の搜索に当らせたらどんなもの  
でしょう。士気も上ります。(後略)」(方舟さくら丸)
- (20) 母は心のどこかで、(ぼくに) しばらく(楽器を) 強制的にやめさせたら、やがて失った物の大きさに気付く、今度はいづらか決意を新たにして、またやりたい、と言ってくれると考えていたふしがある。(音楽のある知的生活)

上の 2 例は、文中に現れている働きかけ(「呼び戻す」「強制的に」)から《引き起こし》と判断されるものであり、使役主体は使役対象に V という動作を意図的に行わせることによって、主節に現れる事態(「士気が上る」「失ったものの大きさに気づく」)の実現をもくろんでいる。そして、主節に明示される事態は使役主体が望む事態である。

ところが、「V-サセたら」には、次のように、使役対象に V という動作を引き起こした結果、使役主体がもくろんだ事態ではない予想外の、多くは使役主体にとって好ましくない

事態が実現されるということが主節に明示される場合がある。

- (21) ところが、拘置所で一緒だったゾクに彼女への鳩（伝言）をやらせたら、官にチンコロ（密告）しやがんの。（囚人狂時代）
- (22) 「この襦袢は、解き洗いしてもしみは落ちないね。だめになってしまった」「襦袢だから、惜しくはないよ」「弁償させなくちゃ、あのそそっかしい男に」「そんなことをさせたら、中村座の恥だよ」（花櫓）
- (23) 「この男を怒らせるなよ」素藤は楽しそうに言った。「怒らせたら命がなくなる」（新・里見八犬伝）

前節でみた「V-サセレバ」の場合、主節に現れる事態は使役主体がもくろんだ事態がほとんどであったが、「V-サセたら」の場合、主節に現れる事態は使役主体が望む事態もあればそうでない事態も現れうるという点で違いがみられる。

また、4.2.1の「V-サセルト」と同じように、「V-サセル」が他動詞的なものも少し見られるが、「V-サセたら」の場合、現れるVは「聞く」のみであった。

- (24) 別に。私の声はいっそう冷淡になった。磯子の言葉を録音しておいて聞かせたら、おところは悶死するだろう。（私小説）
- (25) 「…あいつがどこをどう行ったか聞かせたら、おもしろい小話になるだろうよ」（ブラッドベリはどこへゆく）

これまでの「V-サセたら」は、使役主体の働きかけを受けて使役対象が動作を行うものであり、《引き起こし》といえるものである。そして、これらの主節の述語をみると、具体的な動作を表すというよりも、結果の状態を表す形容詞相当、または名詞述語相当のものがほとんどであり、主節に現れる事態が「V-サセルト」の主節の事態と違いがみられる。

一方、「V-サセたら」には次のように《放任》として解釈できるものがある。

- (26) 「雪穂もねえ、もしあのまま公立の中学に行かせていたら、たぶん来年は受験勉強でもっと大変だったと思うんです。……」（白夜行）
- (27) 白煙を曳いてロケット砲弾が漁船へ向かって飛んでゆく。ブースターが点火し加速して直ぐに命中した。二十人近く甲板にいたテロリストたちが、爆発の衝撃で吹っ飛ばされた。船体が炎上し始める。残った二艘から雨霰と弾丸が飛来する。二発ほどが藤

- 懸の頭上を掠めた。ピシッという短い、至近弾を思わせる音がしてきた。「大丈夫？」と、恵が心配して声をかけてくる。「あいつらを乗船させたら負けだ！」「無理しないで」「無理は承知だよ。それでしか勝てない」藤懸は苦笑する。(テロリストハンター)
- (28) 自分は、殴られたくないからとっさに自分の身を守っただけのことだ。だが、警察官としての自分を殴らせたら、相手は公務執行妨害で逮捕されることになる。(ボクの町)
- (29) 「ダメですよ。先輩にパソコン触らせたら、仕事そっちのけで出会い系サイトやエロ画像サイトばかりのぞいてるじゃないですか。絶対ダメですっ」(誘拐してみる?)
- (30) 伸子は首を振った。「あの人を死なせたら、私の責任だわ」(女社長に乾杯!)

上にあげた(26)から(30)の例のうち、使役主体が知っていながら意図的に《放任》したという意味を表すものは、(26)の例しかない。ほかの例は、使役主体が使役対象を意図的に《放任》したとはいえない、いわば《非意図的な放任》といえるものである。そして、「V-サセタラ」にはどちらかというと後者のようなものが多くみられる。

条件の形の「V-サセル」の中で《放任》(《非意図的な放任》)を表すものは「V-サセタラ」にしかみられず、「V-サセタラ」の大きな特徴の一つである。これらの場合、文全体として、条件の形で使役対象の動作を使役主体が容認・もしくは黙認した場合を仮定し、その仮定した事態が成立した場合の結果の事態が主節に述べられている。そして主節で述べられているのは従属節の事態が成立することへの使役主体の評価ともいえるが、述語が表している評価の内容は、使役主体が好ましいと思っていない内容がほとんどである。4.2.1「V-サセルト」の(11)も《引き起こし》ではない《許可》を表すものであったが、これも同じく主節の表す事態は使役主体にとって好ましくない内容を表すものであった。つまり、条件の形の「V-サセル」が《引き起こし》を表す場合は使役主体にとって好ましい事態であるのに対して、《許可》《放任》を表す場合、使役主体にとって好ましくない事態であることを表すという特徴がみられる。

#### 4.2.4 「V-サセルナラ/サセタナラ」

「V-サセル」の条件の形のひとつである「V-サセルナラ」「V-サセタナラ」の例は対象とした用例の中には12例しかなく、これらをもって構文的な特徴を導き出すことはできないが、1例を除いたすべての例が《引き起こし》と解釈できるものであった。次にあげた例がそうである。

- (31) 「柳が絶対に厭だと言うんだよ。厭なのに無理に引退させるなら、それだけの金をよ



こせと言うんだ」(一瞬の夏)

(32) 北岡が苛々した口調で言った。「俺がやらせたのなら、お前に隠したりせんぞ」(女社長に乾杯！)

(33) かねて利久の凡庸さを見知っている信長は、二千貫の身代をもたせたなら、いま以上の働きをし、自分の役にも立つ、と考えたのだろう。(前田利家)

《引き起こし》を表さない1例は次の例であり、この場合《放任》と解釈できる。

(34) しかも狂暴狡猾な悪人が変事をひきおこすこと、いつの世にもその例が絶えない。それにこれらを放置して、したいようにさせるならば、盗跖(昔の大泥棒)は横行して掠奪・殺人をするであろうし、良民は手を拱いて災難にかかるのを待つだけになろう。  
(抱朴子)

以上、条件の形の「V-サセル」が表す使役の意味が、《引き起こし》であるか《許可》、《放任》であるかという観点からみてきた。それぞれの形における使役の意味の分布を示すと、次のようになる。

表 8：条件の形の「V-サセル」が表す使役の意味(観点Ⅰ)の分布

	《引き起こし》	《許可》	《放任》	不明	合計
「V-サセルト」	131	1	0	13	145
「V-サセレバ」	39	0	0	4	43
「V-サセたら」	28	0	7	3	38
「V-サセルナラ」	11	0	1	0	12
合計	209	1	8	21	238

このように、条件の形の「V-サセル」のほとんどが《引き起こし》を表すということがわかった。そして、「V-サセたら」に《放任》を表すものが少数みられるものの、ほとんどが《放任》の中でも《非意図的な放任》といえるものであった。そして、「V-サセたら」が表す《非意図的な放任》は、そうすることで使役主体にとって好ましくない事態が生じるものであるという特徴がみられた。

#### 4.3 条件の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅱ）

前節までは、条件の形の「V-サセル」、すなわち「V-サセルト」「V-サセレバ」「V-サセたら」「V-サセル（/タ）ナラ」が表す使役の意味をⅠの観点から考察した。考察の結果、いずれの形においてもほとんどが《引き起こし》の意味を表し、《許可》、《放任》を表すものはごく少数であることが分かった。この節では、これらの形の「V-サセル」のうち、Vが意志動詞である場合について表す意味を《つかいだての使役》《みちびきの使役》の観点から考えてみる。

次のような例は《つかいだての使役》と解釈できる。

- (35) 「寝入ったか」と、家来に様子を見にやらせると、酔いがまわっているのかいびきをたてて眠っているという。（箱根の坂）
- (36) 肩幅が広く胸板も厚い沼尻婦長は、ざるそばを一本も残さず食べ終えた。女店員にそば湯を持ってこさせると、音をさせてそれを飲んだ。（札幌殺人夜曲）（＝（1））
- (37) トップの決断が下って、ポスト・イットはまず四都市でテスト販売されることになった。相変わらず市場調査では否定的な回答しか返ってこなかったが、「とにかく手に取らせろ。使わせろ」という方針で事業部長から技術部長までがあちこちの会社を回って、使い方を説明しながらサンプルを配って歩いた。「いったん使わせればこっちのもの。みんな、やめられなくなる」（人・ひんと・ヒット）（＝（14））
- (38) 兵部に綱宗の落胤を刈り取らせれば、我が手を血で汚さずにすむ。（虹の刺客）
- (39) 特殊法人や地方公共団体への貸付債権を、銀行の債権同様に金融庁に査定させたら、どのような判定をするのだろうか。（特別会計への道案内）

一方、次のようなものは《みちびきの使役》と解釈できる。

- (40) 精神的に強い圧迫から離して入院治療をさせると、しばらくして身長がよく伸び始めることがあります。（子どもの成長と気になる病気）
- (41) その日学校で習ったことを子どもに話させると、いい復習になる（わが子を算数大好きに変える本）
- (42) それは、小学校の一年生、二年生の学習にもいえることです。たとえば、教科書に出てくる字を教えようと何回も書かせれば、形は覚えるでしょう。（間違ってます、お母さん）（＝（15））

《みちびきの使役》と解釈できる(40)から(42)の例をみると、主節に使役対象の動作・変化の結果の状態を表すものが現れる。それに対して《つかいだての使役》と解釈できる(35)から(39)の主節が表す事態をみると、使役主体の動作・変化の結果であったり((36)(38)の例)、使役主体でも使役対象でもない第三者の動作が明示されることもある((35))。つまり、条件の形の「V-サセル」は、《つかいだての使役》か《みちびきの使役》かによって主節にくる事態が異なるという構文的な違いがみられる。

ところで、条件の形の「V-サセル」をみると、次のように動作の実現が必ずしも使役対象にとって有意義なものとは言えない場合もある。この場合はとくに「V-サセたら」の形が目立つ。

(43) だから、貧しい人間には刑罰をもって働くように仕向ければ、豊かになる。逆に、豊かな人間には賞を与え、その見返りに資金を提供させれば、貧しくなる。(商君書)

(44) 父は、「莫迦だな。彼奴たちに鉄砲をもたせたら、一ぺんで暴動が起るじゃアないか！」と云った。(李朝残影)

(45) 磯子の言葉を録音しておいて聞かせたら、おとこは悶死するだろう。(私小説)

これらは、使役対象が動作を行った結果、使役対象に何らかの望ましい事態が生じるものではないが、使役主体が使役対象に対して V という動作を行わせること自体に関心がある場合である。これらの場合、典型的な《みちびきの使役》であるとはいえないかもしれないが、周辺的な《みちびきの使役》としてとらえることができると考え、本章では《みちびきの使役》として判断した。

また、条件の形の「V-サセル」の中には、次のように、《つかいだての使役》なのか《みちびきの使役》なのかその判断が難しいものもある。これらの例は、動作の実現が何を意図しているのであるのか、誰のためであるのかが判断できない。

(46) その一例をあげると、いちばん面白い U C L A の演奏で「その昔、オールド・アメリカという名の親会社がありました」というミンガス式な題の新曲を、九人編成のグループで演奏しはじめるが、スタートで間違った。それでミンガスは演奏をやめさせると、ピアノを弾いてオープニング・コーラスの調子を教え、こんどはいいだろうとスタートしなすが、またすぐ間違ってしまうのだ。(ぼくたちにはミンガスが必要なんだ)

(47) 「すみません。言葉が過ぎました」 しかも、司は一睨みで灰原先輩に謝罪させると、

席を離れて俺の方へと歩いて来た。(こんな上司に騙されて)

- (48) 「柳が絶対に厭だと言うんだよ。厭なのに無理に引退させるなら、それだけの金をよこせと言うんだ」(一瞬の夏)

以上、本節では条件の形の「V-サセル」が《つかいだての使役》と《みちびきの使役》のどちらの使役の意味を表すのかみてきた。(46) から (48) のように判断ができない例もあるが、その分布を下の表に示す。

表 9：条件の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅱ）

形	《つかいだての使役》	《みちびきの使役》	不明	合計
「V-サセルト」	37	60	27	121
「V-サセレバ」	12	10	8	30
「V-サセタラ」	4	14	4	22
「V-サセルナラ」	4	4	1	9
合計	57	89	40	182

表 9 に示したように、対象とした「V-サセルト」「V-サセレバ」「V-サセタラ」の用例の中には、《つかいだての使役》であるか《みちびきの使役》であるか判断できないものがあるものの、条件の形の「V-サセル」全体から考えると、《つかいだての使役》よりも《みちびきの使役》を表すものが多い。「V-サセレバ」に関しては《つかいだての使役》と《みちびきの使役》の割合がほぼ同じくらいであるが、「V-サセルト」は《みちびきの使役》は 121 例中 60 例で約半分を占め、「V-サセタラ」に関しては《みちびきの使役》が 22 例中 14 例で約 6 割弱を占める。そして、条件の形の「V-サセル」が《みちびきの使役》を表す場合、動作の結果が使役対象に対して好ましいものである場合もあれば、そうでない場合もある。とくに、「V-サセタラ」の場合に、使役対象にとって好ましくない事態が実現する場合が多かった。そして、判断が難しい例の中には、そもそも動作の結果に無関心である場合があった。使役の意味を観点Ⅱから考えたときに、動作の実現に対して無関心であるものについてどのように考えればいいのか、考える必要がありそうである。

#### 4.4 第4章のまとめ

4.2 節と 4.3 節にかけて、使役主体が特定のヒトである条件形の「V-サセル」がどのよう

な使役の意味を表すのか、その特徴を述べた。

4.2.3 の「V-サセタラ」の一部に《放任》として解釈できるものがみられたものの、各形式において、ほとんどの場合、使役主体が使役対象にはたらきかけてそれを受けた使役対象が何らかの動作を行うものであり、使役の意味として《引き起こし》を表している。しかしながら、いずれの形も共通して《引き起こし》を表すものがほとんどであると言っても、各形式において現れる主節の事態に特徴がみられ、それを簡単にまとめると次のようになる。

「V-サセルト」—主節の事態は具体的な動作を表し、従属節とは継起関係で結ばれている。

【山本太郎は、新幹線の席におやじとおふくろを並んで坐らせると、自分は数列前の席へ行った。(太郎物語・大学編)】

「V-サセレバ」—主節の事態は、結果の状態を表し、その結果は使役主体が望む結果が現れるのがほとんどである。

【わざわざ自分たちがカードを切らなくても、全銀協の会見などで、どこかの記者にそうした質問をさせればこと足ります。(あなたの預金が危ない!)]】

「V-サセタラ」—「V-サセレバ」と同様、主節の事態は結果の状態を表すが、その結果は使役主体にとって望ましい結果である場合もあれば、そうでない結果の場合もある。

【万里と凜は漫才をする(「まりで一す」「りんで一す」「二人合わせてまりりんで一す」とやったわけだ。しかし、あまり面白くなかった。どうせなら、一平と広介にやらせたら面白かったのだが、)】(思い出にならない)

【ところが、拘置所で一緒だったゾクに彼女への鳩(伝言)をやらせたら、官にチンコロ(密告)しやがんの。(囚人狂時代)】

このように、条件の形としてまとめて考察した「V-サセルト」、「V-サセレバ」、「V-サセタラ」は、現れる主節の事態が異なるという違いがみられた。このような違いが、動詞が「V-サセル」であるためにみられるものなのか、それとも条件表現「ト/ハ/シタラ」の違いからくるものなのか、今のところはっきりしないが、使役の意味にもいくらかかかわっているように思われる。とくに、使役の意味を観点Ⅱから考えるときに、条件の形の「V-サセル」が《つかいだての使役》を表す場合は、主節の事態が使役主体の動作・変化の結果の状態、もしくは第三者の動作である場合が多いが、《みちびきの使役》を表す場合は主節に使役対

象の動作・変化の結果の状態が現れやすい。そして、本稿で対象とした条件の形の「V・サセル」の全体から考えると、判断が難しい例があるものの、《つかいだての使役》よりも《みちびきの使役》を表すものが多かった。このような分布は、第 3 章でみた連用の形の「V・サセル」とは異なる特徴である。しかしながら、本章で対象とした用例の数が少なく、さらに用例を増やして考察する必要がある。

## 第5章 終止の形で用いられる「V-サセル」

### 5.1 「終止の形の「V-サセル」」とは

第5章では、「V-サセル」が終止の形で用いられる場合をとりあげる。考察に入る前に、ここでいう「終止の形の「V-サセル」」について少し述べる。本章でいう「終止の形」とは、文を終止させるという構文機能的な観点からの名づけであり、学校文法でいう「未然形、連用形、終止形、連体形、、、」というときの「終止形」ではない。具体的に言うと、「太郎が花子に掃除をさせる/させた/させたい/させていた/させよう。」のように、「V-サセル」が文の述語として機能しているときの形をいう。

「V-サセル」が終止の形で用いられる場合には、(ア)のような単文の述語の場合と、(イ)のような複文の主節述語の場合がある。

(ア) (婦長は) 彼女には病院の自由診療による現金収入とその処理の一切を見させてあった。(黒革の手帖(上))

(イ) 内海はウェイトレスを呼び、メニューを持ってこさせた。(柔らかな頬(上))

そして、本論文の考察の対象とした終止の形の「V-サセル」には、下の表に示したように、単文よりも複文の主節述語として現れることが多く、全体の約7割を占める。

表 10：終止の形の「V-サセル」の文の形

文の形	用例数
単文	239 (28.4%)
複文	604 (71.6%) <sup>25</sup>
合計	843

このような偏りは、述語が「V-サセル」であるからこそみられる特徴であるのか、それとも述語が「V-サセル」でなくてもこのような傾向がみられるのかははっきりしないが、「V-サセル」を述語とする文に複文が多く現れるということは、おそらく使役文が表す複合的な事態、すなわち、使役主体による使役対象の動作への関与の在り方とそれを受けた使役対象の動作を表すためには単文よりも複文のほうが表しやすいからだと思われる。

<sup>25</sup> 「V-サセル」が複文述語である場合に、伴う従属節の種々による分布は、後述する 5.3.1 の表 12 に示す。

本章では、まず 5.2 節で単文の述語として現れている「V-サセル」について簡単に述べ、次に 5.3 節で複文の主節述語の「V-サセル」について考察する。

## 5.2 単文の述語としての終止の形の「V-サセル」

表 10 に示したように、「V-サセル」が終止の形で用いられる場合、その文が単文である場合は約 3 割にすぎない。そして、その中でも、次のように単純な「V-サセル」で終わるのでなく、「～ノダ/ンダ」文で現れるものがある。

- (1) だが、こちらにとっては少しでも長い時間が必要だ。できたら夜になるまでひっぱっておきたい。そのためには、できるだけ敵に油断をさせるのだ。(ビルマの豎琴)
- (2) 佐山に言いふくめて、「休暇」のかたちで博多に逃避させたのは石田部長です。彼こそ汚職の中心人物ですから、佐山が拘引されたら危なくなります。それで佐山に因果を含めて博多に逃避させたのです。(点と線)
- (3) 僕はいいよ、と断ったが、寺尾は直貴の手を掴んで離さなかった。「いいから来いって。一度おまえに歌わせたいんだ」(手紙)

本節では、これらのものも単文の「V-サセル」としてとらえ、ごく大まかではあるが、単文の「V-サセル」がどのような使役の意味を表すのか、できる限り構文的な条件を導き出しながら述べていこうと思う。

### 5.2.1 単文の述語としての終止の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅰ）

#### 5.2.1.1 《引き起こし》

単文の「V-サセル」が使役の意味として《引き起こし》と解釈できる場合、次のようなものがみられる。

まず、使役主体と使役対象の関係がはっきりしているものがある。主に社会的なかわりの中で上下関係がはっきりしているものであったり、「依頼主／被依頼者」のような関係である場合が目立つ。

- (4) 「デザイナー学校でね、あなたのおとうさんの伝記が夏休みの宿題に出たのよ。感想文を書けって」(中略)「あれはな、金さえ出せばどんなことでも書くような器用な物書きに書かせたんだ。(後略)」(地下鉄に乗って)
- (5) (鈴木が) また一息で飲む。「おお、これはコップがいるな」真一がウェイターに持つ



てこさせた。(空中ブランコ)

- (6) 庄九郎はさらに浅井氏へ送った使者にこういわせた。(国盗り物語・斎藤道三)

単文の「V-サセル」の中に、次のように使役対象が文中に明示されない場合がある。

- (7) 中学校の入学試験にしても、この年から新考査法がとられ、学科試験はなく、内申書と口頭試問と体力検査だけになった。徹吉は懸垂もろくにできぬわが子のために庭に簡単な鉄棒を作らせた。(楡家の人びと)

- (8) 渡辺は、早速、スダレの補充工事をはじめさせた。(戦艦武蔵)

- (9) 頼芸はすぐ酒の用意をさせた。(国盗り物語・斎藤道三)

- (10) 「部屋にある持物はこっちへ運ばせる」(さぶ)

これらの場合、使役主体自身で動作を行わず、誰かに動作をさせるのだが、それが誰であるかは使役主体にとってそれほど大事なことはない。使役主体にとっては「V-サセル」のVの動作さえ実現すればいいのである。この場合は使役の意味として《引き起こし》を表す<sup>26</sup>。

また、次の例では「V-サセル」に意志形のムード形式が後接していて、使役主体の積極的な意志がうかがえる。

- (11) そういえば、先週は面白いやつが入ってきた。タレントの志村けんに似たやつだ。みんなで志村けんのモノマネをやらせようとしている。(手紙)

- (12) 私はルートのことを考えた。雨合羽を入れてある場所が分かっただろうか。運動靴の替えも持たせるべきだった。(博士の愛した数式)

- (13) これにもまた、検察側は手を焼いた。松下を引っばるには署長を交代させなければならぬ。(人民は弱し官吏は強し)

また、「V-サセル」のVが無意志動詞であるものもあるが、これらはほとんどが《引き起こし》と解釈できるだろう。

---

<sup>26</sup> 早津(2013a)は、使役文(「V-サセル」)と原動文(V)との似通いについて述べており、使役文(「V-サセル」)が原動文(「V」)と似通いがみられる場合の構文的特徴の一つとして、文中における動作主体(本論文でいう使役対象)が明示されないことを指摘している。そして、このような特徴がみられる場合、使役の意味として《つかいだての使役》である場合であるという。

- (14) 後輩の三人が相談して、加藤の家へ行くことにした。はじめっから加藤を困らせるつもりでいた。(孤高の人)
- (15) 「そうだよな。親御さんに楽をさせたいよな」(13 階段)
- (16) 「そうだろうか。俺は、見せない方がいいと思う。字野のおふくろを哀しませることになるぜ」(冬の旅)

#### 5.2.1.2 《許可》、《放任》

単文の述語の「V・サセル」が《許可》あるいは《放任》を表す場合もみられるが、対象とした用例の中には下の 4 例しかみられない((17) は《許可》の例、(18) から (20)) は《放任》と解釈できる)。これらの場合、文中に現れる副詞相当の語、連体修飾語、または V がもつ語彙的な意味によってその意味がはっきりする。

- (17) こうなったら致し方はない。聖子には好きなように結婚をさせる。(楡家の人びと)
- (18) このスパーリングでの内藤の役割は、吉村の忠実なパートナーになることだった。相手に思いのまま攻撃させる。(一瞬の夏)
- (19) 成り行きでしかたなくヒステリーを演じては見せたものの、あれはかえってまずかった、と、すぐに七瀬は悟った。尾上に言いたい放題のことを言わせたほうがよかったのだ。(エディプスの恋人)
- (20) 「ちょっと、ご子息をお借りしてもよろしいですか？いろいろと積もる話がありまして」「どうぞ、どうぞ」純一の父親は相好を崩した。「よろしく指導してやってください。一週間ぐらいはぶらぶらさせるつもりでおりましたから」(13 階段)

また、「V・サセル」の V が無意志動詞であるものの中に、次のように使役主体が話し手で、使役対象が聞き手という関係、さらに「V・サセル」が過去形で現れるものがある。この場合、使役主体自身が意図的に働きかけて使役対象に動作を行わせたとはいえないもので、《引き起こし》の中の《非意図的な引き起こし》((21)、(22) の例) もしくは《放任》の中の《非意図的な放任》((23) の例) とでもいえるべきものである。

- (21) 「ひどく手こずらせたなあ」とかれは弟にいった。(戦いの今日)
- (22) 「むだ足踏ませたな」(点と線)
- (23) 「やあ、待たせたかな」(白い巨塔(一))

しかし、「V-サセル」が単文の述語である場合、これまであげた例のように使役の意味がはっきりと分かるものがある一方で、次のように、その文だけでは《引き起こし》なのか、《許可》、《放任》なのかその意味を判断するのが難しいものも多い。これらの文は、単に述語が「V-サセル」であることによって、使役対象が V という動作を行うにあたり、使役主体が何らかの形でかかわっていることがうかがえるだけである。

(24) それにしても変なことがある。歌島丸は照吉の船である。照吉が憎んでいる新治を自分の船に乗り組ませるわけではない。(潮騒)

(25) 彼女は娘の頃から、母親と一緒に、ミュンヘンに入りかわり立ちかわり訪れてくる日本人留学生の世話をしてくて、今では六十に手が届く年齢になっていた。戦争中をのぞき、日本人だけを下宿させた。(楡家の人びと)

ここまでみた単文の述語の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅰ）の分布を示すと次のようになる。

表 11：単文の述語の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅰ）の分布

	《引き起こし》	《許可》	《放任》	不明	合計
用例数	184	1	4	50	239

「V-サセル」が単文の述語である場合、ほとんどが《引き起こし》を表し、《許可》《放任》を表すものはごく少ない。さらに特徴的なのは、《引き起こし》なのか《許可》《放任》なのか判断できないものがかなり多いということである。このことは、使役文の基本的な構造、「X が Y に/を (Z を) V-サセル」だけでは使役文の意味を判断することは難しく、ほかの構文的な条件によって、その意味が明らかになるということを示唆するのではないかと思う。

### 5.2.2 単文の述語としての終止の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅱ）

次に、単文の述語としての「V-サセル」が表す意味を《つかいだての使役》か《みちびきの使役》かの観点から考えてみる。下にあげた例は《つかいだての使役》と読み取れる例である。

(26) (鈴木が) また一息で飲む。「おお、これはコップがいるな」真一がウエイターに持つ

てこさせた。(空中ブランコ) (= (5))

(27) 「ねえ、にいさん。今度ばかりは見舞いに行行ってやってくれないか。頼むよ」「子供に行かせるよ。代参でいいだろう」(地下鉄に乗って)

(28) 第一に、打ちこまれる鋷の質が、強靱で精度の高いものでなければならない。渡辺建造主任は、この直径四センチの大型鋷の研究を半年も前から竹沢技師にやらせていた。  
(戦艦武蔵)

(29) 「十年前、犯人がここに証拠を埋めたんですね」「ああ、おそらく樹原亮にやらせたんだろう。手斧で脅してな。樹原は穴を掘っていて、この石段を見たんだ」(13 階段)

そして、次の例は《みちびきの使役》として解釈できるものである。

(30) 私はルートのことを考えた。雨合羽を入れてある場所が分かっただろうか。運動靴の替えも持たせるべきだった。(博士の愛した数式) (= (12))

(31) こうなったら致し方はない。聖子には好きなように結婚をさせる。(楡家の人びと) (= (17))

(32) 「最近どうなんだよ」(中略)「すげえ、いい子だ」と僕は言った。「近いうちに、絶対におまえに会わせるよ」(GO)

単文の述語としての「V-サセル」は、ここでみた観点Ⅱと前節の観点Ⅰとでは、意味による傾向が少しながらうかがえる。単文の述語の「V-サセル」が《つかいだての使役》を表す場合の例は、すべてが《引き起こし》の例であり、《許可》《放任》の例はない。それに対して、《みちびきの使役》を表す場合は、《引き起こし》も《許可》《放任》の例もあるということである。つまり、単文の述語の「V-サセル」の場合、《許可》であり、かつ《つかいだての使役》の意味を表すものはみられないということである。

そして、前節でみた観点Ⅰと同様、《つかいだての使役》であるか《みちびきの使役》であるかその判断がむずかしいものがある。

(33) (婦長は) 彼女には病院の自由診療による現金収入とその処理の一切を見させてあった。(黒革の手帖 (上))

(34) 父も職人でしたけど三年前死にましてね。姉の夫も、同じ仕事してます。というより、父は、うちで働いていた腕のいい職人と、姉を結婚させたわけなんだな。(太郎物語・大学編)

前節にもふれたが、単文の述語の「V-サセル」の場合、使役文が表す複合的な事態を単文で示すことがなかなか難しく、「V-サセル」の基本的な構文、すなわち、「{使役主体}が{使役対象}に/を（{動作対象}を）V-サセル」文だけではそれはどのような使役の意味を表すのかははっきりしないのである。そのため、使役主体と使役対象との関係、文中に現れる副詞相当の語の意味、または前後の文からその意味を読み取るしかない。その一方で、次節に述べる「V-サセル」が連用の形の従属節を伴う「V-サセル」の場合は、単文の述語の「V-サセル」にくらべて、従属節にどのような意味を表すのかによって使役の意味が判断しやすい。

### 5.3 複文の主節述語としての「V-サセル」

#### 5.3.1 従属節述語の種々

5.1 節で終止の形の「V-サセル」の約 7 割が複文の述語として現れることを述べた。「V-サセル」が複文の主節の述語として現れる場合に、従属節をともなうわけだが、どのような従属節を伴うのかに注目してみると、次の表 12 のような分布を見せた。

表 12 : 「V-サセル」が複文の主節述語である場合の従属節の形

従属節の形	数	具体例
連用の形 <sup>27</sup>	429	この旅行中、星は <u>同行の社員に命じて</u> 、各国における国内阿片取締法の資料を集めさせた。(人民は弱し官吏は強し)
目的の形	11	<u>酒なんか、たいしたものでないと思えるようにするために</u> 、正二郎は、わざと、早々と、息子に、酒の味を <u>おぼえさせたのである</u> 。(太郎物語・高校編)
条件の形	40	「君はこの当校に何年いたいかね」と問われた。好古は即座に、「一年」と答えた。(中略)「よかろう」と、試験官はいった。「ただし、在学中 <u>勉強しなければ二年でも三年でも居らせる</u> 」とつけくわえた。(坂の上の雲 (一))
原因・理由の形	18	<u>戸籍や住民票を動かすと取り立て屋にわかってしまうから</u> 、子供も学校に <u>仮入学させることになる</u> 。(火車)
引用の形	18	MC が「 <u>お金を返せんで言わないでくださいねー</u> 」と観客を <u>笑わせた</u> 。(空中ブランコ)
二つ以上の形が現れるもの	24	いずれは <u>社員を駐在させようと</u> 、 <u>その地の言語に詳しいものを採用し</u> 、旅行の <u>準備にかからせた</u> 。(人民は弱し官吏は強し)
その他	64	黒川の手帖を支店長へ引渡した <u>元子だったが</u> 、その前に町の複写屋に <u>コピーさせていた</u> 。(黒革の手帖 (上))
合計	604	

上の表からわかるように、種々の形式の中でも連用の形の従属節をとまなうものが従属節をとまなう「V-サセル」の例 604 例中 429 例あり、全体の約 71%を占めている。本章では複文の述語として現れる「V-サセル」の中でもっとも多い連用の形の従属節を伴う「V-サセル」を対象に考察を行うことにする。

考察にあたり、まず、主節の「V-サセル」動作に対して連用の形の従属節で現れる事態がどのようにかかわっているのかについて考える。次に、従属節事態と主節事態とのかかわ

<sup>27</sup> 第3章では「連用の形の「V-サセル」」として「V-サセテ」「V-サセ」以外に「V-サセナガラ」も含めて考察を行ったが、従属節が「V-シナガラ」で主節の述語が「V-サセル」で現れるものは次の3例しか見られなかったため、本章では考察の対象からはずした。

- ・「サミュエル・レガード二等兵だよ」と念を押しながら、真次は札束と GI カードをハチ公に握らせた。(地下鉄に乗って)
- ・庄九郎は、廊下へ駆け出、「敵味方とも聞け、長井藤左衛門殿はお上意によって討ち取った」言いながら、用意の退き鉦を打たせた。(国盗り物語・斎藤道三)
- ・えのもとや彼女と一緒に近所の居酒屋に行き、オカンに酒を勧めながら色んな話を聞きだした。子供の頃、学生時代の話。オトンとの馴れ初め。友達にするようにどんどん飲ませながら、色んなことを白状させた。(東京タワーオカンとボクと、時々、オトン)

り方を手掛かりに表す使役の意味について考える。

### 5.3.2 連用の形の従属節があらわす事態

従属節として用いられる動詞の中止形（シテ形、テ形）と主節との関係についてこれまで多くの考察がなされている（遠藤（1982）、大鹿（1986）、言語学研究会・構文論グループ（1989a,b）、仁田（1995）など）。とくに、言語学研究会・構文論グループ（1989a,b）は、動詞のテ形（第二なかどめ）と連用形（第一なかどめ）が、主節とどのようなかわりを持っているのかについて詳細に記述しており、本論文において学ぶところが多い。しかしながら、言語学研究会・構文論グループ（同）では、本論文での考察対象である主節の述語が「V-サセル」であるものについては言及されていない。

それに対して、早津（1998a）は、本章で考察対象としている従属節が連用の形で、主節の述語が「V-サセル」である複文構造の使役文を対象に、従属節である連用の形が表す事態が主節の「V-サセル」の事態とどのようにかかわっているか詳しく考察している。本章は早津（同）の考察を参考にし、連用の形の従属節が表す事態が主節の「V-サセル」事態に対してどのようにかかわっているのか考察する。大きく、従属節の事態が、使役対象にかかわる使役主体の動作を表す場合と、使役対象にかかわらない使役主体自身の動作を表す場合に分けることができる<sup>28</sup>。以下、詳しくみていく<sup>29</sup>。

#### 5.3.2.1 使役対象にかかわる使役主体の動作

連用の形の従属節が表す事態が、使役対象にかかわる使役主体の動作を表すものがある。従属節の事態が使役対象にかかわる動作であるということから、従属節に使役対象が明示されることが多い。従属節の事態がどのような構文で現れ、従属節の動詞がどのような動詞であるのかによっていくつか分類することができる。

#### （ア）動作要求的な働きかけ

<sup>28</sup> 連用の形の従属節をとまなう「V-サセル」の中には、次のように使役主体の動作ではない、ある状況を示す場合もみられるが、これに関しては考察の対象からはずした。

- ・篠山では明治六年、城下の民家を借りて小学校が開設され、士族以外の者も入学させた。（坂の上の雲（一））
- ・（この学校は）クラスも成績順に A組、B組、C組にわけられ、組の名を書いた襟章を囚人のように胸につけさせるのである。（海と毒薬）

<sup>29</sup> なお、資料の中には次の例のように連用の形の従属節が複数現れ、どれを従属節とみなすのか判断しにくい場合もあるが、主節の「V-サセル」事態により従属的にかかわっているもの（下の例の場合、~~~~部分）を従属節と判断した。

- ・「先生の長州征伐のうらみを報じてやる」と、長州人は最初から復讐に燃えてやってきたのだが、小笠原唯八がそれをなだめ、かれらを入れず、ふたたび海へ退去させた。（坂の上の雲（一））

使役主体が使役対象に何らかの動作を行うように【命じる】【頼む】など、言語的に要求する動作を表す動詞の連用の形が従属節に来て、従属節全体で使役対象への言語的な働きかけを表す場合がある。従属節は、《{使役対象}ニ V（言語要求動詞）シテ/シ》という構文をとる。

(35) 艦長は副長に命じて、「総員上甲板」という指令を出させた。(戦艦武蔵)

(36) 鶴川は東京の生家にたのんで、ときどき甘いものなどを送らせた。(金閣寺)

(37) ボクのものばかり買って、自分のものを買っている様子がないので、一緒に G パンセンターに G パンを買いに行った時、オカンにも無理矢理、なにか買うように勧めて、スエードのパッチワークの付いたベストを買わせたことがある。(東京タワーオカンとボクと、時々、オトン)

(38) 中野坂上から駒場へ向かおうとするのを元子は運転手に云って<sup>30</sup>先に下落合へ行かせた。(黒革の手帖 (上))

さらに、従属節の述語が典型的な動作要求的な働きかけとはいえないものの、それに準ずるものとして次のようなものがある。

(39) 十吉はエンジンの馬力を落とし、自分の魚場へ着くと、新治に合図をして、調革をエンジンにつけさせ、それを舟べりのローラア・シャフトに巻かせた。(潮騒)

(40) 居間にもどった貞行は、信夫を手招きして自分の傍らに坐らせた。(塩狩峠)

これらの場合、上であげた (35) が「艦長は副長に「総員上甲板」という指令を出すように命じた」と言えるように、(39) も「十吉は新治に調革をエンジンにつけさせ、それを舟べりのローラア・シャフトに巻くように合図した」と言えるという点において共通している。(39) の「合図する」も、(40) の「手招きする」も、動作の相手（「{ヒト}ニ」）を必要とする動詞であり、動詞自体が相手に対して何らかの動作を促す内容を含んでいる（「太郎が花子にこっちに来なさいと{合図した/手招きした}」）。

---

<sup>30</sup> 「いう」の場合、動詞自体は言語要求動詞とはいえず、単なる発話動詞である。しかし、この場合は単に相手に発話するのではなく、「下落合まで行ってくださいお願いします」のような相手に動作を要求する内容の発話である。



### (イ) 態度的な働きかけ

従属節に使役主体による使役対象にかかわっていく態度的な動作が現れる場合がある。この場合の従属節は、《{使役対象}ヲ V (態度動詞) シテ/シ》という構文で現れるのだが、これらは、(ア) にちかい性質もあわせもっている。たとえば、下の (41) の場合、「証拠品の処分や逃走を手伝うように脅した」ということもでき、(42) も「キニーネ製造の研究を急ぎなさいと督励した」とも言え、主節に現れる「V-サセル」動作と態度的な働きかけが切り離せない、主節の動作は態度的な働きかけにいわば含まれるものとしてとらえることができる。

- (41) 「四番目は、第三者の単独犯行だ。保護司を訪ねた樹原亮が、強盗に出くわした。強盗は樹原を脅し、証拠品の処分や逃走を手伝わせた。…」(13 階段)
- (42) 衛生局は多額の補助金を一手に与えている国内製薬を督励し、キニーネ製造の研究を急がせた。(人民は弱し官吏は強し)
- (43) 信長は、自分の美意識を尊重し、それを人にも押しつけ、そのために数えきれぬほどの人間を殺してきたが、かれ自身が自分を殺すこの最期にあたってもっともそれを重んじた。駆け入るなり、宗仁をよび、「汝は武士ではないゆえ、死ぬな。死なずに女どもを取りまとめて落せ。信長が最後に、女どもを道連れにして死んだとあれば、世間に対してきたなし」と言い、ひるむ宗仁を叱りつけ、その命令どおりにさせた。(国盗り物語・織田信長)

### (ウ) 駆使・選抜

従属節の V に「使う」「選ぶ」など、動詞そのものが具体的な動作を表さない動詞がきて、使役主体の使役対象への働きかけが具体的な動作としてではなく、抽象的なものとして現れる。従属節は、《{使役対象}ヲ V シテ》の構造で現れる。

- (44) 鮎太は青年詰所に行って、そこにいた二、三人の子供を使っ、部落の三年以上の子供たちを集めさせた。(あすなろ物語)
- (45) 三日目。番人は信徒のうち男たちだけを選んで中庭に三つの穴を掘らせた。(沈黙)
- (46) 「そうです。すっかり夢中になっていた。三好晃子の方は尾島産業の社長を初め、専務、部長、とくわえ込んで、あの会社の金をずいぶん貢がせていたんです」(女社長に乾杯！)
- (47) 「さ、ここではなんともならぬ。破れ屋敷ながらどうぞ内へ。さ、お入りください」

と藤孝は導き入れ、客間に通し、小女をひとりつけて汗ばんだ衣服を着かえさせた。(国盗り物語・織田信長)

### (エ) 派遣型

従属節に使役主体が使役対象をあるところに移動させる事態が現れる。この場合、使役主体は使役対象を、①使役主体のところから別のある場所へ移動させる場合((48)～(50))、②使役主体自身が使役対象を伴って一緒にあるところへ移動する場合((51))がある。これらの場合、従属節は《{ヒト}ヲ{場所}ニ V (移動) シテ/シ》の構文で現れ、いずれの場合も使役主体にとって使役対象をあるところに移動させることが主たる目的ではなく、あるところへ移動させ、移動先で主節に示される V という動作をさせることが主たる目的である。

(48) 清信は、義昭の手紙を運搬する担当者となった。清信自身は旅に出られないが、自分の家来を四方にやって諸国の大名に使いさせたのである。(国盗り物語・織田信長)

(49) 五月二十九日、城壁トルコ軍によって突破、の報を受けるやただちに、スルタンの陣営に使節を派遣し、ジェノヴァ居留区が中立を維持しつづけた事実を訴えさせた。(コンスタンティノープルの陥落)

(50) (素破、その日は彼の者、かならず別府城におるわ)と見、越前と近江へそれぞれ密使を走らせて出兵の準備をさせた。(国盗り物語・斎藤道三)<sup>31</sup>

(51) ぼくは彼を仲間といっしょに公園へつれていき、競走をさせた。(裸の王様)

### (オ) 授与型

従属節に使役主体が使役対象に具体的なモノ、または抽象的なモノ(「権力」や「機会」など)を与え、それを受けた使役対象が使役主体の望む動作を行う。従属節は《{使役対象(の場所)}ニ{もの}ヲ V (授受動詞) -シテ/シ》の構文で現れる。そして、従属節の事態は主節の事態に対する対象(動作対象)を準備するような動作である。

(52) 影村は、なんとなく高飛車だった。加藤に、酒はすすめなかったが、空の盃を加藤の前につき出して、彼に酌をさせた。(孤高の人)

(53) 医者である吟子がそれを買いにいくのではいかにも辛い。といって志方にゆかせるわ

<sup>31</sup> 対象とした資料の中に、上の例のように連用の形の従属節の述語も「V-サセテ」の形で現れ、何らかの働きかけを表す場合がある。本章ではこれらの例も含めて考察を行った。

けにもいかない。やむなく吟子はようやく外で遊び始めたトミに紙片を持たせて買いに行かせた。(花埋み)

(54) 円満解決のためのたった一つの方法は、何百万円かのかねを登美子に渡して、それを代償に、生涯の縁切りを誓約させることだった。(青春の蹉跌)

(55) 少年のころから道三が、「これからは鉄砲だ」と言い、堺から購入した鉄砲を光秀にあたえ、その術を練磨させた。(国盗り物語・織田信長)

(56) 彼は自国者であろうが他国者であろうが、才能がありさえすれば国籍を問わず自分の幕僚に加え、気前よく権力をあたえてその才能を思うさま発揮するようにさせた。(流亡記)

#### (カ) 物理的な働きかけ

使役主体が使役対象に直接・物理的に手を下して働きかけ、主節に現れる「V・サセル」動作を実現させるためのいわば準備的な動作である。この場合、従属節は《{ヒト/ヒトの部分}ヲVシテ/シ》で現れ、主節の「V・サセル」のVは姿勢・位置変化を表す意志的な自動詞がほとんどである。

(57) 陶芸室のドアを開けたとき、島崎さんが真先に駆け寄ってきた。車椅子から立ち上がった秀丸さんを孫娘のような仕草で支え、テーブルにつかせる。(閉鎖病棟)

(58) 「構え〜っ」班員の一人が叫び、それを合図に二人が山口に近寄り、両腕を掴んで立たせた。(僕たちの戦争)

(59) 光秀はお榎を抱きあげ、寝わらの上まで運んでゆき、そっと藁のなかに埋もれさせた。(国盗り物語・織田信長)

これらは、使役主体が使役対象に直接手を下して動作を行わせていて、使役対象が自らの意志をもって主節の動作Vを行っているものではない。つまりこの場合の使役対象は典型的なヒトとは言えず、いわばモノに近いもので、主節の「V・サセル」は典型的な使役動詞というよりも他動詞的に働いているものに近いのかもしれない。

#### (キ) その他の働きかけ

上にあげたいいくつかの具体的な働きかけ以外に、次のようなものもある。これらをどのように位置づければいいのか、今のところはっきりわからない。

- (60) 内海はウェイトレスを呼び、メニューを持ってこさせた。(柔らかな頬 (上))
- (61) 煙草売場で、トキが居眠りしていた。起こして、志乃をよばせた。(忍ぶ川)
- (62) このまま「彼」と結婚してしまうことになるのだろうか。「彼女」は、「彼」が大学を卒業するまで七瀬を今のまま「彼」の恋人にしておき、「彼」が社会へ出ると同時に七瀬を「彼」と結婚させるつもりでいる。(エディプスの恋人)
- (63) やむなく義竜はこの九月十八日討伐軍をおこし、長井隼人佐道利という者を大将にして三千七百人の人数でもって明智城をかこみ、攻城二日間で陥落させた。(国盗り物語・織田信長)

以上、複文の終止の形の「V-サセル」の従属節が、使役対象にかかわる使役主体の動作を表す場合、その動作が具体的にどのような動作であるのかみてきた。これはすなわち、使役主体が使役対象に対してどのように働きかけたのか、その働きかけの内実をみたことになる。従属節に人への何らかの働きかけが具体的に現れやすいのは、主節の述語が「V-サセル」である場合の大きな特徴だと思われる。「～シテ」「～シ」の連用の形の従属節と主節とのかかわりについて考察した先行研究の多くは、主節述語がスル形である場合のみを対象に主節のスル形と従属節の意味的なかかわりについて細かく記述しているものの、主節述語が「V-サセル」である場合は考察の対象に含まれていない。そして、先行研究で述べられている主節のスル形と従属節のかかわりは、ここで述べた主節述語が「V-サセル」の場合の従属節のかかわりとはかなり異なり、主節述語がスル形であるか「V-サセル」であるかによる違いが明らかにみられる。すなわち、(ア) 動作要求的な働きかけ、(イ) 態度的な働きかけ、(ウ) 駆使・選抜、(エ) 派遣型、(オ) 授与型、(カ) 物理的な働きかけは、主節述語がスル形の場合にはあまり見られず、述語が「V-サセル」である場合、および「V-サセル」文と同じ事態を表しうる一部の他動詞文<sup>32</sup>にみられる従属節の特徴ではないかと思われる。

そして、(キ) の「その他の働きかけ」としたものは、次節で述べる「使役対象とかかわらない使役主体の動作」につながっていくものではないかと思われる。

### 5.3.2.2 使役対象とかかわらない使役主体の動作

連用の形の従属節に、使役対象とかかわらない使役主体自身の何らかの動作が示される場合がある。この場合は、前節とは違い、使役対象が主節に現れることがほとんどである。

---

<sup>32</sup> 「太郎は妹に頼んで前髪を切った」、「太郎は評判のいい建設会社を選んで家を建てた」のような他動詞文のことである。これらの文は、それぞれ「切らせた」、「建てさせた」の使役文と同じ事態を表している。

以下、主節に示される使役動作に対して従属節の使役主体の動作がどのようにかかわっているのか具体的にみていく。

#### (ク) 準備

従属節に使役対象とかかわらない使役主体自身の動作ではあるが、その動作は主節の「V-サセル」動作を実現させるために必要な動作である。そして、従属節に主節の動作を成り立たせるための要素（動作の対象、動作を行う空間・場所など）が明示される。たとえば、(64)の場合、主節の事態「(手紙を)宿の人に持ってやらせる」ために、使役主体は「手紙を書く」のであって、従属節の事態は主節の事態の動作の対象を準備しているのである。

(64) さっそく織田家の家中の猪子兵助という者に手紙を書き、宿の主人に持ってやらせた。

(国盗り物語・織田信長)

(65) 健太が「お前の料理はサイコー」と言ってくれた納豆スパゲッティを山盛りつくって食べさせる。(僕たちの戦争)

(66) 道三は北野城の防衛第一線を、北野から二里南方の岩崎城とし、ここを部将の林道慶にまもらせていた。(国盗り物語・織田信長)

また、従属節における使役主体の動作の相手と主節の「V-サセル」の相手（使役対象）がそれぞれ別の人で、主節の「V-サセル」動作の実現に必要な動作を使役主体自身でも使役対象でもない、第三者に行うように働きかけるものがある。

(67) 私たちがそれまでいた窓際の席に、五人も坐るのは無理だったので、席を別のテーブルに移させてもらった。ウェーターのひとりが、素早く子供用の背の高い椅子を持ってきてくれた。内藤は自分と私との席のあいだにその椅子を置いてもらい、そこに幼女を坐らせた。(一瞬の夏)

#### (ケ) きっかけ

使役主体が何らかの心理的な変化、または、聞いたり見たりした知覚的な動作が従属節に現れ、その心理・知覚的な変化がきっかけになって使役対象に「V-サセル」事態を引き起こすものがある。

(68) 「父上、お人ばらいを」と言った。藤孝は異変を察し、十四屋を退出させた。(国盗り

物語・織田信長)

- (69) 猪口艦長は漸く武蔵の沈没を予想し、護衛艦清霜と至近弾を受けた島風と交代した浜風に、「負傷者を移乗させるから接舷せよ」という手旗信号を送らせた。(戦艦武蔵)
- (70) 朝、母親が上手に乳を絞った。乳を温めたときに表面に浮く薄膜が身体に良いと聞き、母親はチュウさんだけに食べさせた。(閉鎖病棟)
- (71) 羯南は子規という一個の才能のために自分が砥石となってやろうと思い、書籍を貸したり、議論をしたり、体をいたわらせたりした。(坂の上の雲 (一))

## (コ) 方法・手段

従属節に示される事態が主節の「V-サセル」事態を実現させるための具体的な方法・手段を表す場合がある。従属節の事態は主節の事態を実現させるために使役主体が意図的に行っているものであるが、主節の事態は(72)、(73)のように意志的な動作である場合もあれば、(74)、(75)のように無意志的な動作である場合もある。

- (72) トラックに進出以来、山本は一度も日本へ戻らなかったが、三和や渡辺ら幕僚たちは、時々要務を帯びて東京へ出張することがあった。そういう時、彼女は、神谷町の家で彼らをもてなし、更に、自腹を切って、築地あたりで賑やかに遊ばせたようである。(山本五十六)
- (73) 明子の両親は、五年前に相次いで病死した。以来、姉京子が親替りである。京子は酒場勤めをして生計を立て、明子を高校に通わせてきた。(砂の上の植物群)
- (74) 私が彼の北海道行きを調べて歩いた間でも、兩人の心中当夜、その香椎の現場に安田が影のように立っているのを絶えず確信していました。どういう役割かわからない。まさか催眠術を使って心中させたわけでもあるまい。(点と線)
- (75) あのころは本当に、ずいぶんズボさんを恨んだもんだ。今考えてみりゃ、自分の子どもなんだもの、いつきだって手放したアタシが悪いんだし、預けてるあいだいくら忙しくたって、しょっちゅう顔出してアタシが母親だってことをあの子にわからせるべきだった。(空中庭園)

## (サ) 原因

従属節の使役主体の動作が、主節の「V-サセル」事態に対して原因として働く場合がある。原因となる使役主体の動作は、(76) (77) のように使役対象にかかわる動作もあれば、(78)

(79) のようにそうでない場合もある。しかし、従属節に現れるこれらの原因となる動作は、使役主体が使役対象に V という動作を引き起こすために意図的に行ったものなのかどうかはつきりせず、どちらかというとな意図的なものに近いといえる。そして、この場合の主節の「V-サセル」の V のほとんどは無意志動詞に限られる。

(76) 今で言えばあれは、ストーカーに分類されるのだろう。かなり、しつこい女性もいた。

春の同級生で、たびたび我が家に押しかけてきては、私や父を悩ませた。(重力ピエロ)

(77) 「おれはショスタコーヴィッチの〈森の歌〉を聞きに行ってるんだ。文句があるか」と、彼は反論して相手をへこませたのだそうだ。(風に吹かれて)

(78) 黒谷という男は、決して勘が悪くはないのだが、カマボコとチクワの区別がわからなくて、或る時、太郎を唾然とさせたことがある。(太郎物語・高校編)

(79) 自分は夏に、浴衣の下に赤い毛糸のセーターを着て廊下を歩き、家中の者を笑わせました。(人間失格)

#### (シ) 単なる継起、羅列、対照的な事態

連用の形の従属節が表す事態としてそれほど多くないが、主節の「V-サセル」動作とかかわりのない、単に時間的な継起関係で結ばれているもの((80))、動作を単に羅列しているもの((81))、二つの動作が対照的なもの((82)(83))がある。これらの場合、中止形といってもシテ形で現れるものは少なく、ほとんどがシ形である。

(80) (兄は)「どうしたんだ、何か急ぎの用事でもあるのか、ちょうど、患者がすいているから、ここで話してゆけばいいだろう」といい、看護婦を調剤室の方へ行かせた。(白い巨塔(一))

(81) 患者の中には身内が逃げ出して、血まみれの下痢をしながら体を洗ってもらうことさえできずに放置されていたケースもあるのだから。(ケースワーカーの人たちは)そういう人たちを洗い、寝かせ、落ち着かせる。(貧困の光景)

(82) そして他処からの貰いものがあると、祖母は自分ではそれを食べないで、鮎太に食べさせた。(あすなろ物語)

(83) 庄九郎は、お万阿に座をはずさせ、耳次を近う寄らせた。(国盗り物語・斎藤道三)

この節では、連用形の従属節が使役対象とはかかわらない使役主体自身の何らかの動作

を表す場合、主節の使役動作とどのようにかかわっているのか具体的にみてきた。これらの場合、5.3.2.1 とは違い、主節の述語が使役動詞「V-サセル」でない場合にもみられるものである。言語学研究会構文論グループ（1989a,b）は、動詞のいわゆるテ形（「V-シテ」）と連用の形（「V-シ」）のそれぞれの主節とのかかわりを細かく記述しているが、主節述語が使役の形ではないものを主たる対象としている。それをみると、分類の方法は異なるものの、この節であげたような従属節と主節のかかわりをなしているものの例はみられる。しかし、一方で、5.3.2.1 であげた使役対象にかかわる使役主体の動作のような例はみられない。このことから、5.3.2.1 でみた従属節の事態は、主節の述語が「V-サセル」である場合にみられる特徴的な事態であるといえるのではないかと思う。

なお、5.3.2.1 の従属節が使役対象のかかわる動作を表すもの（(ア) から (キ)）は、従属節の事態と主節の事態とのかかわりという広い観点から考えると、(ク)「準備」の一部として位置づけることも可能である。

### 5.3.3 複文の主節述語としての終止の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅰ）

5.3.2 では、連用の形の従属節が表す事態が主節の「V-サセル」事態とどのようにかかわっているのかみてきた。そして、連用の形の従属節は、主節の「V-サセル」に対して次のような関係で結ばれていることを示した。

#### ・使役対象にかかわる使役主体の動作

- (ア) 動作要求的な働きかけ 【母親が太郎に頼んで夕食の準備をさせる】
- (イ) 態度的な働きかけ 【母親が怠け者の太郎を叱って宿題させる】
- (ウ) 駆使・選別 【母親が太郎を使って隣の家にはリンゴを持って行かせる】
- (エ) 派遣型 【母親が太郎を駅まで行かせて新聞を買って来させる】
- (オ) 授与型 【母親が太郎にお金を渡して好きな本を買わせる】
- (カ) 物理的な働きかけ 【母親が太郎の手を握って立たせる】
- (キ) その他の働きかけ 【母親が太郎を起こして買い物に行かせる】

#### ・使役対象にかかわらない使役主体の動作

- (ク) 準備 【母親がラーメンをつくって太郎に食べさせる】
- (ケ) きっかけ 【母親が今日は天気がいいと思って太郎に布団を干させる】
- (コ) 方法・手段 【母親が毎日働いて太郎にスケートを習わせる】
- (サ) 原因 【母親が突然倒れて太郎を心配させた】
- (シ) 単なる継起、羅列、対照的な事態 【母親が太郎に掃除をさせて靴を磨かせる】



ここでは前節までの考察をふまえて、連用の形の従属節を伴う「V-サセル」文がどのような意味を表すのか考えてみる。

まず、5.3.2.1 でみた連用の形の従属節が使役対象とかかわる使役主体の動作を表す場合、「V-サセル」は《引き起こし》の意味を表す。これは、使役主体による何らかの働きかけが従属節にはっきり明示されているので当然のことであろう。

次に、5.3.2.2 でみた、従属節に使役対象とかかわらない使役主体の動作が示されている場合も、ほとんどが《引き起こし》の意味を表す。これらのほとんどは、従属節に現れる事態の主体が使役主体であり、その動作がなんらかのきっかけとなって使役主体が使役対象に V という動作をさせるものである。佐藤（1986：110）は、「「人が人に～（意志動詞）させる」文があらわすできごとは、使役主体の何らかのうごき（はたらきかけ）がなければ動作主体の動作そのものが生じえないばあいと、使役主体のうごき（はたらきかけ）のありなしにかかわらず、動作主体の動作が生じるばあいがある」としたうえで、前者を「動作の源泉が使役主体にある」場合であるといい、後者を「動作の源泉が動作主体にある」場合であるという。そして、動作の源泉が使役主体にある場合、《指令》（本論文でいう《引き起こし》）を表し、動作の源泉が動作主体にある場合、《許可》《放任》を表すと述べている。前にあげた、5.3.2.1 はもちろん、5.3.2.2 でみた用例は、佐藤（同）でいう「動作の源泉が使役主体にある」ものとして解釈でき、《引き起こし》の意味として捉えられるものである。

さらに、これらのものが《引き起こし》の意味を表す構文的特徴として、従属節と主節の事態が従属的な関係であるということがある程度かかわっているように思われる。本章で考察の対象とした用例の中で《許可》または《放任》の意味として解釈できる例は、次のようなものである。

- (84) ロイド・ジョージは眼を悪くしていたが、英国史上初めての「民衆出身総理」で言動の粗野なことには定評のあったこの元宰相は、山本提督、あなたの顔を見ることが出来ないのが残念だからせめて手で撫でさせてくれと言い出し、山本は、ジョージが熊の手のような毛だらけの手で、自分の顔を撫でまわすのをじっとそのままにさせていた。（山本五十六）

- (85) 一方、医者としての吟子の評判が高まるにつれ、女医志願者は日を追って増えていた。中には吟子の名声をきいて地方から上京し、何の紹介もなしに直接吟子の家へとび込

み、書生よろしく寄食するという勇ましい女医学生まで現れた。来るものはこばまず、  
吟子は彼女等を自由に二階の空部屋へ住ませた。(花埋み)

- (86) 元子は樽林の指を握った。彼の顔がびくりと動いたが、眼を正面にむけたままで、すぐには彼女のその手をたぐりよせようとはせず、元子に握らせた指は任せたままで遊ばせていた。(黒革の手帖 (上))

- (87) 夕方、また雑貨屋の親爺さんが駆けつけて来る。「お宅の御主人から電話でした。矢須子さんのお父さんとも相談して、病人の云う通りこのまま入院させることにした。(黒い雨)

まず、(84) は、従属節に現れる事態が使役主体の動作ではなく、使役対象の動作が明示されており、それがきっかけとなって使役主体が使役対象に動作を行わせているもので、動作の源泉が使役対象にあるものである。そして、(85) と (86) の従属節の述語は否定の形で現れていて使役主体のある種の態度を表しているが、それは積極的な態度とはいえず、いわば受動的な態度である。これは使役対象の何らかの動作がきっかけとなって行う態度とも捉えることができるものである。そういう点において、(85) (86) の例は (84) の例と同じように、動作の源泉が使役対象にあるものと解釈できる。さらに (85) (86) の例は、従属節と主節の事態の関係において、従属的な関係ではなく、対照的な関係である。このような意味的なかわりは、いずれの従属節もシテ形ではなくシ形であるという構文的な特徴からもうかがえる。そして、(87) の例も従属節事態は使役対象とはかわりのない使役主体の動作であり、主節事態と従属的な関係であるとはいえない。連用の形の従属節を伴う「V-サセル」は、従属節と主節の主語、動作・変化の主体がともに使役主体であり、二つの事態は何らかの従属的な関係をなすものが多く、このことが《引き起こし》の意味を表しやすくしているのではないだろうか。

#### 5.3.4 複文の主節述語としての終止の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅱ）

次に、連用の形の従属節をともなう主節述語の「V-サセル」が表す使役の意味を観点Ⅱから考えてみる。この場合も、5.3.2 節でみた連用の形の従属節の表す事態が手掛かりになる。

まず、5.3.2.1 でみた、(ア) 動作要求的な働きかけ、(イ) 態度的な働きかけ、(ウ) 駆使・選別、(エ) 移動型が従属節として現れている例をみると、「V-サセル」文は、使役主体自身が実現させたい事態があって、その事態の実現のために自ら動作を行わず、代わりに使役

対象に動作を行わせるという意味を表し、『つかいだての使役』として解釈できるものがほとんどである<sup>33</sup>。前にあげた例もそうであるが、次の例からもそのことがうかがえる。

- (88) 東洋新聞ブースには小島だけがいて、デパートの販売促進課の担当者に電話取材していた。三年ぶりの「寒い冬」で、衣料品や暖房器具といった冬物商戦が活況を呈している。地方紙時代よく使ったネタを小島に指示してやらせていた。(半落ち)
- (89) 「PX の横流し?」「そうよ。闇ドルを買い集めて、それで脱走兵なんかをそそのかしてね、PX の品物を買ってこさせるわけ。それを、お酒でもタバコでも、闇市で高く売ってたの」(地下鉄に乗って)
- (90) さっそく庄九郎は、赤兵衛を奉行とし、地割りをさせ、材木を集めさせた。(国盗り物語・斎藤道三)
- (91) (合戦には負けたが外交で締めあげてやる)と、信秀は大得意だった。さらにかれは、重臣の織田播磨守、竹腰道鎮の二人に人数をつけて大垣城に派遣し、美濃衆に加勢させた。(国盗り物語・斎藤道三)

(オ) 授与型の場合、『つかいだての使役』と『みちびきの使役』のどちらも現れる。5.3.2.1 であげた (52) から (54) の例は『つかいだての使役』であり、(55) (56) の例は『みちびきの使役』と解釈できる。前にあげた例を再掲する。

- (92) 影村は、なんとなく高飛車だった。加藤に、酒はすすめなかったが、空の盃を加藤の前に突き出して、彼に酌をさせた。(孤高の人) (= (52))
- (93) 少年のころから道三が、「これからは鉄砲だ」と言い、堺から購入した鉄砲を光秀にあたえ、その術を練磨させた。(国盗り物語・織田信長) (= (55))

そして、次のようなものも、従属節の事態が授与型として解釈できるが、使役の意味として『みちびきの使役』を表している。

<sup>33</sup> 対象とした用例の中には、次のように『みちびきの使役』として解釈できるものもあるが、全体からするとごく少数である。

- ・「息子さんはこの銀行のキャッシュカードを持っているわけですか」「はい。お小遣いが足りなくなったら、ここから引き出しなさいといって、持たせていました」ぼそぼそとした声で路子はいった。(さまよう刃) (動作要求的な働きかけ)
- ・この間、庄九郎は諸将を毎日のように城内に詰めさせ、かれ一流の戦法を十分に習熟させた。(国盗り物語・斎藤道三) (派遣型)

(94) 星はパンフレットの「選挙大学」をくばり、その巻頭に印刷してある青年道徳法典の個所を、声をあわせて朗読させた。(人民は弱し官吏は強し)

(95) 彼は私に教えて、左手を上にした持ち方からはじめ、腮当りへ腮を当てる具合や、歌口にあてがう唇のひらき方、幅の広い薄片のような風をそこへ送るコツなどを、念入りに習得させた。(金閣寺)

従属節の事態が授与型である場合、使役主体から使役対象に何らかの所有権が移行し、それをもって使役対象に変化が生じる事態が多く現れ、どちらかというところ《みちびきの使役》を表しやすいように思われる。

一方、(カ) 物理的な働きかけの場合、使役主体自ら使役対象に手を下して動作を行わせているものであるが、その動作の実現は使役主体自身のためのもではなく、使役対象のためのものである。もう少し具体的にいうと、使役主体は使役対象に手をかけることによって使役対象の目に見える状態変化、または精神的な変化を望んでいるのである。つまり、これらは使役の意味（観点Ⅱ）として《みちびきの使役》を表している。5.3.2.1 であげた例も含めて、次の例もそうである。

(96) 翔人は、よたよたと婆さんをカブまで運び、荷台に座らせた。(しゃぼん玉)

(97) 「杉丸、杉丸」とお万阿は手代の杉丸をひっぱってきて、廊下から室内を見させた。(国盗り物語・斎藤道三)

次に、5.3.2.2 の従属節の事態が使役対象とかかわりのない使役主体の動作を表す場合について考える。(ク) 準備、(ケ) きっかけ、(コ) 方法・手段、(シ) 単なる継起、羅列、対照的な事態の場合<sup>34</sup>、5.3.2.1 の使役対象にかかわる使役主体の動作に比べて、使役の意味（観点Ⅱ）に顕著な偏りがあるとはいえない。特に、(ク) 準備、(ケ) きっかけの場合、《つかいだての使役》《みちびきの使役》のどちらの例もみられる。それぞれの従属節が表す事態における《つかいだての使役》の例と《みちびきの使役》の例をあげる。

#### (ク) 準備

(98) その時刻になると、金網の中から出てきた監理人が、紙屑を整理しながら集め、緑色の袋につめて製図工二人にかつがせる。(戦艦武蔵)

<sup>34</sup> (コ) 方法・手段の一部、そして(サ) 原因に関しては、「V-サセル」のVが無意志動詞であるため、使役の意味（観点Ⅱ）から論じることができない。

(99) 体温を測ると三十八度だった。吟子は早速風邪薬を調合し氷枕を用意して志方を休ませた。(花埋み)

(ケ) きっかけ

(100) 「(前略) ある日、漁港の組合長が東吉の絵を見て気に入ってくれて、自分の漁船の舳先にペンキで絵を描かせたんだ。(後略)」(GO)

(101) 基一郎は、徹吉の弟であり上ノ山町では顔役である城吉をねざらい、あちこち箱根の山中を見物させた。(楡家の人びと)

従属節事態が(コ)方法・手段を表す場合、「V-サセル」が意志動詞である場合はそれほど多くないが、対象とした例を見る限りでは《みちびきの使役》を表している。

(102) わたくしはただ今、乏しい家計を割いて、節子にピアノを習わせた。(草の花・春)

(シ) 単なる継起、羅列、対照的な事態の場合、従属節事態と「V-サセル」事態とで意味的なかわりがないため、従属節が表す事態によって表す使役の意味に特徴を見出すことはできない。

以上の考察を踏まえ、連用の形の従属節を伴う「V-サセル」がどのような使役の意味を表すのか、その分布を示すと次のようになる。

表 13：複文の主節述語の終止の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅰ）の分布

《引き起こし》	《許可》	《放任》	不明	合計
415	4	1	9	429

表 14：複文の主節述語の終止の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅱ）の分布

《つかいだて》	《みちびき》	不明	合計
190	101	76	367 <sup>35</sup>

連用の形の従属節を伴う「V-サセル」の場合、従属節に使役主体の使役対象への働きかけが具体的に明示されることが多いことから、ほとんどが《引き起こし》を表すといえる。

<sup>35</sup> この合計は、V が意志動詞である場合の合計である。

しかし、動作の実現が誰のためのものかという観点Ⅱからは《つかいだての使役》と《みちびきの使役》のどちらもみられ、偏った傾向はみられなかった。

#### 5.4 連用の形の従属節と主節述語の「V-サセル」

先述したように、「V-サセル」は多くが複文の従属節をともなっており、その中でも連用の形の従属節を伴うものが多い。

ところで、連用の形の従属節をともなう「V-サセル」の場合、ほとんどが従属節と主節のかかわりが従属的な関係であり、5.3.2.2 の(シ) でみた単なる継起や羅列、対照的な事態をあらわすものは少ない。このような傾向は使役文があらわす事態の複合性によるものだと考えられる。佐藤(1986: 92)は、「述語の位置をしめる使役動詞は、もとなる動作をうちにふくみながら、それに使役性がくわわった複合的な意味をもつ動詞である」と述べ、さらに「使役構造の文には、使役主体と使役動作との、動作主体と動作との、ふたつのできごとが含まれている」(1986: 93)と述べている。本章で考察の対象とした連用の形の従属節をともなう「V-サセル」は、従属節に佐藤(1986)のいう「使役主体の使役動作」を、そして、主節に「動作主体の動作」を示すのにふさわしい構文だといえる。そして従属節の使役主体の使役動作のほとんどは使役対象の何らかの動作に対して許可したり放任したりするものではなく、使役主体の意図による積極的なはたらきかけである。

このように、連用の形の従属節をともなう「V-サセル」は、従属節と主節とで密接なかかわりをもっているが、従属節の連用の形をみると、「V-シテ」だけでなく、「V-シ」も多くみられる。言語学研究会・構文論グループ(1989a)によると、「従属的な関係のなかにある、ふたつの動作・状態は第二なかどめの形(V-シテ(筆者注))で表現されているのにたいして、非従属的な関係の中にあるそれは、第一なかどめの形(V-シ(筆者注))で表現されているのである」(p.14)としている。このような先行研究の考え方に倣うと、複文の主節の述語が「V-サセル」がともなう連用の形の従属節はほとんどが「V-シテ」の形で現れやすく、「V-シ」の形はあまりみられないということになるだろう。しかし、主節の述語が「V-サセル」である場合、「V-シ」の形で従属的な関係をあらわす場合が多くみられ、「V-シテ」との違いがさほど感じられなくなる<sup>36</sup>。

#### 5.5 第5章のまとめ

本章では、連用の形の従属節をともなう主節述語としての終止の形の「V-サセル」を対象

---

<sup>36</sup> もちろん、前にあげた「V-シ」の従属節の事態が主節の「V-サセル」の事態に対して継起・羅列、対照的な事態をあらわす場合、従属節は「V-シ」の形で現れているものがほとんどである。

に、従属節と主節の事態がどのようにかかわっているか、そしてそのかかわりによって使役の意味に違いがみられるのか考察した。「V-サセル」が文の述語として用いられる場合、その文は単文で現れるよりも、多くが従属節をともなう複文構造で現れ、そのなかでも「V-シテ」「V-シ」のような連用の形の従属節をともなうものがほとんどである。そして、「V-サセル」が連用の形の従属節を伴う場合、連用の形の従属節が表す事態のほとんどは使役主体による何らかの動作（使役対象にかかわる動作の場合もあればそうでない場合もある）であり、それがきっかけとなって使役対象が動作を行うという事態が文全体で示されている。つまり、連用の従属節をともなう複文構造の「V-サセル」は、ほとんどが動作をおこなうきっかけ（佐藤（1986）がいう「動作の源泉」）が使役主体にある《引き起こし》を表しており、動作のきっかけが使役対象にある《許可》《放任》を表すものはほとんどみられない。これは複文の従属節と主節の関係が従属的な関係にあり、それによって従属節と主節の文の主語を一致させるということ、すなわち、「V-サセル」文の主語にたつのは使役主体であるということとも関係していると思われ、この章で考察しなかった連用の形の従属節以外のものについても考察する必要があると思う。

## ◆第Ⅱ部のまとめ

以上、第Ⅱ部では、「V-サセル」の文中における形・機能に注目して、「V-サセル」が連用の形で現れる場合、条件の形で現れる場合、そして終止の形で現れる場合をとりあげ、考察を行った。

まず、「V-サセル」が連用の形である場合、表す使役の意味としてほとんどが《引き起こし》であり、かつ《つかいだての使役》を表す。このような偏りは、連用の形の従属節である「V-サセル」が表す事態が主節のあらわす事態に対して準備的な動作を表すということとかかわっている。

次に、「V-サセル」が条件の形である場合も条件の形の「V-サセル」全体を通してほとんどが《引き起こし》を表すものが多い。しかし、「V-サセルト」「V-サセレバ」「V-サセタラ」のそれぞれの形において表す使役の意味にいくらか違いがみられ、「V-サセレバ」の場合、《引き起こし》以外の使役の意味を表すものはみられず、「V-サセルト」も1例のみが《許可》を表し、それ以外はすべて《引き起こし》であった。そして、「V-サセタラ」には他の形式にはみられない《放任》（《非意図的な放任》）を表すものが少しみられた。そして、これらの形を《つかいだての使役》か《みちびきの使役》かという観点からみると、「V-

サセタラ」の場合《みちびきの使役》を表すものが《つかいだての使役》を表すものより多かったが、全体としては二つの意味における目立った偏りは見られなかった。

最後に、「V-サセル」が終止の形である場合、単文の述語として現れるよりも、複文の主節述語として現れることが多かった。中でも、連用の形の従属節をともなうものが多く、従属節に使役主体の動作が現れることがほとんどである。従属節に現れる使役主体の動作は、使役対象にかかわる使役主体の動作である場合と、使役対象とは関係のない使役主体自身の何らかの動作が明示される場合があったが、いずれの場合も、主節の「V-サセル」事態に対して何らかのかかわりを持つものである。このような構文的な特徴は、「V-サセル」文が表す二つの複合的な事態、すなわち、使役主体の使役対象への何らかの働きかけと使役主体の働きかけによる使役対象の動作という二つの事態を具体的、かつ明示的に示している。

そして、従属節が表す事態と主節の「V-サセル」事態とのかかわりによって、観点Ⅰ、観点Ⅱによる使役の意味にいくらか特徴がみられた。観点Ⅰから考えると、ほとんどが《指令》を表し、《許可》、《放任》を表すものが4例のみであったが、《許可》、《放任》を表す4例の従属節は主節とのかかわりにおいて従属的な関係ではないという特徴がみられた。一方で、観点Ⅱからみると、5.3.2.1と5.3.2.2で分けた従属節があらわす事態によって使役の意味の傾向が少しみられた。



## 第Ⅲ部「V-サセル」と補助動詞とのくみあわせ

第Ⅱ部では、「V-サセル」における文中での形・機能に注目し、「V-サセル」が連用の形である場合(第3章)、条件の形である場合(第4章)、終止の形である場合(第5章)に分けて考察を行った。この第Ⅲ部では、「V-サセル」のいわゆるテ形に補助動詞が後接した場合に焦点をあてて考察する。「V-サセル」に補助動詞がついた形として、「V-サセテイル」「V-サセテアル」「V-サセテミル」「V-サセテオク」「V-サセテシマウ」「V-サセテモラウ」など、多くある。そして、このような「V-サセル」のテ形に補助動詞がついた形の中には、従来の使役の研究の中で、使役の意味といくらかかわりをもっているとされているものがあり、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」「V-サセテオク」「V-サセテシマウ」がそうである。すなわち、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」は《許可》の意味とかかわりがあるとされ、「V-サセテオク」は《放任》の意味、そして「V-サセテシマウ」は《非意図的な放任》とかかわりがあるという。ここでは、これらの3つの形が実際にどのような使役の意味を表しているのか、実証的に考察する。そして、考察の際に、主に次の点に注目する。

(ア) 文中における働きかけの明示

(イ) 使役主体と使役対象の関係

(ウ) 各形式の文中における形・機能(連用の形か、条件の形か、終止の形か)

(エ) Vの語彙的な意味

(ア)、(イ)、(ウ)は第Ⅱ部での考察と重なるところがあるので、ここで改めて説明することはせず、(エ)のVの語彙的な意味における分類の観点について少し述べる。本論文におけるVの語彙的な意味の分類は、早津(2006、2013b)の分類を多く参考にしている。早津(同)は、Vをまず他動詞か自動詞か、そして、他動詞の場合、その動作が何らかの変化を引き起こすかどうか、引き起こすとすればそれは何の変化か(動作対象の変化、動作の相手の変化、動作主体自身の変化)という点であり、自動詞の場合は、その動作が動作主体自身にとどまる動きなのか、他者とかかわりをもつ動作なのか、という点に注目している。そして早津(2013b: 4f.)では、動詞を次の4種5類に分け、動詞の語彙的な意味と使役の意味との関連性を明らかにしている。

(a) 対象変化志向の他動詞

：事物に働きかけることによって、その物や事柄に広い意味での変化を生じさせることを表わす他動詞

【切る/（湯のみに酒を）つぐ/（筆筒から服を）出す/運ぶ/作る/なでる/（人を部屋に）通す/（クーラーの強さを）弱める/行う】

(b) やりとり志向の他動詞

：人と人との間の物や情報のやり取りを表わす動詞

(b-1) 授与・発信型：与えたり伝えたりする相手が物や情報を保有する状態に変化する

【ゆずる/言う】

(b-2) 取得・受信型：動作主体が物や情報を保有する状態に変化する

【うけとる/聞く】

(c) 主体変化志向の他動詞

：動作の結果として動作主体自身にも何らかの変化を生じさせる動作を表わす動詞

【見る/考える/理解する/調べる/習う/経験する/着る/食べる/（顔を）洗う】

(d) 主体変化志向の自動詞

：動作主体自身に新しい状態をもたらす動作を表わす自動詞

本論文では、早津（2006、2013b）の分類を踏まえ、それぞれの形式の V を対象変化動詞、非対象変化動詞、やりとり動詞、主体変化動詞、主体活動の 5 類にわけ、その中での変化・非変化の内実によって以下のような下位分類を行うことにする。

- |           |                  |                  |
|-----------|------------------|------------------|
| ・ 対象変化動詞  | 位置変化             | 【運ぶ 出迎える 陳列する】   |
|           | 状態変化             | 【殺す 洗う 紛失する】     |
| ・ 非対象変化動詞 | 接触               | 【触る もむ なぐる】      |
|           | 生産 <sup>37</sup> | 【作る 書く （写真を）写す】  |
|           | 実行               | 【行う やめる 終わる 続ける】 |
| ・ やりとり動詞  | 情報のやりとり          | 【言う 語る 聞く】       |
|           | モノのやりとり          | 【提出する 買い込む 相続する】 |

<sup>37</sup> 「生産」タイプの動詞は、従来の研究では「対象変化動詞」に属するという考え方が主流であるが、本稿では「対象変化動詞」ではなく「非対象変化動詞」とした。

・主体変化動詞	位置/姿勢変化	【行く 帰る 座る 立つ】
	状態変化	【食べる 脱ぐ もつ】
	社会的状態変化	【引退する、結婚する 落選する】
	心理的状态変化	【安心する、思う、驚く】
	生理的状态変化	【眠る 怪我する 死ぬ】
・主体活動動詞		【会う 勉強する 遊ぶ 泊まる】

第Ⅲ部で考察するそれぞれの形式における V の分布を示すことで V の分布の違いがみられるのか、そして分布の違いと使役の意味との関連性を明らかにしたい。

## 第6章「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」

ここでは、使役動詞「V-サセル」のテ形に授受動詞の一種である「ヤル/アゲル」「クレル」がついた形、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」を取りあげる。いわゆる授受動詞としては、これらの形以外に「V-サセテモラウ」もあるが、「V-サセテヤル/アゲル」、「V-サセテクレル」と「V-サセテモラウ」とでは、文の主語として現れるものの文法的な性質が異なる。

太郎が花子にパソコンを使わせる。

太郎が花子にパソコンを使わせてやった/あげた

太郎が花子にパソコンを使わせてくれた。

花子が太郎にパソコンを使わせてもらった。

上の例からわかるように、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」は「V-サセル」と同様に使役主体が文の主語として現れるのに対し、「V-サセテモラウ」の主語は使役主体ではなく、使役対象であるという点で両者は異なる。

本章では、「V-サセル」文と同じく使役主体が主語として現れる「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」を考察の対象とし、「V-サセテモラウ」は考察からはずすことにする<sup>38</sup>。

### 6.1 対象とした用例、および考察方法

本章で対象とした資料、および用例の検出方法については、第1章の1.4節で示した通りである。その結果、「V-サセテヤル」が376例、「V-サセテアゲル」が132例、「V-サセテクレル」が665例検出できた。そのうち、使役主体、もしくは使役対象がヒトでないものが「V-サセテヤル」に30例、「V-サセテアゲル」に4例、「V-サセテクレル」に312例あった<sup>39</sup>。(表15の下①②③の例)。本論文では、使役主体と使役対象がヒトであるものを対象

<sup>38</sup> 「V-サセテモラウ」は、本文で述べた主語として現れるものの文法的な性質の違い以外に、たとえば「私が明日発表させてもらいます」のように、使役の意味として機能しない「V-サセテモラウ」もかなりあるということも、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」とはその性質が異なる。

<sup>39</sup> それぞれの形における使役主体、もしくは使役対象がヒトでないものの割合に違いがみられ、「V-サセテヤル」は7.9% (376例中30例)、「V-サセテアゲル」は3% (132例中4例)でごく少数であるのに対して、「V-サセテクレル」は46.9% (665例中312例)で、使役対象がヒトでない場合の割合が高い。このような分布の違いは、おそらく、「V-サセテクレル」の使役主体が自ら積極的に動作を行う主体ではなく、使役対象の動作、または影響を受ける、いわゆる動作・影響の受け手であるということによる一種の無意志的な表現であるということが関係しているのだと考えられる。

とするため、これらの例を除くと、「V-サセテヤル」が 346 例、「V-サセテアゲル」が 128 例、そして「V-サセテクレル」が 353 例となり、合計 827 例が考察の対象となる<sup>40</sup>。

表 15 : 「V-サセテヤル」「V-サセテアゲル」「V-サセテクレル」の用例の分布

	「V-サセテヤル」	「V-サセテアゲル」	「V-サセテクレル」	合計
使役主体と使役対象がともにヒト	346 (92.1%)	128 (97%)	353 (43.1)	827 (100%)
使役主体、もしくは使役対象がヒトではない	30 (7.9%)	4 (3%)	312 (46.9%)	346 (100%)
合計	376 (100%)	132 (100%)	665 (100%)	1173 (100%)

- ① そこで、もう一つの方法が考えられる。それは、フタを持って、ビンの方を時計と逆の方向に回転させてやる、という方法だ。こうすることで、相対的に見て（つまり、ビンを固定して考えてやると）、フタは時計方向に回ったのと同じことになる。だから、閉まるのだ。（思いがけないアンコール）
- ② 「誤解してもらっちゃ困る。俺は何とか息子の恋を実らせてやろうと考えているだけでね。あんたたちの邪魔をするつもりは毛頭ない」（女王陛下のアルバイト探偵）
- ③ あの静けさが、そして山の木々の静寂な雰囲気が私の心を驚くほど落ち着かせてくれた。（ヤマネコ山にのぼる）<sup>41</sup>

ところで、使役主体と使役対象がともにヒトである計 827 例の中には「V-サセテヤル/アゲル」には恩恵性<sup>42</sup>を表さない場合があり、「V-サセテヤル」に 78 例、「V-サセテアゲル」に 4 例、「V-サセテクレル」に 5 例で、全部で 87 例あった（④⑤⑥の例）。これを表にまとめると次のようになる。

<sup>40</sup> なお、「V-サセテアゲテホシイ」のように、依頼のムード形式をとまなっているものも考察の対象から外した。

<sup>41</sup> しかし、使役対象がヒトでない場合の多くは、使役対象の部分である場合が多く、典型的なモノらしいものは少ないという傾向がみられる。つまり、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」の使役対象はヒト同様のものがほとんどであるといえる。

<sup>42</sup> 「恩恵性」について益岡（2001）に指摘があり、益岡（同：28）は授受動詞「やる（あげる）」「くれる」「もらう」が「てやる（てあげる）」「てくれる」「てもらう」の補助動詞構文で現れる場合も「恩恵性の萌芽がみられる」とし、これはすなわち「授受の対象である事態が当事者にとって好ましいものである」ということであるという。

表 16 : 「V-サセテヤル」「V-サセテアゲル」「V-サセテクレル」の恩恵性の有無

	「V-サセテヤル」	「V-サセテアゲル」	「V-サセテクレル」	合計
恩恵性あり	268	124	348	740
恩恵性なし	78	4	5	87
合計	346	128	353	827

- ④ 「ひどい目にあわせてやりたい」(砂の上の植物群)
- ⑤ まあ勝手に馬鹿にしてください、あとできっと驚かせてあげますから。(一瞬の夏)
- ⑥ 「このへちま野郎ども」男の人足なら赤鬼はそうどなる、「あんまりいい気になってのさばると、野郎ども石を担がせてくれるぞ」(さぶ)

本論文では 6.2 節から 6.3 節にかけて、恩恵性がうかがえる「V-サセテヤル」268 例、「V-サセテアゲル」124 例、そして「V-サセテクレル」348 例の、計 740 例を対象に、表す使役の意味について考察する。そして 6.4 節では「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」の V にどのような動詞が現れるのかその分布を示す。最後に、6.5 節で恩恵性がうかがえない各形式の例、計 87 例についてごく簡単にふれる。

ところで、「V-サセテヤル/アゲル」と「V-サセテクレル」は、誰のほうに視点を置いて述べる文であるかという観点からは異なるものである。すなわち、「V-サセテヤル/アゲル」(「太郎が花子にパソコンを使わせてやった/あげた」)は主語(「太郎」＝使役主体)側からの表現であり、「V-サセテクレル」(太郎が花子にパソコンを使わせてくれた))は対象語(「花子」＝使役対象)側からの表現である。このような視点の違いがあるものの、本章における考察の観点からは両形式をそれぞれ別のものとして考察する必要がないと思われ、これらの形を一緒にとりあげることにする。

## 6.2 「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」が表す使役の意味(観点 I)

「V-サセテヤル/アゲル」、「V-サセテクレル」がどのような使役の意味を表すのか考えてみる。まず、使役主体が、使役対象の行う V という動作に対してどのようにかかわっているのかという観点から考える。

### 6.2.1 《引き起こし》

まず、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」の V が意志動詞である場合、次のように

従属節をともなう使役主体の何らかの働きかけが文中に明示されるものがある。

- (1) 小さな子どもたちの「どうしても欲しい！」を「本当はそんなに欲しくないのでは？」と否定してはいけませんが、十分な時間を与えて「欲しい気持ちが変わらないか」よく考えさせ、「待つ楽しみ」と「待ったからこそその喜び」を経験させてあげましょう。  
(本当の金銭教育)
- (2) 一そういやあ、母さんも、エーシャナをかわいがってたなあ。よく家船にあげてやって飯を食わせてやってたもんなあ。(虚空の旅人)
- (3) お前をわしらの寝室に入れ、開け立てた扉の後に潜ませてやろう。(ディアナの森)
- (4) 占有する地所に多少でも余分があれば、親は長子以外の子に与えて独立させてやりたいと願う。(ふくろうと蝸牛)

対象とした用例の中には、使役主体の使役対象への何らかの働きかけが明示されているものはそれほど多くない。しかも使役対象への働きかけのあり方として、単純な「V-サセル」形式に多く現れる「命令して」、「頼んで」のような動作要求的な働きかけはみられない。「V-サセテクレル」に現れる使役主体の使役対象への働きかけも、「V-サセテヤル/アゲル」と同様、「命じて」、「頼んで」のような典型的な働きかけは見られないものの、「V-サセテヤル/アゲル」のそれに比べてやや動作要求的な働きかけに近いものがみられるのが特徴である。

- (5) クリスマスになると近くの進駐軍キャンプの将校クラブが「かわいそうな孤児たち」を招いて、腹一杯ごちそうをたべさせてくれた上、帰りにはチョコレートだの、ドロップだの、パーカーの万年筆だのをくださる。(本の枕草紙)
- (6) 軍刀だけは、出征時に、義父が、伍長になると要るから、とって持たせてくれる。(新・秘めたる戦記)
- (7) 彼らには、薫がウロウロするわけがわかっている。それで、おいでおいでと手招きして、ちょっと冷蔵庫の扉を開けては中をのぞかせてくれる。(アフリカポレポレ)
- (8) その自分を死から救ってくれたのが「彼女」なら、おそらくはその時の衝撃で記憶を喪失したのであろう自分をこの町につれて来て、就職させてくれたのも「彼女」だったに違いない。(エディプスの恋人)
- (9) 女郎の有力な客が、遊所へ若衆を呼んで、一緒に遊ばせてくれれば、女郎にとっても嬉しいに決まっている。(江戸の男色)

次の例は、従属節に使役対象にかかわらない使役主体自身の動作が文中に明示されているが、その使役主体の動作の対象があとに続く「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」の動作の対象にもなっている。具体的にいうと、次の(10)の場合「(お好み焼きを) 一生懸命焼いて、(その) おいしいお好み焼きを食べさせてあげたい」という事態を表している。

- (10) 「一生懸命焼いて、おいしいお好み焼きを食べさせてあげたい」と話すこの道40余年の女性店主が焼く。(街ナビマップル広島)
- (11) 妻は、これから大学へ卒業試験を受けに行く明雄のためにハムサンドイッチを作って持たせてやる。(鳥の水浴び)
- (12) はるゑさんはびっくりして家に飛んで帰り、食べ物を集めてきて、私たちに食べさせてくださったそうです。(チョッちゃんが行くわよ)
- (13) 花の名前をじつによく知っていて、私がたまに行くとき得意そうに教えてくれたり、つぼみのふくらんだ花を新聞紙にくるんで持たせてくれた。(されど道づれ嫁姑)

従属節の.....部分の使役主体の動作は、「V-サセテヤル/アゲル」動作に対するいわば準備的な動作と解釈できる。

さらに、文中に使役主体が使役対象に動作を行わせる目的が明示される場合もある。

- (14) 自分たちの仕事に意味を見いだせる人財を育てるためには、スタッフに問題解決経験を積ませてあげることが大切である。(介護保険改正に勝つ！経営)
- (15) また、自分のしたいことややりたいことが明確になりやすく、欲望も少ないので、積極性も乏しくなる傾向があります。それゆえ、目標をはっきりさせるために、いろいろな適度の経験をさせてくれる親、意欲を引きだしてくれる親を求めています。(究極のエニアグラム性格学)

また、文中に使役主体が使役対象に動作を行わせるなんらかのきっかけが従属節に現れるばあいがある。

- (16) また、藤の花を目の前に近づけ、微かに形と色がわかるらしく喜んでおられる。その様子にわたしまで嬉しくなり、つつじや、ほかの花に手をふれさせてあげたり、匂いを楽しませてあげると、「花がいっぱい。いいところへ連れてきてくださってありがとう」との喜びようです。(ありのままの自分を生きる)



- (17) 「ああ、長いこと話し込んでしまっただ。おうめが、すっかりしおれているのが不憫で、持っていた提灯をむりやり持たせてやったんだ」(海賊丸漂着異聞)
- (18) 大学を出て二十年か三十年経つと、レストランの経営者とか、電気屋のおやじとか、大会社の重役クラスに知人がいっぱいできることになる。すると、皆が貧乏学者の太郎を憐れんで、飯を食わせてくれたり、電気器具をおかみさんに内緒で安くわけられたり、会社の費用で新橋の料亭に連れて行って芸者をあげて遊ばせてくれたりするのである。(太郎物語・高校編)

次のような例も構文的な特徴をみいだすことはできないが、《引き起こし》として解釈できるだろう。

- (19) きえの病さらに重しとみた求真は、少しでも条件のよい地に転地させてやろうとした。  
(戊辰戦争と小池毅の生涯)
- (20) 吉川は、せめて昼食が終わるまで、信夫の死を知らせるまいと心に決めた。信夫の死を聞いたならば、あといく日も食事をとらなくなることだろう。せめてこの昼だけでも、しあわせな食事をさせてやりたいと、吉川は思った。(塩狩峠)
- (21) 生まれて初めて他郷に病む貧しいわたしにとって、こんな心暖まる年越しをさせてくださるご夫妻に、わたしは感謝の言葉もなかった。(塩狩峠)

また、「V・サセテヤル/アゲル」「V・サセテクレル」には、使役動詞というより、他動詞的なふるまいをするものが目立つ。特にVに「聞く(聴く)」「食べる」の例が多く現れる。

- (22) 「私の母校なんです。初めて甲子園にやってきた。力なく敗れ去ってしまった。それは仕方がないことだけれど、せめて、頑張った生徒たちに、校歌を聞かせてやりたかった。(アニバーサリー・ソング)
- (23) 古畑は、小さく切り分けたリンゴをひとつずつフォークに刺して、千恵子の口に運んだ。千恵子がくすつと笑った。「初めてね、お父さんにリンゴを食べさせてもらうなんて」「退院してからも、こうやって食べさせてやるよ」(サイレント・ナイト)
- (24) ポリスのテープが終ると運転手はボブ・マーリーのライブを聴かせてくれた。(世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド)

これらのものは、使役主体の働きかけを受けた使役対象が自らの意志をもって動作を行

っているものではなく、使役主体が使役対象に直接的・物理的に手を下しているということから、典型的な使役動詞として考えることはできないかもしれない。しかし、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」にこのようなものが多いということは一つの特徴だと思われる。そして、「V-サセル」事態が使役主体によって行うものであるため、使役の意味として《引き起こし》と解釈できるだろう。

「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」にも V が無意志動詞である場合があり、これらも使役の意味として《引き起こし》に準ずる意味を表す。

- (25) 「悩んでいるのは、あなただけじゃないよ」と悩みを共有することで、相手を安心させてあげるわけです。(営業のトッププロが教える「その一言」で相手の気持ちを動かす技術)
- (26) 「ああいう男はうぬぼれが強いだよ。だから、私の方が惚れ込んでるんだと思ってるわ。うんとおだてて、いい気分にさせてやるわよ」(早春物語)
- (27) 久留米大学病院の小児病棟は、子供たちが怖がらないように、先生たちは私服で白衣を着ていません。研修医の先生たちを含め、胸には子供たちの喜ぶ手作りのキャラクターのグッズなどをつけて、子供たちをなごませてくれています。(天国の我が子へ、そして子供たちへ「見てるか、お父さんを」)

### 6.2.2 《許可》

「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」が《許可》の意味を表す場合をとりあげる。もっとも《許可》らしい例は、次のように文中に「望むとおりに」「自由に」などの副詞相当の語が文中に現れるものである。

- (28) 私としては、肺炎と白血病に対して、少しでもなにかできるなら入院して治療させたいけど、見込みがないのなら、望むとおりに、家で過ごさせてあげたい」(自宅で迎える幸せな最期)
- (29) 「僕としては、観光客には好きなところの写真を写させてあげたいんだ。でも政府が許してくれない」と運転手さんがすまなそうに言う。(交錯する文明)
- (30) 僕に与えられた役は繋ぎの守備的MFで、代表のカマーチョ監督も、イルレータ監督も比較的自由にプレーさせてくれます。(欧州クラブ戦線異状あり！)

また、次のように文中に条件の形の従属節をとらない、条件の形の従属節に現れる事態

(使役対象の動作、状態) が実現すれば、使役主体が使役対象が望んでいる動作を行わせるという意味で《許可》と解釈できる。

- (31) 「むだな抵抗はやめろ、ローダボー。いつまでも、そこに閉じこもってはいられないぞ。ジュニファを解放して、おとなしく投降しろ。そうすれば、ちゃんと裁判を受けさせてやる」(アリゾナ無宿)
- (32) 「林載根とジュニアミドルの東洋タイトルをやればいい。内藤はジュニアまで落とせるんだろ？ 日本における林載根の代理人は俺になってるから、やりたければやらせてやるよ」(一瞬の夏)
- (33) 小便を好きなときにできない(頼めばいかせてくれるが…) と思うとただちに何度も小便をしたくなってしまった。(活字のサーカス)
- (34) 辞めようと、何度考えたかしのれない。だが、言い出すことができなかった。それに、辞めると言ったところで、素直に辞めさせてくれるとはとても思えなかった。(大統領の理髪師)

そして、「V-サセテクレル」にみられる特徴であるが、「V-サセテクレル」が条件の形で現れるものも《許可》の意味を表す<sup>43</sup>。

- (35) 「役者になるなどとてもない、と叱られてな。東大の法学部出身だろう、まったく頭がわるいんだ。好きな芝居をやらせてくれれば、俺だって孝行くらい出来るのに」(冬の旅)
- (36) この一件を下世話にたとえると、自分の工場が国道沿いにあるのだが駐車場が足りない、しかし、道路を渡ったところに空き地がある。そこにうちのトラックを止めさせてくれれば非常にありがたいということで、地主に菓子折りを下げて頼みに行ったら、いきなり猟銃で撃たれて追い出された、というようなものです。(日本史集中講義)
- (37) 「沼島にゆかせてくれたら、一日に十万円ほどのウニを揚げてみせるがな」と、いわば豪語しているモグリの名人もいるという。(甲賀と伊賀のみち、砂鉄のみち)

当該の文だけでは判断できないが、前の文に使役対象の希望が現れ、「V-サセテヤル/アゲ

---

<sup>43</sup> 「V-サセテヤル/アゲル」が条件の形で現れている場合は、使役の意味として《引き起こし》も《許可》も現れる。6.3 にあげる (55) の「V-サセテアゲルト」は《引き起こし》を表し、(56) の「V-サセテヤレバ」は《許可》を表している。

ル」「V-サセテクレル」が《許可》と解釈できるものがある。

- (38) モリヨンがボンネットの上に立つと、群衆から拍手がわき、歓迎とあざけりの声に將軍の言葉はかき消される。ひとりの子どもが叫んだ。「あの男の人、なにか話したいんだよ。話をさせてやろうよ」（手術の前に死んでくれたら）
- (39) 加藤が山支度を始めると、花子がそばに来て、なにか手伝わせてくれといった。山支度というものは自分でするもので、他人に手伝わせてはならないのだといくら加藤が いい聞かせても、花子は、なんでもいいから手伝わせてくれといった。手伝わせてやりたくても、なにもなかった。（孤高の人）

### 6.2.3 《放任》

「V-サセテヤル/アゲル」が《放任》の意味を表す場合として、次のように、文中に副詞相当の語の助けを借りて《放任》と解釈できるものがある。

- (40) 〈まてまて、家内も嫁もいまテレビを見ているのだ。客がくるわけじゃないし、むりに急いで片づけさせることもあるまい。気のすむまで見させてやろう〉（老春謳歌）
- (41) 徘徊する人は余裕があれば自由にさせてあげるほうがいいようです。（在宅介護奮闘記）
- (42) 大学時代のお友だち、あなたもよく御存知の、照美さんや愛子さんが誘ってくれる映画の試写会とかコンサートなどはいっさいお断わりして、殆ど家に閉じこもって日々をおくりました。そんな私を、父も育子さんも、心では気遣いながら、自由に好きなようにさせてくれました。（錦繡）

V が無意志動詞である場合、《放任》として解釈できるものが少しあるが、その場合は、「V-サセテヤル/アゲル」の形のみであり、V が「死ぬ」、もしくはそれに相当する意味を持つ動詞の場合に限られるようである。

- (43) 安楽死を安易に考える人は「死にたいっていうんなら死なせてあげればいいじゃないか」と言うかもしれません。（死の壁）
- (44) 極論かもしれませんが僕は「どうしても自分で死にたいという人は、勝手に死なせてやればいい」というのが持論です。（直角死）
- (45) しかしながら、そのような願いよりも患者さんの大変な闘病経過を知っているご家族は、長い闘病の果てによりやく辿り着いた臨終のときを静かに迎えさせてやりたい、

静かに見守りたいという気持ちのほうを強く持っていたのだ。(僕が医者として出来ること)

しかし、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」の中には、《引き起こし》なのか《許可》、《放任》なのかその判断がむずかしいものが多い。たとえば、次のようなものである。

- (46) 「そうね。ちょっとこのところ勢いが足りなくなったみたいね。可哀そうに蛙先生も疲れてるのよ。少し跳ねるのを休ませてあげなくちゃ」(楡家の人びと)
- (47) しかし、三村はそう言われた途端、木田さんにこの会社にも一日だけでも勤めさせてやりたかった、と痛切に感じたのである。(秘事；半所有者)
- (48) わたしは雑誌に載っていた自伝そのものよりも、珠子がそれをわたしに読ませてくれた、ということで感動しました。(エディプスの恋人)
- (49) 私に初めて仕事をさせてくれた雑誌でも、ルポルタージュの写真には、筆者のスナップもありあわせの写真で間に合わせる、という考え方が支配的だった。(一瞬の夏)
- (50) 「そうだろうな。お役人さまが俺達のようなものに松阪牛などを食わせてくれるわけがないものな」(冬の旅)

本節で考察した「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」がどのような使役の意味を表しているのかその分布を示すと次のようになる。

表 17：「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」が表す使役の意味（観点Ⅰ）の分布

	《引き起こし》	《許可》	《放任》	不明	合計
用例数	506 (68.4%)	92 (12.4%)	21 (2.8%)	121 (16.4%)	740 (100.0)

表 17 に示した通り、対象とした「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」の例には、《引き起こし》を表すものがもっとも多い。しかし、他の形式に比べて《許可》を表すものの割合が高いのも事実である（後述）。ところで、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」の中には《引き起こし》なのか《許可》、《放任》なのかはっきり判断できない例がとて多く、その分布において一般化することは難しいように思われる。このことは、これらの形を含む当該の文だけで判断することがむずかしく、当該の文を含むより大きい範囲の文脈から判断せざるを得ないことを意味する。しかし、現段階の考察ではそれぞれの例

についてより大きな文脈からその意味を考察することができなかった。従来の研究の中で、「V-サセル」が《許可》を表す場合、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」の形で現れることが多いとされているが、今回の考察から「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」が単に《許可》を表すとは言えないことが明らかになった。

### 6.3 「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」が表す使役の意味（観点Ⅱ）

次に、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」が表す使役の意味を、早津（2006）の観点から考えてみる。早津（2006:262f）は、「みちびきの使役の場合に、その使役動詞がシテヤル形・シテクレル形になることがしばしばある」といい、「つかいだての使役の使役動詞がシテヤル形・シテクレル形になることは稀であり、使われると、恩着せがましい表現になる（「大切な壺だがおまえに運ばせてやる」）」と述べている。実際、本章で対象とした「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」も「V-サセル」事態の結果が使役主体自身のためになるように行っているものではなく、すべてが使役対象のために動作を引き起こしているもので、早津（2006）の言うとおりの《みちびきの使役》を表している。そして、その分類において悩むような例もない。

- (51) 信長はいった。身内の者がすべて亡くなった濃姫のために、彼女の数すくない血縁者と対面させてやろうというのが、信長の親切心だった。（国盗り物語・織田信長）
- (52) この子について、どう指導したらよいかという問題提起です。これには、他の先生からも、「学級づくりのなかで、信頼し合える友だちづくりをやっていくことが大切ではないか。」「クラスで、その子の存在感がはっきりするような役割や係の仕事をやらせてあげたらどうか。」と、ずいぶん的確な意見がだされました。（子育て・教育を宗谷に学ぶ）
- (53) しかし、経済的苦境の中にあって、彼の両親は英語が得意で外交官になることが夢だった田原を、地元の名門野付牛中学、そして遠く大阪の外語専門学校にまで進ませてくれた。（凍れる瞳）

つまり、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」という形は、表す使役の意味として《許可》を表すというより、《みちびきの使役》を表すのにふさわしい形といえるのではないだろうか。

松下（1930）は、「～テヤル」「～テクレル」「～テモラウ」のことを「利益態」とよび、「その作用がある人の利益となることを表す」ものであるという。そして、「動作者と利益

者との彼我の関係の異動によって自行他利態、他行自利態、自行自利態の3つに分かれるという。それぞれについて、松下（1930）では次のように述べている。

「～テヤル」：「自行他利態」—自己の動作に関してそれが他人の利益になること

「～テクレル」：「他行自利態」—他人の動作に関してそれが自己の利益になることを表す

「～テモラウ」：「自行自利態」—他人の動作を受けて自己の動作とし、其の受けることが自己の利益であることを表す

つまり、主語に立つ人が動作を行っているか否か、そして動作の結果、利益を得るのが誰なのかによって3つの形は使い分けられているということだろう。

また、教科研東京国語部会・言語教育研究サークル（1963）は「～テヤル/アゲル」「～テクレル」「～テモラウ」を「やりもらい」といい、「やりもらい」とは動作の主体が他人のためにすることを表す言い方（p.160）であるという。そして、「～テヤル/アゲル」は「主語で表される主体が他人のためにすることを表す」ものであり、「～テクレル」は「主語で表わされる主体が話し手や話の中心人物のためにすることを表す」もの、そして「～テモラウ」は「主語で表わされる主体のために、他人がすることを表す」ものであると述べている（p.161）。つまり、これらの形は、誰かのために行う動作であるという点で共通しており、それが主語、もしくは話し手とどのような関係にあるのかによっていずれかの形が選ばれるということだろう。そして、ここでいう「誰かのため」という観点は、早津（2006）の《つかいだての使役》と《みちびきの使役》の観点と似ているところがあって興味深い。

そして、これらの形が《みちびきの使役》を表すということと関連して、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」の文中における形・機能に特徴がみられる。

まず、「V-サセテヤル/アゲル」は、多くが文の言いおわり（終止の形）に現れ、従属節の述語として用いられることが極端に少ないということである。対象としている用例 392 例の中には、連用の形が 1 例、条件の形が 6 例（ト形が 3 例、バ形が 3 例）、そしてその他の従属節の形が 1 例しかみられなかった。

(54) 寝つきの悪いムスメにつきあってイライラするのから全面的に手をひいて、ぼくにまかせたので、ぼくが、絵本を読んでやり（一晚二冊）、そのあとおはなしをきかせてやり、添い寝して寝かしつけました。（パパはごきげんななめ）

(55) また、藤の花を目の前に近づけ、微かに形と色がわかるらしく喜んでおられる。その様子にわたしまで嬉しくなり、つつじや、ほかの花に手をふれさせてあげたり、匂い

を楽しませてあげると、「花がいっぱい。いいところへ連れてきてくださってありがとう」との喜びようです。(ありのままの自分を生きる)

- (56) 源氏はそういつて、許さないのであるが、紫の上は、日一日と弱ってゆく。もしや、長くはないかもしれない、それならば本人がこんなに願っている出家を遂げさせてやれば、あるいは安心して、病気も快くなるのではなからうかと、源氏は、とつおいつ思い乱れるばかりである。(新源氏物語)

(54) の例は使役動詞が「聞く」の例であり、使役動詞というよりも他動詞的なふるまいをするものである。そして (55)、(56) の例は、主節の事態が使役対象の状態変化(「喜びようです」、「安心して、病気も快くなる」)が現れている。

「V-サセテクレル」も、文の従属節に現れるものは少なく、「V-サセテクレル」が従属節の連用の形で現れる場合、(57) のように主節に使役対象の動作・変化(「私を安心させる」)が現れ、「V-サセテヤル/アゲル」と似ているものがある。

- (57) 馴れない労働に愚痴一つこぼさず、仲間のことや休憩時間の面白かった談話の模様をいとも楽しげに聞かせてくれて、私を安心させるのであった。(凹凸の人生も悲しからずや)

一方で、「V-サセテクレル」には (58) (59) のように従属節と主節の関係が並列的な関係であり、従属的な関係をなしていないものもある。

- (58) 以前はまだ侍従が、冗談などをいつて末摘花を慰め、泣いたり笑ったりして、憂さをまぎらせてくれ、若い女を声をひびかせて邸を明るくしてくれたものであった。(新源氏物語)

- (59) 目標を持って明るく努力する者を何者も見捨てない。そのことを気付かせてくれ、支えてくれた人…師、友、そして家族に対して、願わくはそれ以上の愛を以て返したい。(人は涙とともに蘇る)

さらに、連用の形、条件の形で現れる「V-サセテクレル」の中には、主節に具体的な動作・変化ではなく、「ありがとう」「ありがたい」「助かる」「うれしい」など、評価的な形容詞相当のものが現れる場合がある。



(60) 「わかったよ、アレックス。長居をさせてくれてありがとう」(終末のプロメテウス)

(61) この一件を下世話にたとえると、自分の工場が国道沿いにあるのだが駐車場が足りない、しかし、道路を渡ったところに空き地がある。そこにうちのトラックを止めさせてくれば非常にありがたいなということで、地主に菓子折りを下げて頼みに行ったら、いきなり猟銃で撃たれて追い出された、というようなものです。(日本史集中講義)

評価的な形容詞といっても現れうる述語に偏りがあり、それは使役対象によって恩恵性をはっきりうかがえる述語に限られる。

ふつう、「V-サセル」が《つかいだての使役》を表す場合、「V-サセル」が従属節の述語として現れることはそれほどめずらしくない。このことは、第3章の「連用の形で用いられる「V-サセル」」をみても明らかである。そして、《つかいだての使役》の場合、主節は使役主体の動作が現れるのがふつうである（「妻にお弁当を作らせて会社を持っていく」）。ところが、上の「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」の例をみると、連用の形で現れても、その場合の主節の事態は使役主体の具体的な動作を表すものではなく、使役対象の動作・状態を表すものが多い（(54)「寝かしつける」、(55)「～との喜びようです」、(56)「安心して病気が快くなる」(57)「私を安心させる」）。このような特徴は「V-サセテヤル/アゲル」が《みちびきの使役》を表す構文的な特徴の一つだといえる。

#### 6.4 「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」のVの語彙的な意味

考察の対象とした「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」のVに注目してみると、両形式それぞれにおいて現れるVに違いはみられない。しかし、これらの形式に現れるVの分布に共通点がみられる。本章で考察した「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」のVの語彙的な意味による分布を表に示し、現れる具体的な動詞を表の下にあげる。

表 18 : 「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」の V の語彙的な意味

V の語彙的な意味		数
対象変化 (7)	位置変化	7
対象非変化 (77)	接触	17
	生産	11
	実行	49
やりとり (86)	情報のやりとり	85
	モノのやりとり	1
主体変化 (412)	位置/姿勢変化	44
	状態変化	162
	社会的状態変化	29
	心理的状态変化	132
	生理的状态変化	45
活動		142
その他		13
合計		740

#### 位置変化 ( ( ) 内の数字は延べ語数)

陳列する、置く、届ける、(トラックを) とめる、掲示する、交代する、取り替える

#### 接触

触る (7)、手を触れる、もむ、打つ (3)、なぐる、タッチする、いじる、捕る、(花を) 拾う

#### 生産

写真を写す、描く、完成する、つくる (3)、書く (4)、撮影する

#### 実行

終わる、回避する、かなえる、裁判を受ける、実現する (2)、する・やる (29)、存続する、続ける、遂げる (2)、成功する、行動をとる、実現する (2)、試す、やめる (3)

#### 情報のやりとり

言う (2)、語る、吐く、話す (4)、紹介する、聞く (76)

#### モノのやりとり

相続する

## 位置／姿勢変化

行く (13)、帰る (2)、越す、転地する、通る、避難する、お見舞いに来る、/洋行する (2)、留学する (2)、遊学する、歩く (2)、位置につく、下車する、上陸する、そばにいる、脱出する、通過する、逃れる、滑り込む、外遊する、旅行に行く、旅行する、/ 腰かける、座る (2)、立つ、おじぎをする 薄い

## 状態変化

(軍が) 壊滅する、潜む、痛撃を食らう、栄える、着替える (3)、脱ぐ (4)、口に含む、目を閉じる、手が滑り込む、持つ<sup>44</sup> (25)、抱く (3)、食う (15)、食事をする (2)、食事をとる、食べる (55)、食い飲みする、飲む (29)、吸う、試飲する、おっぱいを含む、長居する、握る、履く (2)、歯磨きする、ふれる、メスをとる、持ち込む、生きる術を身につける、自分が一歩進む、いい目にあう

## 社会的状態変化

昇進する、進学する、勤める (2)、独立する (2)、任官する、復職する、分家する、転職する (2)、復活する、結婚式をあげる、結婚する、出家を遂げる、(トップスターを)飾る、(そなたと姫が)添う、合格する、就職する、勝利を得る、高校に進む、洗礼を受ける、退院する、転出する、仲間入りする、繁昌する、復職する、免責を得る、退院する

## 心理的状态変化

安心する (6)、味わう (7)、安心感を持つ、(いい) 気分にする (3)、安らぎへ向けて向上する、嬉しがる、大笑いする、驚く (2)、びっくりする (4)、思い出す (6)、思いをする (3)、希望をもつ、気持ち良くする、ぎょっとする、気を変える、信じる (7)、楽しむ (18)、どぎまぎする、泣く (2)、納得する、納得するようにする、悩む、満足する (6)、目覚める、目を覚ます、喜ぶ (16)、理解する (2)、わかる (4)、忘れる (3)、笑う (7)、覚える、思う、感じる (5)、きづく (3)、なごむ (3)、納得する、不安を払拭する、憂がまぎれる、老婆心が働く、意識する (2)、自覚する (2)、感じをとりもどす

## 生理的状态変化

安楽死する、生き返る (3)、いく (3)、生まれてくる (2)、お産する、最期を迎える (2)、死ぬ (11)、体力を回復する、眠る、寝る、休む (13)、(相手が)燃焼する、生む、自然死する、小便する、手傷を負う、死から復活する、

## 活動

会う (14)、遊ぶ (6)、囲碁をうつ、歌う、電話をかける、舵を取る、稼ぐ、暮らす、経験する (3)、幸福に生きる、作業する、試合する、仕事する (3)、修行する、出場する、好きなようにする (2)、過ごす (3)、住む、体験する、

---

<sup>44</sup> 「持つ」以降の動詞はヲ格をとることができるが、ヲ格に現れるモノに変化が生じるのではなく、動作の結果、主体自身に変化が生じるものととらえることができることから、主体状態変化動詞であるといえる。

出会う、年越しする、授業を取る、働く (4)、フリーライドする、プレーする、儲ける、練習する  
 拝謁する、仇をうつ、生きる、お別れする、開業する、希望するとおりにする、気持ちよく過ごす、教育を受ける、  
 行水する、拳闘する、下宿する、見学する、見物する、再出発する、散歩する、試合する、仕事する、自由にする (4)、  
 生活する (3)、体験する (2)、対面する、挑戦する (2)、(お金を/運転手を) 使う (7)、務める、経験を積む、手柄  
 を立てる、手伝いをする、手伝う、泊まる、逃げ延びる、日光浴する、のんびりする、徘徊する、(花が/一花) 咲く  
 (2)、儲ける (2)、ゆっくりする、よい目を見る、楽しい夏休みを送る、贅沢する (2)、おごる  
 きづくようにする、みつめる、見る (2)、目を触れる、読む (3)、観察する、見学する、見物する、視野を広くする、  
 調べる、のぞく (3)、見聞きする  
 祝福する、専心する、堪能する (4)、はっきりする、非難する、全うする (2)、楽する (4)、楽にする、急ぐ

## その他

選ぶ、傘をさす、勝つ (4)、時間をとる、選ぶ、すべてが終わる、抱く、成り立つ、入る、まみれる

上の表 18 からうかがえる大きな特徴として、まず、両形式において他動詞らしい他動詞  
 (「こわす、わる」のように対象の状態が変化するもの) がほとんどないということである。  
 「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」に現れる対象変化動詞は位置変化動詞のみであ  
 り、状態変化動詞はみあたらない。また、やりとり動詞もみられるが、ほとんどが情報の  
 やりとりを表すものであり、モノのやりとりを表すものは 1 例のみであった。そして、主  
 体変化動詞が全体の 740 例中 412 例あり、約 56% を占めている。このことから、「V-サセ  
 テヤル/アゲル」「V-サセテクレル」の V の多くは、主体の何らかの変化を表す動詞である  
 ということがいえる。

ところで、なぜこれらの形に現れる V にこのような偏りが見られるのか考えてみると、「～  
 テヤル/アゲル」「～テクレル」が持つ恩恵性と関係があるように思われる。相手が恩恵を受  
 けるということは、相手自身にかかわる何らかの変化・影響がないと恩恵を受けたとはい  
 えない。いいかえると、自分自身とはまったく関係のない別のモノに変化、または影響が  
 あった場合にはこれらの形式は用いられないのである。そのため、「V-サセル」に補助動詞  
 「ヤル/アゲル」「クレル」がついた形「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」の V に主  
 体変化動詞が多く現れるのではないだろうか。

早津 (2006) は《みちびきの使役》の特徴の一つとして、動詞のタイプにも言及してお  
 り、「主体変化志向の他動詞および主体変化志向の自動詞からの使役に典型的にみられる。  
 またやりとり志向の他動詞や主体活動の自動詞からの使役にもみられる。」(p.261) と指摘

している<sup>45</sup>。先述したように、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」のほとんどが《みちびきの使役》を表すということと、これらの形式に現れるVの偏りは、早津（2006）が指摘したことを再確認したことになると思う。

## 6.5 恩恵性がうかがえない「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」

6.1 節でふれたように、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」の例の中に恩恵性がうかがえないものが 87 例<sup>46</sup>みられた。これらが表す使役の意味に何らかの特徴はみられないのか、簡単に述べる。

今回対象とした恩恵性の意味を帯びない「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」の例、計の 87 例のうち、Vが無意志的な動詞であるものが 55 例で、約 62.5%を占める。そして、これらをみると、6.1 節にあげた④⑤⑥の例も含めて使役主体の積極的な働きかけによって使役対象に無意志的な変化を引き起こすものになっている。

- (62) 先生。あたし、すごくカッコ良くなるよ。先生がびっくりしちゃうくらい、バッチリ決めて行くからね。先生のカノジョがどんなに頭が良くて美人でも、あたしみたいに若くないってこと、先生に、わからせてやるんだから！（少女達がいた街）
- (63) 「これ不届きなばば、さっさと私に白状しなさい。お前が悪知恵を働かせ、あの男に親切にして、次つぎと私に手紙を書かせ、とんだ目に遭わせてくれましたね。…」（アラビアン・ナイト）

一方、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」のVが意志的な動詞であるものとして次のような例がある。

- (64) 水をかけて、石鹸をおとし、アスピリン三錠と湯吞いっぱい焼酎を、いやがるのもかまわずむりやり飲ませてやった。（砂の女）
- (65) 「…しかし、そういう馬鹿を作ったのはお母さんやから、お母さんもメシを抜く。それで文句ないやろう。それと、きちんと反省しなかったら、学校にも行かせん！ 逆不登校させてやる。そやから覚悟して反省しろ！」（イジメ・不登校・ひきこもりと親はどう向き合うか）

<sup>45</sup> 早津（2013b）にも指摘がある。

<sup>46</sup> 6.1 節の表 16 に示したように、恩恵性のうかがえないもの 87 例のうち、「V-サセテヤル」が 78 例、「V-サセテアゲル」が 4 例、「V-サセテクレル」が 5 例あり、恩恵性のうかがえないもののほとんどが「V-サセテヤル」である。

- (66) 「このへちま野郎ども」男の人足なら赤鬼はそうどなる、「あんまりいい気になってのさばると、野郎ども石を担がせてくれるぞ」(さぶ)

これらの場合、V が意志動詞であるとはいっても使役主体の働きかけを受けた使役対象が自分の意志で動作を行ったとはいえない。使役対象の意志をまったく無視したものであり、V が無意志的な動詞である (62) (63) の例に近いところがある。しかし、いずれにせよ、使役主体が使役対象に積極的に働きかけて動作を行わせるという点において《引き起こし》に相当するものと解釈できる。一方で、《許可》や《放任》を表すものはみあたらない。井島 (1997) は、補助動詞「～テヤル」の用法の一つとして、《故意性》があるとしている(「怒った僕はその男を何度も殴ってやった」)<sup>47</sup>。ここであげた「V・サセテヤル/アゲル」の例も「V・シテヤル」のもつ《故意性》が浮き彫りになり、使役主体による積極的な《引き起こし》を表すようになっていいると考えられる。しかし、「V・シテヤル」の場合、V が基本的に意志的な動詞であるが、「V・サセテヤル/アゲル」になるとそのような制約が薄れ、無意志的な動詞も現れうるという点で異なる<sup>48</sup>。

なお、早津 (2006) の観点から考えると、これらの例もやはり使役主体自身のための動作ではなく、使役対象に対する変化をもくろんだ動作であることから《みちびきの使役》になると思うが、使役対象のための動作ではない(むしろ使役対象にとって好ましくない事態の実現である)ことから典型的な《みちびきの使役》とはいえない。

## 6.6 第6章のまとめ

本章では、「V・サセル」のテ形に補助動詞「ヤル/アゲル」「クレル」がついた形、「V・サセテヤル/アゲル」「V・サセテクレル」が使役の意味としてどのような意味を表すのかについて考察した。これらの形は「V・サセル」における先行研究の中でふれられており、「V・サセテヤル/アゲル」「V・サセテクレル」の形で用いられると、《許可》の意味がより明瞭になるとされている。しかし、本章で対象とした用例をみた限りでは、《許可》を表すものがそれほど多いとはいえず、むしろ《引き起こし》なのか《許可》なのかははっきりしないものがあった。一方で、これらの形について早津 (2006) の観点から使役の意味を考えると、《みちびきの使役》を表すものがほとんどであることが明らかになった。つまり、「V・サセテヤル/アゲル」「V・サセテクレル」は、使役の意味として《許可》の意味を表すというより

<sup>47</sup> 井島 (1997) にもあるが、豊田 (1974) はこのような「～テヤル」のことを「意志を表す補助動詞」としている。

<sup>48</sup> 前にも触れたが、手元にある資料の中には無意志動詞のほうが多かった。

《みちびきの使役》を表すのに適切な形であるということだろう。そして、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」が《みちびきの使役》を表す構文的な特徴として、Vに主体変化動詞がほとんどであること、そして連用の形の従属節で現れるものが少なく、ほとんどが終止の形で現れることがあげられる。本章で、「V-サセテモラウ」について論じることとはできなかったが、今後考察を進め、それぞれの形が使役の意味とどのようにかかわっているのか、そして、「V-テヤル/アゲル」「V-テクレル」「V-テモラウ」の補助動詞本来の意味と「V-サセル」が表わす使役の意味との関係を探る必要があると思われる。

## 第7章 「V-サセテオク」

### 7.1 対象とした用例、および考察方法

第1章の1.4節で示した資料から検出できた「V-サセテオク」の例は、計376例である。このうち、使役主体と使役対象がヒトであるのは217例であり、それを考察の対象とする<sup>49</sup>。これらの用例を用いて、まず、7.2と7.3で、「V-サセテオク」が表す使役の意味をⅠとⅡの観点から考察する。その際に、文中における構文的な条件（文中におけるはたらきかけ・目的の明示、副詞との共起、「V-サセテオク」の形・機能）を手掛かりに考察する。そして、7.4で、「V-サセテオク」のVにどのような動詞が現れるのか、表す使役の意味によるVの語彙的な意味の分布を示したうえで、「V-サセテオク」が表す使役の意味とVの語彙的な意味との関連性を探る。

### 7.2 「V-サセテオク」が表す使役の意味（観点Ⅰ）

#### 7.2.1 《引き起こし》

「V-サセテオク」が《引き起こし》を表す場合、（ア）使役主体による使役対象への働きかけの明示、（イ）使役主体が使役対象に動作を行わせる目的の明示、さらに、（ウ）「V-サセテオク」の文中の形・機能、という3つの観点から構文的な特徴を取り出すことができる。以下、順に述べる。

#### （ア）使役主体による使役対象への働きかけの明示

まず、次のように、文中に使役主体が使役対象にどのように働きかけて動作を行わせたのか、具体的な働きかけの仕方が明示されている場合がある。

- （1）弥平次は、前夜、婢に命じて作らせておいた弁当と餞別の入った風呂敷包みを胸に抱えて言った。（喜知次）

---

<sup>49</sup> 資料の中の「V-サセテオク」には、次のように、使役主体と使役対象がヒトではないものもある。

- ・喜助はそれまでに、あの人形を完成させておいて、玉枝をびっくりさせてやろうと思った。（越前竹人形）
- ・だとしても、花粉を附着させておくための、なんらかの装置——たとえば、毛のようなもの——が、あったかもしれないということは、じゅうぶんに考えられることだ。（砂の女）
- ・課長のもとを辞去すると、参事官は起案書に目を通し始めた。それを読んだところで、もはや執行を停止させられないのはわかっていたが、職業上の良心は満足させておきたかった。（13階段）



- (2) 「ヘイヘイヘイ！」と叫んで、先の方で波を待っている人をどかせておきながら、そこへ行きつく前に板から落っこちてしまうことです。(ミーハーのための戦略と展開)
- (3) ともかくこういう次第だから、読売の政治部としては松元を使って山本に接近させておけば、農林関係でも、鉄道や内務関係でも、海軍大臣から次官経由という他社に知られぬルートで、いいニュースが早くつかめる。(山本五十六)

また、先行する従属節に使役主体の何らかの動作が明示されており、その使役主体の動作によって使役対象が何らかの動作・変化を引き起こすという事態を表すものがある。

- (4) この進攻戦をはじめるまでに信長はあらゆる外交の手をつくして近隣の諸豪を静まらせておき、さらに同盟軍をふやし、ついには四万を越える大軍団を整えるまでに漕ぎつけてから、やっと足をあげている。(国盗り物語・織田信長)
- (5) 特別陸戦隊一ヶ大隊を編成し、顔合せと訓練を行わせておく。(山本五十六)

これらの場合、文中では使役主体の使役対象への積極的な働きかけが明示されていないものの、従属節に現れる使役主体の先行する動作が、使役対象の動作を引き起こす何らかのきっかけになっている。このように、使役主体による何らかの動作が先行し、それによって使役対象が動作を行うということから《引き起こし》に通ずるものとして捉えることができる。

さらに、次のように、「V-サセル」のVが無意志的な動作を表す場合も、使役主体による使役対象への何らかの働きかけが従属節に現れていて、Vが意志動詞である「V-サセル」の(1)から(5)の例と共通している。そして、これらの例をみると、「V-サセテオク」が従属節に現れ、主節に使役主体自身の働きかけを利用しての動作が表現されているという点で特徴的である。

- (6) 自宅キッチンのシンクに立ち、洗い物の途中、背後から呼ばれ、振り返った瞬間を見事にとらえた写真もあった。それはおそらく息子の亮次が撮ったものに違いない。背後からそっと忍び寄り、「ママ！」と声をかけ、驚かせておいてからシャッターを押したのだ。(ループ)
- (7) 必要なことは、何とかして上手に別れてしまうことだった。それには少しばかり時間をかけて、徐々に女をあきらめさせるより方法は無いらしい。むしろさし当っては、女の誤解を逆用して、現状維持が続いて行くように思わせておきながら、**実質的な別**

れに誘いこんで行けばいいのだ。(青春の蹉跌)

このように、Vが無意志的な動作を表す場合、使役対象の無意志的な動作を引き起こすためには、それを引き起こす使役主体の何らかの動作・状態が前提として存在する。それが上の(6)、(7)のように、文中に明示される場合もあれば、次のように文中に明示されない場合もある。ただし、これらの場合も使役主体の何らかの働きかけ（それが意図的なものでないとしても）による使役対象の動作であると解釈でき、《引き起こし》の意味を表すといえる<sup>50</sup>。

- (8) (梶は) 課に「病欠」「用事」と思わせておいて何をしていたのか。(半落ち)
- (9) 戻ってきた甚作は、真新しいカンカン帽をかぶり、はじめて袖を通したとしか思えない着物を着ているばかりか、みんながあっけにとられたことに、正真正銘の医師免状をもつお医者さまになっていたのだ。彼はみんなを哑然とさせておいて、東京の土産物というのをくばって歩いた。(楡家の人びと)

#### (イ) 使役主体が使役対象に動作を行わせる目的の明示

次に、使役主体が使役対象に動作を行わせる目的が文中に明示されるものをあげる。文中に「～しようと」、「～するために」など、使役主体の目的を表す表現が明示され、その目的の実現のための動作として使役対象に働きかけ、動作をさせる「V・サセテオク」がある。

- (10) 「だからせめて姉上は毒殺してさしあげようとコックを一人、お姉さまの宮殿の厨房に潜入させておいたのですが、それも無駄に終わってしまいまして…」(総理大臣のえる！)
- (11) 実際、於継は口に出して加恵に当るようなことはなかった。加恵は、小皺だらけの醜い顔だというけれども於継は今以て誰が見ても美しいのであったから、それはいわれのない悪口にしか思えない。自分を美しく見せるために娘まで小穢なくさせておくのだなどとは、誰が聞いてもまさかと笑い出すだけだろう。(華岡青洲の妻)
- (12) 例えば、食事の前に排尿の習慣がついていると分かった患者さんであれば、朝・昼・夕の三度だけトイレに誘導すれば、昼間ずっとおむつをしている必要はなくなります。

<sup>50</sup> 佐藤(1986)は、このようなものを「変化のひきおこし」とできるとし、「動作主体(本論文でいう使役対象)のうごきが使役主体からのなんらかのはたらきかけによってひきおこされたり、使役主体がなんらかの性質をおびるか、ある状態におかれるためにその影響が動作主体におよんで変化をもたらすことを表現する」(p.141)としている。

たまにパンツを濡らすことがあっても、それだけのために一日中おむつをさせておくのは酷です。(安楽病棟)

#### (ウ)「V-サセテオク」の文中での形・機能

最後に、「V-サセテオク」の文中での形・機能に注目すると、「V-サセテオク」が、文中に一定の形で現れ、かつ特定の機能を果たしている場合において《引き起こし》の意味を表すものがある。次のように、従属節の述語が「V-サセテオク」の連用の形（「V-サセテオイテ」、「V-サセテオキ」）で用いられ、主節に現れる事態の実現のために、使役主体が使役対象にその手段としてVという動作をさせるものがある。たとえば、(13)の場合、使役主体が、主節に現れている事態「食う」を実現するために、使役対象に「(うるめいわしを) 買う」動作をさせる事態を表している。この場合も「V-サセテオク」は《引き起こし》の意味を表す。

(13) 前任の吉田善吾の食卓に、干いわしが出るなどということはあまり無かったが、山本は土佐のうるめいわしが好物で、美味しい美味しいと言って、艦隊が宿毛湾に入るとたくさん買いこませておき、頭からガリガリ何尾でも食い、みんなにもすすめた。(山本五十六)

(14) 正次は、二人の大番を出発させるに当って特に命じた。「一現在長崎表には、奉行の榊原左衛門職直、神尾内記元勝、いずれも江戸へ出ていて長崎には不在なのじゃ。それゆえ、代官の末次平蔵に万一のこともあらば、暴徒は必ず、オランダ人の出島を襲って、問題を世界的に紛糾させるに違いない。よって長崎へ入った暴徒は、時を移さず追い払うよう、責任はそれがしが執るゆえ、心得てるように」こうして大番二人を九州へ急行させておいて、江戸表へこのことを急報させた。(徳川家光)

(15) 「それはもしも面接試験でやられたら、一番困るところだね。向うとしては、困らせておいて受験者の人物を見るということになるかも知れんがね。(青春の蹉跌)

また、「V-サセテオク」が連体の形で用いられる場合がある。

(16) 「そんなわけで、藤川さんは、いったん自分のマンションへ戻り、青谷章一郎に盗ませておいた例のダークブルーのネクタイを持って銀閣寺のマンションへとって返し、池田さんが入居している四一八号室をたずねた。こういうことになるんですか?」(女裁判官物語 長編推理小説)

(17) 衛生局のアンフェアぶりは、これだけではなかった。阿片令改正と同時に、前々から衛生試験所に研究させておいたモルヒネ精製法を、官報にのせて発表した。(人民は弱し官吏は強し)

(18) 彼は、相も変らぬやさしさのあふれる物腰で、私を離れからつれ出して、門の内に待たせておいた人力車にのせた。(驢馬)

「V-サセテオク」が連体の形で用いられている上記の例をみると、被修飾語（(16) ダークブルーのネクタイ、(17) モルヒネ精製法、(18) 人力車）が動作の対象となっている。そして、被修飾語である動作の対象は、後ろにつづく使役主体の動作（(16) 持って銀閣寺のマンションへとって返す、(17) 官報にのせて発表する、(18) (私を) のせる）の対象でもある。つまり、主節の動作の実現のために必要な動作対象を、使役対象に働きかけて準備させているものであると言える。

また、「V-サセテオク」が「V-サセテオケバ」の条件形で用いられた場合、主節に使役主体にとって好ましい事態が明示され、主節の事態を実現させるために使役対象にはたらきかける「V-サセテオク」がほとんどである。

(19) 戦う兵には、それに価するものを食べさせておけば、どんな高い木でも、快く登ったんじゃないかと思う。日本が敗けたのは、軍部首脳のみみっちい食事への考え方にある、と思っている。(食い食い虫)

(20) とにかくこういう次第だから、読売の政治部としては松元を使って山本に接近させておけば、農林関係でも、鉄道や内務関係でも、海軍大臣から次官経由という他社に知られぬルートで、いいニュースが早くつかめる。(山本五十六)

(21) 「学校教育活動も法の許した範囲内」という理を生徒会役員に理解させておけば、そのことで支障は生じてこない。(校則改定に挑んだ子どもたち)

さらに、「V-サセテオク」が「V-サセテオイテホシイ」「V-サセテオコウ」「V-サセテオキタイ」「V-サセテオクベキダ」のように、他者に対して積極的に動作を要求するという意志を表すムード形式を伴って現れる場合にも、使役主体による使役対象への《引き起こし》がうかがえる。

(22) 「実はね、東君、君から原次官に新館増築の追加予算一千五百万円の件の陳情を匂わ

せておいてほしいのだよ（後略）」（白い巨塔(一)）

(23) 「本拠を岐阜城に移す。そのときにあの男の面をみてやれ。おれは忘れるかもしれぬ  
ゆえ福富平太郎爺に憶えさせておこう」(国盗り物語・織田信長)

(24) この際、フランス語教授所も設立し、教官が来日するまでに少しでもフランス語を習得させておくべきであろう。(罪なくして斬らる)

### 7.2.2 《許可》

「V-サセテオク」が表す意味が《許可》と読み取れるものとして、次のようなものがあった。

(25) また、各官庁をあらためて回ってみて、衛生局以外においては、税関の独立性を支持する見解の持ち主の多いことも知った。承諾のもとにやらせておいて、予告も猶予も補償もなく一片の通知状で違法とされては、あまりにひどい。(人民は弱し官吏は強し)

(26) 「私を二年ばかり、ヨーロッパで遊ばせておいてくれれば、戦艦の一隻や二隻分の金は作ってみせるんですが」(山本五十六)

(27) 「じゃあ、君もご主人を愛しているのだ」「そうね、わたしを自由にさせておいてくれるという点では、いい人かもしれないわ。それにわたしも仕事のほうが好きだから」(別れぬ理由)

手元にある資料の中で、「V-サセテオク」が《許可》と解釈できるものは、上記の3例しか見当たらない。そして、これらを見ると、(25)は「承諾のもとに」の副詞相当の句をともなっており、(26)(27)は「V-サセテオク」のテ形に補助動詞の「クレル」がついた、「V-サセテオイテクレル」の形で用いられている。しかし、後者の(26)(27)の例は《放任》と読み取ることもできそうなものであり、実際に《許可》らしい例は(25)の1例しか見当たらない。

### 7.2.3 《放任》

「V-サセテオク」が《放任》の意味を表す場合、主に、(ア)副詞の明示、(イ)動詞の語彙的な意味、(ウ)「V-サセテオク」の文中における機能、さらに、(エ)文中における使役主体の現れの有無に注目して考察を試みる。以下、具体的にみていく。

(ア)対象とした資料の中に、「勝手に」「好きに」のように、動作の主体が自由に動作を行う様を表す副詞を伴う例が多く見られた。この他にも、同様の意味を表す副詞として、「自

由に」「好きなように」「存分に」「思いきり」「するがままに」「飽きるまで」「(V) だけ」(言うだけ、食べるだけ) などがある。また、主体の動作をそのまま容認する様を表す副詞「だまって」も見られた。

- (28) 「女は抱くものだと思っている。好きとか嫌いとか、そんなことはどうでもいいんだ。当たるを幸いという感じだったな。死んだやつが悪口は言いたくないんだけど」稲垣と宮田は黙って聞いていた。勝手に喋らせておいたほうがいいのだ。(「長崎-東京」特急殺人)
- (29) しばらく好きにさせておけばいい、という意地悪な気持ちになり、私はわざと歩調をゆるめ、追い付くのをやめた。(博士の愛した数式)

(イ) 次に、Vの表す語彙的な意味自体が放任の意味を表すものがある。対象とした資料の中には、「思うままにふるまう(行動する)」、「のさばる」、「はびこる」、「ぶらぶらする」の例が見られた。

- (30) 「あんな者をのさばらせておくから駄目なんだ」(山本五十六)
- (31) 「人間はそれぞれ顔がちがうように、独立した個であり、自我なんだ。ありとあらゆる独立した個が地表の物質界という現実の中で精いっぱい生きているんだ。地球という実体に宇宙的な進化をもたらすためにみんなが必死で働いているのさ。そういう人間存在を愚弄し、魂を奪い、自我を粗野な物質欲に駆りたてるあんなのような地底の亡霊をはびこらせておくわけにはいかない。(後略)」(妖少女)
- (32) 「いいか、此处は二度も、三度も出直して来れるところじゃないんだ。だって蟹が取れるとも限ったものでもないんだ。それを一日の働きが十時間だから十三時間だからって、それでピッタリやめられたら、飛んでもないことになるんだ。一仕事の性質が異うんだ。いいか、その代わり蟹が採れない時は、お前達を勿体ない程ブラブラさせておくんだ」(蟹工船)

(ウ) さらに、「V-サセテオク」の形・機能に注目すると、「V-サセテオイテ」という中止形で従属節の述語として現れ、従属節と主節に表わされる使役対象と使役主体の動作が対照的なものとしてとらえることができる場合(たとえば、(33)の従属節の「相手が立つ」に対して、主節の「自分は座って話す」)、《放任》の意味として解釈しやすいようである。

- (33) 特に、見苦しく、戒めるべき光景は、相手を立たせておいて、自分は椅子に座って話しているというものである。(己が禄は)
- (34) 男というものは良人であろうと息子であろうと、生涯女を待たせておいて、どこかをうろつき廻るものであるらしかった。(青春の蹉跌)
- (35) 本間に言うだけ言わせておいて、おもむろにという顔つきで片瀬は反論した。(火車)

(エ) 最後に、「V-サセテオク」が《放任》の意味を表す場合、文中での使役主体の現れ方に注目すると、《放任》を表す「V-サセテオク」のほとんどが、使役主体が文中に積極的に明示されないという特徴がみられる。これは、次にあげた用例を含め、上にあげた用例の多くがそうである。

- (36) 「今朝は早かったから、疲れたでしょう？いいですよ、着くまで寝ていてもらっても」織部は前を見ながらいった。「年寄り扱いするなよ。朝早かったのはお前も同じだ。大体、後輩に運転させといて、そういうわけにはいかんだろ」(さまよう刃)
- (37) トイレを出る頃には、油の上できゃーきゃー喜んでいる。こうなったら由輝が飽きるまでやらせておくしかない。(ママと呼んで！由くん)

一方で、次のように使役主体が文中に明示される場合もみられるが、これらのようなものは、《放任》を表す「V-サセテオク」69例のうち、6例に過ぎない。さらに、これらの場合、使役主体が「ガ」でなく「ハ」で現れるのも特徴的である。

- (38) 武松はむっつりと黙りこくって、彼らに勝手にしゃべらせておいた。(水滸伝)
- (39) 特に、見苦しく、戒めるべき光景は、相手を立たせておいて、自分は椅子に座って話しているというものである。(己が禄は) (= (33))

このように、《放任》を表す場合、使役主体が文中に積極的に明示されるものが少ない理由として、次のようなことが考えられる。使役主体が使役対象には意図的にはたらきかけて使役対象に動作をさせるという典型的な使役文(【母親が子供に命令して部屋の掃除をさせる】)からすると、《放任》を表す「V-サセル」の使役主体は、使役対象に何らかの働きかけを行うのでもなく、使役対象の動作に関与しているのでもない。つまり、使役主体がいなくても使役対象はその動作を行うことができる事態である。そのため、《放任》を表す場合の使役主体はその動作の実現においてかならずしも必要な存在ではない。このようなこ

とから、《放任》を表す場合、文中に明示されないことがゆるされるのではないだろうか<sup>51</sup>。

ここまで、「V-サセテオク」がどのような使役の意味を表しているのかという点に着目して考察してきたが、それぞれの意味における分布を示すと次のようになる。

表 19 : 「V-サセテオク」が表す使役の意味（観点Ⅰ）の分布

使役の意味	《引き起こし》	《許可》	《放任》	不明	合計
用例数	141 (65.0%)	3 (1.4%)	69 (31.8%)	4 (1.8%)	217 (100.0%)

表 19 に示したように、考察の結果、「V-サセテオク」は《引き起こし》と《放任》を表すものに大きく分類でき、《許可》を表すものはごく少数であることがわかった。前にもふれたが、先行研究では、「V-サセル」が放任を表す場合、「V-サセテオク」の形で現れることが多いとされている。しかし、「V-サセテオク」の実例をみると、ほかの形に比べて《放任》を表すものが多くみられるものの、それ以上に《引き起こし》を表すものも多いことがわかった。次に「V-サセテオク」が表す意味を観点Ⅱから考える。

### 7.3 「V-サセテオク」が表す使役の意味（観点Ⅱ）

前節での考察を踏まえ、「V-サセテオク」の V が意志動詞である場合、それが《つかいだての使役》を表すのか《みちびきの使役》を表すのかという観点から考えてみる。

「V-サセテオク」が《引き起こし》を表す場合、ほとんどが《つかいだての使役》を表している。このことは 7.2.1 の例からもうかがうことができ、また次の例もそうである。

- (40) 安田は、小樽から《まりも》に乗ったのであるから、ホームに河西を出迎えさせておいた方が、確実に自分が列車から降りたところを彼に見せつけて、効果はより有力なはずである。(点と線)
- (41) しかし、充夫は一千万の借金を爽香に返済させておいて、自分は若い子と出張先で落ち合って浮気と来る。(利休鼠のララバイ)
- (42) 「ああ、わしや、財前や、海坊主や、どうや景気は？なに、まあまあやと、ほんなら、代診にやらせといて、扇屋で一つどうや、あんたに紹介しときたい人もおるのでな、(後

<sup>51</sup> このことについて、宮地 (1969) がすでに指摘しており、宮地 (1969) は、「V-サセル」が表す意味を 5 つに分け、そのうち、「ダレカがダレカの自由放任をみとめることを表す」場合、「動作の「し手」は客語として表現されるが、「させ手」は表現されることが少ないようだ」(p. 93) と述べている。この指摘は正しく、本論文の考察の結果からも裏付けられる。



略)」(白い巨塔(一))

- (43) 「今朝は早かったから、疲れたでしょう？いいですよ、着くまで寝ていてもらっても」  
織部は前を見ながらいった。「年寄り扱いするなよ。朝早かったのはお前も同じだ。大体、後輩に運転させといて、そういうわけにはいかんだろ」(さまよう刃)
- (44) 飯の食えない盲人に、政は飯を食わせてやっている。その盲人たちを、金を返してくれない家の前に坐らせておいて、「金返せ、金返せ」と念仏のようになえさせる。(奥州の牙)

(40) は使役主体(「安田」)が後に続く文(「確実に自分が列車から降りたところを彼に見せつけて、効果はより有力であるはずである」)に現れる事態が使役主体自身にとって効果のある事態であるためにその実現をもくろんで使役対象(「河西」)に動作をさせているものである。(41) から (44) の場合、「V-サセテオイテ」の形で現れているが、(41) から (43) は、従属節の「V-サセテオイテ」の事態と主節の事態がいわば対照的な関係をなしている。使役主体が本来自分がやるべき動作をせずに、ほかの動作をするために使役対象に動作を行わせているという点から《つかいだての使役》と解釈できる。また、(44) は「V-サセテオイテ～V-サセル」の構文であり、この場合の「V-サセテオク」も、使役主体が使役対象に主節の「V-サセル」事態を実現させるために必要な動作を使役対象に行わせていると考えられる。

一方で、《引き起こし》を表す「V-サセテオク」の中に、《みちびきの使役》を表す場合もある。

- (45) (親が子どもに) 死にそうなほどの退屈というものを、小さい時分からみっちり 体験させておくというのが、未来を見すえた教育というものなんですから。(戦時下動物活用法)
- (46) 先に触れたように、松沢に事前にアメリカのメディアリテラシーの本を渡しておいたが、この分野についての予備知識を 持たせておいた。(楡家の人びと)

しかしながら《引き起こし》を表す「V-サセテオク」の中には、《みちびきの使役》を表すものは少なく、多くが《つかいだての使役》を表している。これは補助動詞「オク」がもつもくろみ<sup>52</sup>性ともかかわっていると思われる。これについては本節の最後に述べる。

<sup>52</sup> 「もくろみ」とは、高橋(1969: 141)によると、「動詞のあらわす動作がなんのためにおこなわれるかをあらわす文法的な意味」であるという。

「V-サセテオク」が《許可》を表す場合は、7.2.2 で述べたように 3 例しかなかった。下に 7.2.2 であげた例を再掲したが、この 3 例から考えると、(47) の例は《つかいだての使役》に近いように思われるが、(48) (49) は「V-サセル」動作の実現が使役対象の望みを叶えるもの、すなわち使役対象のための動作であるという点から《みちびきの使役》として解釈できる。

(47) 「私を二年ばかり、ヨーロッパで遊ばせておいてくれれば、戦艦の一隻や二隻分の金は作ってみせるんですが」(山本五十六) (= (26))

(48) また、各官庁をあらためて回ってみて、衛生局以外においては、税関の独立性を支持する見解の持ち主の多いことも知った。承諾のもとにやらせておいて、予告も猶予も補償もなく一片の通知状で違法とされては、あまりにひどい。(人民は弱し官吏は強し) (= (25))

(49) 「じゃあ、君もご主人を愛しているのだ」「そうね、わたしを自由にさせておいてくれるという点では、いい人かもしれないわ。それにわたしも仕事のほうが好きだから」(別れぬ理由) (= (27))

「V-サセテオク」が使役の意味として《放任》の意味を表す 69 例の中で、使役主体が自分自身のために意図的に放任する事態を表しているのは次の 2 例しかみられなかった。

(50) 《月曜日には一網打尽》になるように《網を張り巡らせ》ていたからこそ、わざわざモリアーティを自由の身にさせておいた。(ベイカー街の問題)

(51) だが、日本語を知らないふりをして、自分たちを安心させ、自由にしゃべらせておいて、何かの情報を得ようと、こういう芝居をしくんだのかもしれない。(黄金宮)

(50)、(51) の「V-サセテオク」は、使役の意味として《放任》を表しているが、(50) の場合、副詞相当の語(「わざわざ」)によって使役主体の何らかの意図がうかがえ、その結果使役主体が望む事態(「一網打尽になる」)が実現することを表す。そして(51) も使役主体自身のための事態の実現(「何かの情報を得る」)のためにあえて使役対象を放任している事態である。つまり、これらの「V-サセテオク」は、《つかいだての使役》と解釈できる。

一方、《放任》を表す「V-サセテオク」が《みちびきの使役》と解釈できるものとして次

のような例がある。

- (52) 冴子の手も同じように冷たかった。鮎太はその時、冴子の手指の白く華奢なことに初めて気付いた。いつか冴子に抱きしめられた時とは違って、鮎太はいつまでも冴子に手を握らせておいた。(あすなろ物語)
- (53) まだ二年生だから、塾にも行かないし稽古ごとくもさせていない。遊ばせておけばいいんだ、と夫は言う。(TV ピーブル)
- (54) 加藤は黙ってついていった。宮村が、優位を誇示したいならば、そうさせておこうと思った。(孤高の人)

こららは、使役対象のために、または使役対象の望み通りに使役主体が意図的に《放任》していると解釈でき、《みちびきの使役》に相当するといえる。しかし、《放任》を表す例の中には《つかいだての使役》とも《みちびきの使役》とも解釈できないものがある。

- (55) 客をしばらく独りにさせておいて、香代子は奥からお茶を運んできた。(はちまん)
- (56) 世間の人たちには、あの女はろくでなしだとでもなんとでも、かつてに言わせておけばいいんです。(自立)
- (57) 男というものは良人であろうと息子であろうと、生涯女を待たせておいて、どこかをうろつき廻るものであるらしかった。(青春の蹉跌)
- (58) しばらく好きにさせておけばいい、という意地悪な気持になり、私はわざと歩調をゆるめ、追い付くのをやめた。(博士の愛した数式) (= (29))

(55) から (58) の場合、使役主体は使役対象が行う動作の実現について無関心であり、使役主体は使役主体自身、または使役対象のために意図的に《放任》するという事態とは異なる。つまり、使役主体は使役対象の V という動作の実現に対して何のもくろみもないのである。そして、これらの場合は《つかいだての使役》であるか《みちびきの使役》であるかという観点からは分類できないのではないかと思う。実際、対象とした《放任》を表す「V・サセテオク」の中にはこのようなものが多くみられた。

本節では、「V・サセテオク」が表す意味を観点Ⅱから考えてみた。「V・サセテオク」が観点Ⅰの《引き起こし》を表す場合、ほとんどが《つかいだての使役》を表し、《みちびきの使役》を表す場合はごく少数である。一方で、「V・サセテオク」が《放任》を表す場合、《つか

いだての使役》と《みちびきの使役》を表すものが少しあるものの、多くがそのどちらにも相当しないものであった。このような特徴は、おそらく補助動詞「V-シテオク」がもつ意味と関係があるように思われる。第2章の2.3で「V-シテオク」に関する先行研究をあげたが、その中で笠松(1993)は、「V-シテオク」についてもくろみ性の観点から考察しており、その中で「V-サセテオク」に関してもくろみ性の観点から2つの意味があるとしている。一つは「あとにおこる事態にそなえて」という使役主体のもくろみをことさらに表現している場合であり、もう一つは「使役主体が、あとにおこる事態にそなえて、あいての動作を許可したり、放任したりする」ことを表している場合であるという。前者は、本節でみた「V-サセテオク」が《引き起こし》の意味を表し、かつ《つかいだての使役》または《みちびきの使役》を表す場合に相当し、後者は「V-サセテオク」が《放任》を表し、かつ《つかいだての使役》と《みちびきの使役》を表すものに相当する。しかし、上であげた(55)から(58)のようなものは笠原の分類には入らないものである。「V-サセテオク」の中に(55)から(58)のような例が少なからずあるからには、少なくとも「V-サセテオク」に関してはもくろみ性がうかがえないものがあることを認めなければならないのではないだろうか。(55)から(58)のようなものは、「使役主体が使役対象の動作の結果に対して無関心でただ放任する場合」として位置付けなければならないのではないかと思う。

#### 7.4 「V-サセテオク」のVの語彙的な意味

7.2節で、「V-サセテオク」が表す使役の意味を文中における構文的な特徴を手がかりに考察した。その結果、《引き起こし》と《放任》に大きく分けられることがわかった。さらに、前節でみた文中での構文的な条件以外に、表す使役の意味によって「V-サセテオク」のVに現れる動詞にもある程度その偏りがみられる。「V-サセテオク」が表す使役の意味よるVの語彙的な意味の分布を表に示し、具体的な動詞をその下にあげる。

表 20 : 「V-サセテオク」の使役の意味（観点 I）と V の語彙的な意味<sup>53</sup>

V の語彙的な意味		用例数	使役の意味による分布	
			引き起こし	放任
対象変化	位置変化	2	2	0
非対象 変化	接触	8	8	0
	生産	4	4	0
	実行	26	8	18
やりとり	情報のやりとり	28	2	26
	モノのやりとり	4	4	0
主体変化	位置／姿勢変化	19	15	4
	状態変化	27	23	4
	社会的状態変化	3	2	1
	心理的状态変化	39	35	4
	生理的状态変化	8	8	0
活動		42	30	12
合計		210	141	69

## 位置変化

《引き起こし》運ぶ、出迎える

《放任》なし

## 接触

《引き起こし》なぐる、一人にする、獲る、交代する、収集する、盗む、収容する、襲う、

《放任》なし

## 生産

《引き起こし》作る（2）、書く、メモする

《放任》なし

<sup>53</sup> 「V-サセテオク」が《許可》を表す場合は3例しかなく、その場合のVは（25）から（27）の「やる」「遊ぶ」「（自由に）する」である。表 20 では「V-サセテオク」が《引き起こし》と《放任》を表す場合のVのみを示す。

## 実行

《引き起こし》やめる、セッティングする、診療をやる、厳禁する、進行する、尽くす、体験する、行う

《放任》する (13)、やる (5)

## 情報のやりとり

《引き起こし》伝える (2)

《放任》言う (19)、しゃべる (6)、話す (1)

## モノのやりとり

《引き起こし》返済する、提出する、買い込む、(技を) 受ける

《放任》なし

## 位置／姿勢変化

《引き起こし》まいる、急行する、駆ける、接近する、潜入する、走る、来る、どく／かがむ、すわる (3)、立つ

(2)、伏せる

《放任》駆けあがる、尾行する、脱走する／立つ

## 状態変化

《引き起こし》持つ (3)、つかむ、握る、口にスリッパを加える／かっこうをする、小磯なくする、おむつをす

る、飲む、食べる (2)／見る、見張る、習得する、静まる、木戸払いを食う／スタンバイする、はべる、寄り

添う、戯れる、待機する、張り込む

《放任》持つ (2)、にぎる (2)

## 社会的状態変化

《引き起こし》入院する (2)

《放任》退陣する

## 心理的状态変化

《引き起こし》あなどる、おどろく、その気にする、よろこぶ (2)、啞然とする、安心する (2)、覚える (2)、

感じる、甘い思いをする、いい思いをする、期待する、期待を抱く、興奮する、緊張する、困る、思う (7)、

専念する、納得する、満足する、油断する (4)、理解する (2)、茫然自失する

《放任》怒る、楽しむ、ガス抜きする、思う

## 生理的状态変化

《引き起こし》やすむ、目を覚ます、気絶する、小便する、生む、太る、眠る (2)

《放任》なし

## 活動

《引き起こし》冷や飯を食う、勉強する、真似する、待つ (17)／活動する、犠牲を払う、研究する、見物する (2)、

住む (2)、泊まる、逼塞する、遊ぶ

《放任》吸う、使う、待つ、運転する／働く、活動する、仮泊する／遊ぶ、のさばる (3)、はびこる、ぶらぶらする

表 20 からうかがえる特徴の一つとして、まず、《引き起こし》の「V-サセテオク」の V には対象変化動詞の種々が少しみられるが、《放任》を表す場合は対象変化動詞のうち、対象実行動詞の「する、やる」しかみられないことである。ただし、「する、やる」の対象実行動詞は、対象を物理的に変化させるものではないことから、非対象変化動詞の中でもごく周辺的なものであるといえる。つまり、《放任》を表す「V-サセテオク」の V は、対象を変化させる動詞、いわゆる他動詞らしい他動詞がみられない。なぜこのような偏りが生じるのか考えてみると、次のようなことが考えられるのではないだろうか。使役主体が使役対象に働きかけて何らかの動作を行わせるという《引き起こし》の「V-サセル」は、使役主体の働きかけによって使役対象、もしくは使役対象を通して他のもの（動作対象）に変化が生じるものである。それに対して、《放任》を表す「V-サセル」は、すでに先行している使役対象の何らかの動作に使役主体が積極的にかかわることなく、ただ容認するものであるため、使役主体が使役対象に「V-サセル」ことによって使役対象に変化が生じるものではない。このようなことから、《放任》を表す「V-サセル」の V も他のもの（動作対象）に変化を及ぼさないもの、つまり他動性の低いものが現れやすいのではないだろうか。

また、表 20 の動詞の分布をみると、《引き起こし》を表す「V-サセテオク」の場合、活動動詞が、141 例中 30 例と全体の約 2 割を占め、もっとも多いのに対して、《放任》を表す場合は、やりとり動詞の中でも情報のやりとりを表す動詞が 69 例中 26 例あり、全体の約 38%を占める。

さらに、《放任》を表す場合の V の語彙的な意味におけるバラエティーはそれほど多くない。多く現われているやりとり動詞をみると、情報のやりとりを表すもののうち、とくに「言う」が目立つ。また、対象実行動詞としての「する／やる」も、ヲ格をとまなうのではなく、前の文をうける指示詞をとまなうものがほとんどである（「そうさせておく」）。

このように、「V-サセテオク」の場合、どのような使役の意味を表すかによって、V の分布に特徴がみられることが明らかになった。使役の意味によって V の語彙的な意味の分布に特徴がみられるかに関しては、「V-サセテオク」のみならず、「V-サセル」全体を通じて考察する必要があると思われるが、これに関しては今後の課題としたい。

## 7.5 第 7 章のまとめ

本章では、これまで先行研究で「V-サセル」が《放任》を表す場合に多く現れるとされる「V-サセテオク」を考察の対象とし、実際どのような使役の意味を表すのか構文的な特徴を

手掛かりに考察を行った。考察の結果、「V-サセテオク」が表す使役の意味（観点Ⅰ）として《引き起こし》と《放任》に大きく分けられ、割合からすると、《放任》よりも《引き起こし》を表すものが多い。そして、それぞれの意味における構文的な特徴を明らかにできた。また、「V-サセテオク」の使役の意味を《つかいだての使役》/《みちびきの使役》の観点（観点Ⅱ）から考えると、《引き起こし》を表す場合は《つかいだての使役》と解釈できるものがほとんどで、《みちびきの使役》はごく少数であるのに対して、《放任》を表す場合は《つかいだての使役》と《みちびきの使役》を表すものが少数であり、それ以外の多くはどちらか判断できないものであった。

本章で考察した「V-サセテオク」は、先行研究の指摘通り、他の形に比べて《放任》を表すものの割合が高いというのは確かである。これまでの「V-サセル」の研究の中で、《放任》の意味を表す場合の構文的な特徴についてあまり指摘されていなかった。本章で「V-サセテオク」を考察することによって、《放任》を表す場合の構文的な特徴（副詞相当の語の明示、文中における形・機能、さらに現れる V の語彙的な意味の特徴）を明らかにすることができたと思う。



## 第8章 「V-サセテシマウ」

### 8.1 対象とした用例、および考察方法

考察の対象とした資料、および用例の検出方法は第1章の1.4節で示した通りであり、検出できた「V-サセテシマウ」の用例は560例である。このうちには、(ア)のように使役主体がモノやコトである例が多くみられ<sup>54</sup>、(イ)のような使役主体と使役対象がともにヒトである場合は198例しかなかった。

(ア) わざと大げさな身ぶりをする一種の演技。役者は三日やったらやめられないと云う。

左翼運動にもそれと似たような、奇怪な魅力があって、あの学生たちに命がけの演技をさせてしまうのではないだろうか。(青春の蹉跌)

(イ) 「―結局、親ごさんが彼女をむりやり入院させてしまい、二人の関係は消滅した。そのあと彼は…」(夢の島)

先述したように、「V-サセテシマウ」という形は、従来の研究の中で、使役主体が不本意ながら放任したという意味、いわば《不本意ながらの放任》(本論文でいう《放任》)の中の《非意図的な放任》を表す際に、「V-サセテシマウ」の形で多く現れるとされているものである。本章では、使役主体と使役対象がともにヒトである198例の「V-サセテシマウ」が実際どのような使役の意味を表しているのかについて、使役主体の働きかけのあり方、使役主体と使役対象の関係、そして、Vの語彙的な意味に注目して考察する。

### 8.2 「V-サセテシマウ」が表す使役の意味(観点I)

#### 8.2.1 《引き起こし》

〔1〕 まず、使役主体が使役対象に意図的に働きかけ、使役対象にVという動作をさせる、いわゆる《引き起こし》といえる「V-サセテシマウ」には次のようなものがある。Vには意志的な動詞((1)～(3))と無意志的な動詞((4)(5))のどちらもみられる。多くが複文構造で現れ、従属節に使役主体が意図的に働きかけた具体的な様子((1)(2)、(4))、使役対象に動作を行わせる目的((3)、(5))が明示される。

<sup>54</sup> このことは、8.4節で述べる「V-サセテシマウ」のVに無意志的な動作を表すものが多く現れることとも関係があるように思われる。

- (1) シリウスは香港で胡蝶さんにそっくりな少年を探しだして、それをあやつってついに長太夫氏を殺害させてしまうのですが、本当は胡蝶さんに殺害させたかったのでしょう。(天狼星)
- (2) 昭和十年の暮か、十一年一月のある日曜日、横須賀鎮守府の先任副官が、参謀長の井上に断わりなしに、大勢の若い士官を長官官舎に案内して、米内に会わせてしまった事があった。(山本五十六)
- (3) そのころからフランクは作曲家になりたいと思っていたが、せっかちな父親は、早くピアニストとして活躍させようとして、パリ音楽院を途中で退学させてしまった。(リストからの招待状)
- (4) 私が葡萄糖とビタミン十何種かを混ぜた注射をしてあげましょう。そしたら皆さんも元気になられて、過労死なんかしないで済みますよ」 とだまくらかして、ひそかに持ちこんだイソミタールを注射してみんな眠らせてしまう。(どくとのマンボウ医局記)
- (5) 記憶は定かではなかったが私も、大体の粗筋は覚えていた。「地獄変」の屏風絵を描くために、娘を死なせてしまった画家の話だ。(重力ピエロ)

また、上のように、文中から使役主体のはたらきかけがうかがえるものでなくても、使役主体と使役対象との関係（上下関係がはっきりうかがえる間柄）から、使役主体による使役対象へのはたらきかけがあったものとして解釈できるものがある。

- (6) 「さっきの電話でうかがいましたが、ママさんはその女をやめさせてしまわれたんですって？」(黒革の手帖(上))      (「ママ：その女」＝店主：店員)
- (7) 彼は半年ほど前の一九七三年春に、六年間勤務したコロラド大学を解雇された。理由は簡単だった。彼はあまりにも多くの学生を落第させてしまったのである。(若き数学者のアメリカ)      (「彼：多くの学生」＝教師：学生)

ところで、上の(6)(7)の例および、(1)から(3)の「V-サセテシマウ」のVは意志動詞であるが、使役主体の働きかけを受けた使役対象が自ら意志を持ってVという動作を行っているものはそれほど多くないように思われる。多くのものが、使役対象の意志とは関係のない、使役対象にとってはほぼ無意志的な動作に近いものである。使役主体が使役対象に意図的に働きかけ、それを受けた使役対象が意志的な動作を行う典型的な《引き起こし》を表す「V-サセル」から考えると、これらのようなものは典型的な《引き起こし》で

あるとはいえないのではないかと思います。このことは、文中に現れうる使役主体による使役対象への働きかけの具体的なあり方にも特徴がみられる。すなわち、典型的な《引き起こし》にみられる「{使役対象}に命じて/頼んで」のような《動作要求的な働きかけ》や「{使役対象}を{移動先}に派遣して/送って」のような《派遣型》が見られないのも、「V-サセテシマウ」が典型的な使役動詞として機能していないということを物語っているのではないかとと思われる。

〔2〕 また、「V-サセテシマウ」の中には、使役主体の使役対象への働きかけが意図的なものとはそれほど感じられない場合がある。次の例はVが意志動詞である場合である。

- (8) やむをえず待たせてしまった場合には「長らくお待たせいたしまして、申しわけございません」といって出ます。(すてきな女性のイキイキ仕事術)
- (9) 「ありがとう、ルック。なんて優しいんでしょう。ごめんなさいね、せっかくのお散歩を中断させてしまって。だけど…」(幸せのルール)

これらの例は、使役主体が使役対象にVという動作を引き起こすために意図的に働きかけたとはいえないが、使役主体による動作がなければ使役対象はVの動作を行うことはなかったものである。しかし、それが意図的ではないにしても何らかの影響を与えたということで使役主体による使役対象への何らかの働きかけがあったものと解釈でき、《引き起こし》の中でも《非意図的な引き起こし》と位置付けることができる。

さらに、Vが無意志動詞の例として、次のようなものがある。

- (10) 「せっかくのお客さまの申し出をお断りするのは、何年たっても苦手なの」とA子さん。「それはできません」「やれません」と言ってしまうと、幼さや冷たさを相手に感じさせてしまいます。(人に好かれることばレッスン)
- (11) ゆうや君をかまって箸を取ったり、ゆうや君をからかったりした友だちを怒って追いかけていき、廊下の隅まで追いつめてかえって泣かせてしまうとか、ケンカになるなど。(僕たちだって遊びたい)
- (12) 「いくつ？」と訊き、私は逆上のあまり「…あの四十×…」正直に自分の年齢を答えて、砂糖の量を尋ねたはずの相手を啞然とさせてしまった。(男はオイ！女はハイ…)

これらの場合も、従属節に使役主体の動作が現れているが、その動作は使役対象に向かっ

て行うもの、つまり、従属節の動作の相手は使役対象である。しかし、従属節の使役主体による使役対象への動作は、使役対象に V という無意志的な動作を行わせることを意図して行ったものではない。

さらに、次のように、使役主体の性質自体が、使役対象に無意志的な動作を引き起こすきっかけとなっているものもある。これらも使役主体自身は意図していないが、使役主体がいなければ使役対象は V という動作を行うことがなかったという点から、《非意図的な引き起こし》と解釈できるだろう。

- (13) よくある思い込みの激しいタイプ。ムーンさんて、ああいうふうは無秩序に色気をふりまくタイプだから、知らないうちに、もしかして俺は誘惑されてるのかと遅塚に勘違いさせてしまっても、おかしくない。(実況中死)
- (14) 譲は知らず知らずのうちに相手をリラックスさせてしまう人間だ。残念なことに、自分自身が一番その利点に気がついていない。(ホテルで逢いましょう)
- (15) (母には悲しい思いばかりさせてしまった。あと五年、あと五年生きていてくれたら…) 賢太郎は胸のなかで呟いていた。(揺曳)

### 8.2.2 《放任》

《放任》を表す「V-サセテシマウ」の中にも使役主体が意図的に使役対象の動作を放任したのか、非意図的に放任したのかに分けることができる。以下で、具体的にどのような例がみられるのか詳しくみていく。

〔1〕 「V-サセテシマウ」の用例の中で、次のように使役主体が使役対象に働きかけることなく、使役対象の動作をそのまま容認する、いわば《放任》として解釈できるものがある。

- (16) 子供が声を大きくして説明しても、感情的になってしまった親はおいそれとは折れてくれない。かえって子供を押しつぶそうとますます高圧的になってくるはずである。だからとにかく親に言いたいだけのことをすべて言わせてしまうのが一番である。(親離れするとき読む本)

《放任》を表す場合、「公園で遊んでいる子供をそのまま遊ばせた」のように、使役主体は使役対象の動作をそのまま放っておき、使役対象の動作の結果に関しては無関心である。

上の(16)の例がまさにそうである。しかし「V-サセテシマウ」の例の中にこのような典型的な《放任》として解釈できるのは(16)の1例しかなかった。しかし、典型的な《放任》とはいえないものの、《放任》に準ずるものとみなせるものとして、次のようなものがある。

(17) 「気になる」と思いつつ気になるままで卒園させてしまっていては、責任をとったことにはならない。(4歳児の自我形成と保育)

(18) 賢一郎はゆっくりとボートを漕ぎながら、遠くまで続く水面と、遠い水面に映る濃い山の影とを眺めていた。そして女に、ここまで言わせてしまったことの失敗を感じていた。(青春の蹉跎)

上の例の場合、「V-サセテシマウ」の文に、動作を放任してしまったことに対する使役主体の評価を表すものが述語として現れている。そして、この主節に現れる結果状態は使役主体にとって好ましくないものである。つまり、これらの「V-サセテシマウ」は、使役主体が使役対象の動作を放任することによって使役主体自身が何か好ましくない影響を被ることを表している。本来、Vが意志動詞である「V-サセル」が《放任》を表す場合、使役対象の動作の結果について使役主体は問題にしない、または無関心であるものが一般的であり、ほかの形の「V-サセル」には(17)(18)のような例はみられない。このようなものがみられるのは、「V-サセテシマウ」ならではの特徴ではないかと思われる。

〔2〕 さらに、「V-サセテシマウ」が《放任》を表すものの中にも、使役主体が使役対象に働きかけたりしないものの、使役対象とはかかわりのない使役主体の非意図的な動作(状態)が使役対象の行う動作や変化のきっかけになっている「V-サセテシマウ」がある。これらの場合は、《放任》の中でも《非意図的な放任》に相当するものである。

(19) 気がつくと、ホテルのロビーにはまださっきのタクシー運転手がいて、こちらを見ている。お金を払うのを忘れてた！菜穂子と話している間、ずっと待たせてしまったのだ。(いま明かす「イラク拘束」と「ニッポン」)

(20) 先日はすみませんでした。待ちぼうけをさせてしまって、怒らないでね。(青春の蹉跎)

上の(19)(20)の例はいずれもVが「待つ」であるが、使役主体が意図して使役対象に「待つ」動作を引き起こしたのではない。使役主体が使役対象とは関係のない動作をした

ことで結果的に使役主体が使役対象を放任したことになり、そのため、使役対象が「待つ」ことになったのである。

また、使役対象が行った無意志的な動作に対して、使役主体の動作が直接的に関わっているとはいえないものがある。

- (21) 賢太郎は胸のなかで呟いていた。あと五年すれば一人前になって母を安息に休ませてやれたのに…。悲しいままに逝かせてしまった。(揺曳)
- (22) (当時を回想する場面で) 公園の滑り台から落ちて、と彼女は言った。それで息子を死なせてしまったという。(さまよう刃)
- (23) そして、その間、金を出しても決して経験することのできない、多くの教訓を得ることができた。私の三十代の出来事であった。そのせいで、子供たちには、随分肩身の狭い思いをさせてしまったと、今さらながら申し訳なく思っている。(らーめん屋おやじのここだけの話)

これらの場合、使役主体の使役対象への働きかけがなく、使役対象が行う無意志的な動作に使役主体が直接かかわっているとは言えない。にもかかわらず、「V-サセテシマウ」が使われるのは、使役主体と使役対象の関係にあるだろう。これらの場合、使役主体と使役対象の関係は【親—子】のように、社会的な関係で結ばれているものが多い。さらに、現れるVもかなり偏っており、【待つ】、【死ぬ】、【(悲しい) 思いをする】がほとんどである。

ところで、これまであげた《非意図的な放任》を表すものは、使役主体が使役対象を非意図的に放任したことによって使役対象が何らか好ましくない影響を被ったものである。しかし、中には使役主体が非意図的に放任したことによって、使役主体自身が好ましくない影響を被るということを表す「V-サセテシマウ」もある。

- (24) 義昭に幕府をひらかせてしまえば、天下は義昭のものになる。(国盗り物語・織田信長)
- (25) 今夜あたりで城山と犯人の接触を止めておかないと、日之出を裏取引に走らせてしまう。(レディ・ジョーカー)
- (26) ファウルされて痛がっているようでは相手をつけ上がらせてしまう。(蹴球神髄)
- (27) 「何も申すな。昨年、時を逸した悔いが、まだうずくのだ。待てば、その分相手に力をつけさせてしまう。この件は、一気に片づけてしまうしかないのだ」(五王戦国志)

上の(24)から(27)は、「V-サセテシマウ」の文中における形・機能にも特徴がある。これらはいずれも条件の形(またはそれに準ずるもの)の従属節をとまなう複文であり、(24)は「V-サセテシマウ」が条件の形の従属節に現れ、主節には使役主体が非意図的に放任したことによって生じる使役主体にとって好ましくない結果の状態が示されている。そして、(25)から(27)は、主節の述語に「V-サセテシマウ」が現れ、条件の形の従属節には使役主体自身の動作が現れているが、その動作は使役対象に直接かかわっているとはいえないものである。使役主体が従属節に現れる動作を行うことによって使役対象を《放任》する事態になり、その結果使役主体自身が望んでいない事態を生じさせてしまったという事態を表している。

このように、「V-サセテシマウ」は、「V-サセル」動作の結果には関心のない典型的な《放任》を表すものはほとんどなく、使役主体が使役対象の動作を放任することで使役主体もしくは使役対象に何らかの影響(多くが好ましくない影響)を被るということまでを文全体で表している場合が多いという点において「V-サセル」とは異なる。また、使役対象にとって望ましくない《非意図的な放任》を表す場合((21)～(23))は既実現の事態が多く、使役主体にとって望ましくない《非意図的な放任》を表す場合((24)～(27))は未実現の事態であることが多いということも特徴としてあげられる。

【3】「V-サセテシマウ」の中にも働きかけの具体的な様子が文中にはっきり明示されず、また前後の文脈などからもうかがえないため、働きかけの有無や意図性の有無を判断するのがむずかしく、どのような使役の意味を表すのかははっきりしないものがある。たとえば次のような例である。

- (28) 万が一、達成できないことがあれば、実行不可能な予算だったということになる。この場合、実行不可能な予算を読めなかった上司に責任がある。部下に、実行不可能な予算を「立てさせてしまった」のである。(指示ができる上司・指図しかできない上司)
- (29) ああ、そうだな…。なぜ彼女の嘘に気づかなかったのだろう。彼女が、理由もなくテストを休むなんてことをするはずがないのに。私は、彼女に嘘をつかせてしまったことを、また、その嘘に気づけなかったことを、心から申しわけないと思った。(不登校と向き合う)

これらは、使役主体の働きかけが意図的だったのか、そうでなかったのか、さらに働きかけ自体があったか否か、判断するのはむずかしい。

以上、「V-サセテシマウ」がどのような使役の意味を表すのかみてきた。「V-サセテシマウ」の場合、典型的な使役文（すなわち、使役主体が使役対象に意図的に働きかけ、それを受けた使役対象が意志的に動作を行うことを表す使役文）が表す《引き起こし》の意味と比べると、使役対象の動作が意志的なものであるとはいいいにくいものも多く、典型的な《引き起こし》らしいものは少数である。また、使役主体が意図的に何も働きかけることをしない《放任》を表すものもごく少数である。つまり、「V-サセテシマウ」は、使役主体が使役対象に働きかける動作とそれを受けた使役対象の動作のいずれか、もしくはいずれも非意図的、または無意志的な事態が現れることが多いということだろうか。

なお、「V-サセテシマウ」の例の中には、《許可》を表すものは見られなかった。

今回対象とした「V-サセテシマウ」がどのような使役の意味を表すのかその分布を示すと次のようになる。

表 21：「V-サセテシマウ」が表す使役の意味（観点Ⅰ）の分布

意味	《引き起こし》		《許可》	《放任》		不明	合計
	意図的	非意図的		意図的	非意図的		
用例数	118 (59.6%)	19 (9.6%)	0 (0.0%)	3 (1.5%)	36 (18.2%)	22 (11.1%)	198 (100%)

「V-サセル」に関する先行研究の中で、「V-サセル」が《非意図的な放任》を表す場合「V-サセテシマウ」の形で現れることが多いとされているが、本章で考察の対象とした「V-サセテシマウ」の例をみると、表 21 に示したように《意図的な引き起こし》を表すものが全体の半分以上を占め、《非意図的な放任》を表すものは 198 例中 36 例で全体の約 18% に過ぎない。しかしながら、前にも触れたが、「V-サセテシマウ」が《意図的な引き起こし》を表す場合、使役主体による使役対象への働きかけが限定されている。「V-サセテシマウ」が《意図的な引き起こし》を表す場合、典型的な使役文に多く現れる「{使役対象} に命じて/頼んで」のような動作要求的な働きかけはあまり見られない。多くのものが使役対象の意志を介さない（問わない）一方的な働きかけであったり、使役対象が無意志的に V という動作を行うように誘導するような働きかけであることが多い。そして、それを受けた使役対象の動作も使役対象自身の意志をもって動作を行っているとはいいいにくいものが多いように思われる。このような点から《意図的な引き起こし》を表す「V-サセテシマウ」は、典型的な《引き起こし》とは少し異なり、いくぶん無意志的な事態の引き起こしに近い性質のものかもしれない。つまり、「V-サセテシマウ」は、使役主体が使役対象に働きかける動作と



それを受けた使役対象の動作のいずれか、もしくはいずれも非意図的・無意志的な動作であることを表現するのに適切な形であるといえるのではないだろうか。そのため、「V-サセテシマウ」には「V-サセル」が表しうる使役主体の積極的な意図と使役対象の意志的な動作をともなう《許可》や典型的な《放任》（《意図的な放任》）を表すものがほとんどみられないのだろう。

### 8.3 「V-サセテシマウ」が表す使役の意味（観点Ⅱ）

「V-サセテシマウ」が表す使役の意味を、《つかいだての使役》であるか《みちびきの使役》であるかという観点から考えてみる。「V-サセテシマウ」の場合、8.2 で考察した通り、「V-サセル」動作の実現が使役主体にとって非意図的、または使役対象にとって無意志的な事態であることが多く、使役主体の意図によって使役対象に意志的な動作を行わせる「V-サセテシマウ」はそれほど多くない。しかし、8.2.1 にあげた（1）の例もそうであるが、次のような「V-サセテシマウ」は《つかいだての使役》として解釈できる。

- (30) 別れて、日が経つにつれて、よろこびは薄れ、かりそめの恩を受けた事がかえってそろそろしく、自分勝手にひどい束縛を感じて来て、あのカフェのお勘定を、あの時、全部ツネ子の負担にさせてしまったという俗事さえ、次第に気になりはじめて、（後略）（人間失格）
- (31) 彼の過去にたいして厳密な審査もおこなわず、彼のギマンを見やぶることができずに、彼を入党させ、やがて中央委員、政治局員にまで入りこませて、破壊活動をさせてしまった。（野坂参三と宮本顕治）
- (32) 私語だとまだ大目に見られるが、子どもが出ていってどこにいるかわからないままだと放っておけず、探しにいっていると授業が成り立たない。校長先生と教頭先生が追いかけていく。「管理職にそこまでさせてしまうなんて、自分が情けなくて」と先生はうつむいた。（学級崩壊）
- (33) 自分は輜重兵部隊に所属していて馬を扱うのが任務ですから、汚れもひと倍ひどくなるのです。自分の身体についている泥の大半は馬糞ですよ。そんなものをあなたに洗わせてしまって」（凍れる瞳）

一方で、「V-サセテシマウ」の中で、使役主体が使役対象のために、使役対象にとって好ましい事態を引き起こす《みちびきの使役》と解釈できるものは今回対象とした資料の中

には次の(34)の例しかみられなかった。

- (34) (子どもが) 食べ散らかしているのを見ると、スプーンを取り上げて皿のなかの食べ物をかき集め、食べさせてしまう。(自殺)

このように、「V・サセテシマウ」には使役主体が使役対象にとって好ましい事態を実現させるものはごく少数である一方で、次のように、使役対象にとって好ましくない事態が生じたことを表すものが多くみられる。これらの場合も「V・サセテシマウ」動作の実現が使役主体が使役主体自身のために使役対象に動作を行わせるのではなく、使役対象に何らかの変化を生じさせるものであるという点から、《みちびきの使役》に準ずるものとして位置付けることができるだろう。

- (35) 母の小見の方は、縁談がきまってからはずっと濃姫の部屋で起居している。戦国のならいで、もはや隣国の大名に嫁がせてしまえば、生涯この娘と相見ることもないであろうと思い、そのことのみが悲しいらしく、折りにふれては涙をにじませたりした。(国盗り物語・織田信長)

- (36) 父ちゃん(夫)も死んでしまって、私も年を取って百姓ができなくなってきたら、息子がこの病院に入院させてしまったんですよ。(現代医療への提言)

#### 8.4 「V・サセテシマウ」のVの語彙的な意味

考察の対象とした「V・サセテシマウ」のVにどのような動詞がみられるのか調べてみると、ある程度傾向がみられる。Vの語彙的な意味による分布を下の表にまとめ、現れた具体的な動詞を表の下にあげる。(□の動詞については後述)

表 22 : 「V-サセテシマウ」のVの語彙的な意味

Vの語彙的な意味		数
対象変化	状態変化	8
対象非変化	実行	4
やりとり	情報のやりとり	6
主体変化	位置／姿勢変化	6
	状態変化	12
	社会的状態変化	20
	心理的状态変化	73
	生理的状态変化	46
活動		20
その他		3
合計		198

#### 状態変化

殺す (2)、殺害する、きりなびく、**蕩尽する**、**紛失する**、洗う、姿を変える

#### 実行

中断する、やめる (3)

#### 情報のやりとり

言う (4)、聞く、注文する

#### 位置/姿勢変化

行く (2)、送る、通る、ひきあげる／座る

#### 状態変化

脱ぐ、食べる (5)、飲む (2)、(母乳を) 吸う **全滅する (2)**、**絶滅する**

#### 社会的状態変化

引退する、出家する、卒園する、退学する、転校する、入院する (4)、入所する、**破産する**、**失墜する**、**落選する**、**落第する**、**降状する**、結婚する (2)、付き合う、(孤峰頂上に) 座る、身売りする

#### 心理的状态変化

唾然とする、安心する、いい気にする、思いをする (10)、発奮心を失う、怒る (15)、驚く、悲しむ、引く、びっくりする、迷う、むかつく、無我夢中にする (2)、気を使う、恐縮する、警戒する (2)、混乱当惑する、心配する、思い出す、思う、感じる、勘違いする、気持ちにする、承知する、心酔する、

信用する、つけあがる、敵意をもつ、泣く (2)、笑う、爆笑する、恥をかく、覚えこむ、丸暗記する、  
(～に) 目覚める、黙る (3)、沈黙する (2)、(～な) 目にあう (3)、リラックスする、苦勞する、枷  
を負う

### 生理的狀態変化

逝く (2)、往生する、溺れ死にする、溺れる (3)、死ぬ (18)、死亡する、溺死する、切腹する、戦死  
する (2)、即死する、窒息死する、窒息する、けがする (8)、力をつける、眠る、吐く、妊娠する、孕  
む

### 活動

会う、嘘をつく、破壊活動する、裏取引に走る、看病する、コナかける、する (2)、予算を立てる、は  
びこる、幕府をひらく、待ちぼうけをする、待つ (4)、やる、腰をあげる、手間取る、過ごす

### その他

負担にする、かる、コミットする

表 22 のように「V・サセテシマウ」の V に現れる動詞を「対象変化」「対象非変化」「やりとり」「主体変化」「主体活動」に分けたとき、「主体変化」を表す動詞がその大半を占める。そして、主体変化動詞のうち、心理的变化を表す動詞と生理的变化を表す動詞が全体の 198 例中 119 例 (心理的变化 73 例+生理的变化 46 例) で、全体の約 60% を占めている。主体の心理的な変化と生理的な変化というのは、主体の無意志的な変化であるから、「V・サセテシマウ」の V の約 6 割は無意志動詞であるともいえる。さらに、心理的变化・生理的变化動詞以外の、主体変化動詞と対象変化動詞の中にも無意志動詞とみなせる動詞がいくつかみられる (□ の動詞)。

また、対象変化動詞の【殺す】類 (殺す、殺害する) は、主体の生理的变化を表すものとして多くみられる【死ぬ】類 (死ぬ、溺れ死にする、死亡する、戦死する) といわば語彙的な自他対応をなしており、似ている側面がある。

高橋 (1969) は、「V・シテシマウ」の考察の中で、現れる V についても言及しており、「「死んでしまう」「消えてしまう」はおおいが、「うまれてしまう」「あらわれてしまう」はほとんどない。「いってしまう」「でてしまう」「はいてしまう」など移動性の動詞は、ふつうなくなる方向でつかわれる。—おおざっぱに言えば、消滅のうごきの実現をあらわす」(p.132) と述べている。「V・サセテシマウ」の V に関しても同じようなことが言えそうで、たとえば、上の表 22 に示した対象変化動詞と、主体変化動詞の社会的変化、生理的变化動詞にそのような傾向がみられる。しかし、「V・サセテシマウ」の V にもっとも多く現れている心理的变化動詞や、活動動詞には語彙的な意味において消滅の動きを表すものはみられ

ず、「V-サセテシマウ」全体からすると、消滅のうごきの実現を表す動詞は多いとは言えない。このようなVの特徴は、「V-シテシマウ」とは違う「V-サセテシマウ」ならではの特徴の一つとしてあげられるだろう。

## 8.5 第8章のまとめ

本章では、「V-サセル」のテ形に補助動詞「シマウ」がついた「V-サセテシマウ」を対象に、まず、どのような使役の意味を表すのか考察した。先行研究では、《非意図的な放任》を表す場合、「V-サセテシマウ」の形で現れることが多いとしているが、本章で対象とした用例から考えると、「V-サセテシマウ」は、《非意図的な放任》以外の意味を表すものも多くある。とはいえ、「V-サセテシマウ」の場合、補助動詞「シマウ」がつくことによって、ある程度意志性が弱まり、Vが意志動詞であっても意志的な動作を表しにくくなっているように思われる。そのことから、それぞれの意味において典型的な使役の意味とは異なる意味（非意図性、無意志化）を帯びるようになり、他の形にはみられない《非意図的な引き起こし》を表すものや、《非意図的な放任》を表すものがほかの形式に比べて多くみられるのだと考えられる。このことは「V-サセテシマウ」のVの語彙的な意味における分布ともかわっており、Vに現れるものとして無意志的な動作を表すものが多かった。しかし、本章での考察はまだ不十分なところが多く、特に補助動詞「～テシマウ」がもつ意味と使役の意味と関連性について積極的に述べることはできなかった。今後の課題としたい。

## ◆第Ⅲ部のまとめ

以上、第Ⅲ部では、「V-サセル」のテ形に補助動詞がついた形、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」、「V-サセテオク」、「V-サセテシマウ」を対象に、どのような使役の意味を表すのか、それと関連して各形式のVにどのような動詞が現れるのかみてきた。これらの形はそれぞれ使役の意味として《許可》、《放任》、《非意図的な放任》を表す場合に多く見られる形として先行研究で指摘されているものである。そして本考察においてもほかの形式にくらべると「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」に《許可》を表すものが、「V-サセテオク」には《放任》を表すものが、「V-サセテシマウ」には《非意図的な放任》を表すものの割合が高いのは事実である。しかし、いずれの形も、もっとも多いのは《引き起こし》であった。

さらに、「V-サセル」動作の実現が誰のためであるのかという観点Ⅱから使役の意味を考

えると、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」は《引き起こし》か《許可》かに関係なく、《みちびきの使役》にかなり偏っている。そして、「V-サセテオク」の場合、《引き起こし》を表すものは《つかいだての使役》に相当するものがほとんどである一方で、《放任》を表す場合は《つかいだての使役》なのか《みちびきの使役》なのかははっきりしないものが多かった。さらに、「V-サセテシマウ」に関しては、使役主体の働きかけが非意図的で、かつ使役対象の動作が無意志的なものが多く、典型的な使役動作らしいものがそれほど多くないこともあり、傾向を見いだすことはできなかった。

また、「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」、「V-サセテオク」、「V-サセテシマウ」のVにどのような動詞が現れるのか考察した。各形式によるVの語彙的な意味による分布をまとめると、次のようになる。

表 23：第Ⅲ部で考察した各形式におけるVの語彙的な意味による分布

形式 Vの語彙的な意味		「V-サセテヤル/ アゲル/クレル」	「V-サセテオク」	「V-サセテシマウ」
対象 変化	状態変化	— (0.0%)	— (0.0%)	8 (4.0%)
	位置変化	7 (0.9%)	2 (0.9%)	— (0.0%)
非対 象変 化	接触	17 (2.2%)	8 (3.8%)	— (0.0%)
	生産	11 (1.4%)	4 (1.9%)	— (0.0%)
	実行	49 (6.5%)	26 (12.3%)	4 (2.0%)
やり とり	情報のやりとり	85 (13.4%)	28 (13.3%)	6 (3.0%)
	モノのやりとり	1 (0.1%)	4 (1.9%)	— (0.0%)
主体 変化	位置・姿勢変化	44 (5.8%)	19 (9.0%)	6 (3.0%)
	状態変化	162 (21.4%)	27 (12.8%)	12 (6.0%)
	社会的状態変化	29 (3.9%)	3 (1.4%)	20 (10.1%)
	心理的状态変化	132 (17.7%)	39 (18.5%)	73 (36.9%)
	生理的状态変化	45 (5.9%)	8 (3.8%)	46 (23.2%)
活動		142 (18.9%)	42 (20.4%)	20 (10.1%)
その他		13 (1.7%)	— (0.0%)	3 (1.5%)
合計		740 (100.0%)	210 (100.0%)	198 (100.0%)

各形式に共通して言えることは、まず、対象変化動詞が極端に少ないということである

（「V-サセテヤル/アゲル/クレル」では 740 例中 7 例（0.9%）、「V-サセテオク」では 210 例中 2 例（0.9%）、「V-サセテシマウ」では 198 例中 8 例（4%））。またいずれの形式にも活動動詞が比較的多く現れるのも特徴的である。また、やりとり動詞の場合、ほとんどが情報のやりとりを表す動詞であり、モノのやりとりを表す動詞はほとんどみられない。これらの形に共通してこのような偏りがみられるのはなぜなのか、このような偏りと使役の意味がどのようにかかわっているのか考えなければならないのだが、今のところ結論付けることができない。

一方、各形式によって現れる V にそれほど目立つ偏りはみられないが、「V-サセテシマウ」には次のような特徴がある。それは、他の形式に比べて心理的な変化を表すものと生理的な変化を表すもの、すなわち無意志的な動作を表すものが多く、全体の半分（198 例のうち、心理的变化 73 例、生理的变化 46 例の計 119 例）を占めている。「V-サセテシマウ」の V に無意志的な動作を表すものが多いということは、「V-サセテシマウ」が使役の意味として《非意図的な引き起こし》や《非意図的な放任》を表しやすいということと無関係ではないだろう。

## 第Ⅳ部 結論

### 第9章 むすび

ここでは、本論文で明らかになったことについてまとめ、本研究の意義、さらに今後の課題について述べる。

#### 9.1 本研究で明らかになったこと

本論文は、現代日本語の使役文、「X {使役主体} が Y {使役対象} に/を (Z {動作対象} を) V-サセル」のうち、使役主体と使役対象がともにヒトである「V-サセル」文を対象に、使役動詞「V-サセル」が文の中でどのような形・機能をもって現れるかによって、表す使役の意味に特徴がみられるのではないかという見通しから考察したものである。

従来の「V-サセル」の研究では、「V-サセル」がどのような使役の意味を表すのかということに焦点がおかれ、そしてそのような考察から「V-サセル」が表すさまざまな意味が明らかになったのも事実である。しかしながら、「V-サセル」が表す使役の意味は、使役動詞「V-サセル」の文中における形・機能に支えられたものではないか、そして、「V-サセル」の文中における形・機能に注目することによって「V-サセル」の意味的な特徴がより明らかになるのではないかという考えから、本論を第Ⅱ部と第Ⅲ部に大きく分けて考察を行った。

第Ⅱ部では、「V-サセル」の文の中での形・機能に注目して考察した。「V-サセル」が、中止の形、条件の形、そして終止の形として文中で用いられる場合、《引き起こし》を表すものが圧倒的に多いことがわかった。一方で《つかいだての使役》であるか《みちびきの使役》であるかという観点から考えると、「V-サセル」が連用の形である場合は《つかいだての使役》が多いが、「V-サセル」が条件の形である場合は偏りがみられなかった。そして、「V-サセル」が終止の形である場合においては、「V-サセル」が単文の述語である場合はどちらか判断することが難しい例が多かった。これは《引き起こし》か《許可》《放任》かという観点からもそうであり、このことから使役文の基本的な構造（「X が Y に (Iを) Z を V-サセル」）ではその意味を判断するのがむずかしいということを確認した。一方で、「V-サセル」が複文の主節述語である場合は、《つかいだての使役》であるか《みちびきの使役》であるかによって、伴う連用の形の従属節が表す事態に一定の傾向があることがわかった。

そして、第Ⅲ部では「V-サセル」のテ形に補助動詞がついた形を取りあげて考察した。先行研究では、「V-サセテヤル/アゲル/クレル」は《許可》を、「V-サセテオク」は《放任》を、



「V・サセテシマウ」は《放任》の中でも《非意図的な放任》を表すことが多い、または表しやすいとされてきた。そして、本論文での考察からも確かにこれらの形はほかの形式にくらべて《許可》、《放任》（または《非意図的な放任》）を表すものが多い。しかし、各形式における用例全体からすると《引き起こし》を表すもののほうが多かった。そして、これらの形をもう一方の観点から考えると、「V・サセテヤル/アゲル/クレル」は《みちびきの使役》に偏るが、「V・サセテオク」は《引き起こし》を表す場合は《つかいだての使役》に偏り、《放任》を表す場合は《つかいだての使役》とも《みちびきの使役》とも解釈できないものがあった。最後に、「V・サセテシマウ」に関しては使役主体の働きかけが非意図的、または使役対象の動作が無意志的なものが多いことから、判断できないものが多く、一定の傾向を示すことができなかった。

さらに、「V・サセル」が現れる文だけでは使役の意味を判断できないものもかなりあり、とくに「V・サセル」が単文の述語である場合と、「V・サセテヤル/アゲル/クレル」に多く見られた。

そして、第Ⅲ部で考察した、「V・サセテヤル/アゲル/クレル」「V・サセテオク」「V・サセテシマウ」のVに現れるVの語彙的な意味による分布を示し、Vの分布における共通点および相違点をいくらか示した。

本論文で考察した各形式を観点Ⅰから見た場合の使役の意味の分布を示すと次のようになる。

表 24：本論文で考察した「V・サセル」の形・機能による使役の意味（観点Ⅰ）の分布

章	「V・サセル」の形・機能	《引き起こし》	《許可》	《放任》	不明	合計
第3章	連用の形の「V・サセル」	730	5	24	3	762
第4章	条件の形の「V・サセル」	209	1	8	12	236
第5章	単文の述語の「V・サセル」	184	1	4	50	239
	連用の形の従属節をとともう主節述語の「V・サセル」	415	4	1	9	429
第6章	恩恵性がうかがえる 「V・サセテヤル/アゲル/クレル」	506	92	21	121	740
第7章	「V・サセテオク」	141	3	69	4	217
第8章	「V・サセテシマウ」	137	0	39	22	198
合計		2322	106	167	221	2824

このように、本論文は、「V-サセル」の文中での形・機能、そして「V-サセル」のテ形に補助動詞がついた形、つまり「V-サセル」の文中での現れ方に注目することで、使役文が表すの意味の特徴をいくらか見出すことができたと思う。

## 9.2 本研究の意義

本研究がこれまでの使役文に関する研究の中で、またはある文法形式が表す意味を明らかにすることを目的とする研究の中で、どのような意義を持つのか少し述べる。

これまで、ある文法形式、もしくはある文法形式を用いられた文が表す意味を考える際に、その文法形式の形・機能に注目して考察することはあまりなかったように思われる。本論文のような考察の観点は、他の研究にも有意義な考察の観点になるのではないかと思う。

また、本研究を通じて、「V-サセル」文がどのような意味を表すのか、改めて考察するきっかけになったと考える。従来の「V-サセル」に関する先行研究の中で言われてきた《強制》（《指令》、本論文で言う《引き起こし》）《許可》《放任》は同レベルのものなのだろうか。使役主体と使役対象がヒトである場合の「V-サセル」文の中心的・典型的な意味は《強制》（《指令》、本論文の《引き起こし》）であって、周辺的な意味として《許可》や《放任》を位置づけるべきではないだろうか。このことは、今回考察した用例全体の次のような偏りにうかがえる。まず、《許可》は「V-サセテヤル/アゲル/クレル」には比較的多くみられるものの、他の形ではほとんどみられない。《放任》は「V-サセテオク」に約3割（217例中70例）「V-サセテシマウ」に約2割（198例中39例）を占めるものの、他の形にはごく少数である。つまり、《許可》《放任》は用例全体の割合として決して多いとはいえないのである。

さらに、本研究を通じて使役の意味（観点Ⅰ）からの意味、すなわち《引き起こし》《許可》《放任》という意味は、単に「V-サセル」という使役動詞が表す意味ではなく、文中での「V-サセル」の形・機能、およびその他の文の要素によって支えられたものであるということがわかった。このことは、《引き起こし》《許可》《放任》という意味は、「V-サセル」という形の意味ではなく、あくまでも「V-サセル」文が表す意味であることを改めて確認したことになる。

また、使役の意味（観点Ⅱ）からの考察、すなわち《つかいだての使役》と《みちびきの使役》という観点から各形式を考えることで、一定の傾向を示すことができた。しかし、早津（2006）はVの語彙的な意味によって分類できるものとされているが、本論文では「V-

サセル」の形・機能に注目したあまり、現れる V の語彙的な意味については積極的に考察することができなかった。V の語彙的な意味が「V-サセル」文の使役の意味を決める条件になるのは、《つかいだての使役》《みちびきの使役》の使役の意味（観点Ⅱ）の場合に限られるのか、V の分類の観点も含めて V の語彙的な意味と「V-サセル」の意味とのかかわりについて考える必要がある。

最後に、本論文では「V-サセル」の文中における形・機能に注目して「V-サセル」の意味を早津（2006）の言う「原因局面/先行局面」（使役の意味（観点Ⅰ））と「結果局面/後続局面」（使役の意味（観点Ⅱ））の二つの観点から考察を試みたが、この二つの局面からの考察は完全に分けられるものではないように思われる。これまで、使役文の意味について考察する際に、この二つの観点のうち、一方の観点からしか考察されてこなかった。日本語の使役文が、二つの動作を一つの文で表すという複合性を持つからこそ、二つの局面は相互にかかわりあっており、完全に切り離して考えることはむずかしいのだと思われる。使役文が表す意味を二つの観点から相互に考えることが日本語の使役文の特徴を捉えるためにより有効ではないかと考える。

### 9.3 今後の課題

今後、次のようなことについてさらに考察していこうと考えている。

#### ・「V-サセル」の意味に関する再考察

本論文では、「V-サセル」の形・機能に注目してそれぞれによる使役の意味の特徴を述べた。「V-サセル」の意味として、《引き起こし》《許可》《放任》といった使役主体の使役対象への働きかけのあり方に注目した分類、そして、《つかいだての使役》《みちびきの使役》という「V-サセル」動作の実現が誰のためのものであるのかによる分類であった。しかし、実際、考察を進めていくと、いずれの観点からも分類できない用例が多くあった。これらをどのようにすればいいのか、そして分類できない例には何らかの構文的な特徴はないのか考察する必要があるように思われる。

さらに、前節で《引き起こし》《許可》《放任》/《つかいだての使役》《みちびきの使役》という意味は「V-サセル」文が表す意味であると述べたが、それでは使役動詞「V-サセル」が表す文法的な意味はいったい何なのか改めて考える必要があるように思う。

#### ・V が無意志動詞である場合の再考察

本論文では「V-サセル」の V が意志動詞であるか無意志動詞であるかで分けることなく

考察を行った<sup>55</sup>。しかし、V の意志性を問わなかったために、「V・サセル」文が表す意味が《引き起こし》に傾いてしまったのかもしれない。なぜなら「V・サセル」の V が無意志動詞である場合、《許可》を表すことができないからである。しかしながら、本論文で考察の対象とした例の中に「V・サセル」の V が無意志動詞である例よりも V が意志動詞であるものの例の割合が高く、「V・サセル」の V が意志動詞である場合だけを対象としても同じような傾向がみられるのではないかと思う。とはいっても「V・サセル」の意志性に注目して考察を行うことは必要だと思われ、分けて考えることでそれぞれの表す意味が明らかになるのではないかと思われる。

#### ・「V・サセル」と非使役形 (V) との文中での形・機能による意味的な違い

本論文は V が使役動詞であるものを対象に文中での形・機能に注目して考察を行ったが、考察を通じて明らかになった特徴がはたして V が使役動詞であるからみられるものなのか、それとも文中における機能、もしくは本来の補助動詞がもつ意味によるものなのか今のところはっきりしない。

#### ・本論文で考察できなかった「V・サセル」の文中での形・機能、そして他の補助動詞がついた形に注目した考察

本論文では、第Ⅱ部で「V・サセル」の文中での形・機能に注目して、「V・サセル」が連用の形である場合、条件の形である場合、終止の形である場合について考察し、第Ⅲ部で「V・サセル」のテ形に補助動詞がついた形として、「V・サセテヤル/アゲル」「V・サセテクレル」、「V・サセテオク」、「V・サセテシマウ」をとりあげて考察した。しかし、今回考察できなかったほかの形について考察することでさらに文中における形・機能と意味とのかかわりがより明らかになるのではないかと思う。その一つとして、本論文で考察した範囲では「V・サセル」が《許可》を表すものがごく少数であったが、それは本論文の第 5 章で考察対象とした複文の範囲に関係がある可能性がある。すなわち、第 5 章では連用の従属節を伴う主節述語の「V・サセル」のみを考察対象にし、原因・理由の形の従属節を伴う主節述語の「V・サセル」は考察しなかった。《許可》の例はこれらの場合に多く現れるのではないかと思われる。

・家康のもくろみどおり、光悦の一門眷族、友人、およびかれの影響下にある茶人、蒔絵

<sup>55</sup> これまでの先行研究でも「V・サセル」の V が意志動詞であるか無意志動詞であるかに分けて考察したものはあまりなく、管見に入るものとして佐藤 (1986) しかない。

師、筆師、紙すき、陶工などがあらずして移住を希望してきたから、光悦はかれらに土地を分けあたえてやり、屋敷をつくらせた。（国盗り物語・斎藤道三）

- ・「あんたは、兄ちゃんごど頭がええわけでもにゃあ、靖代みたいに、看護婦になるとか、そげな夢を持ちよるわけでもねかった。それなのに、ただただ、もう、こんな田舎からは出ていきたい、都会で一旗揚げたいとぼつか言うかい、母ちゃんも、父ちゃんに頼み込んで、無理をして大学まで行かせたとばい」（しゃぼん玉）

「V-サセル」が《許可》を表す場合は、佐藤（1986）の用語でいえば、動作の源泉が使役対象にある場合<sup>56</sup>である。第 5 章で述べた連用の形の従属節をともなう主節述語の「V-サセル」の場合、従属節と主節との関係が従属的で、密接にかかわっていることから、従属節の主語と主節の主語はともに使役主体であることがほとんどである。そのため、従属節に使役主体による何らかのきっかけ（動作の源泉）が連用の従属節に現れやすくなるのだと思われる。ところが、原因・理由の形の「V-サセル」の場合、従属節と主節との関係が連用の形の従属節のそれにくらべていくらかゆるやかな関係であり、従属節の主語に使役主体ではなく、使役対象が現れることが許される。そのため、原因・理由の形の従属節に使役対象による何らかのきっかけ（動作の源泉）が現れやすいということではないだろうか。

今後、本論文で考察できなかった「V-サセル」の形・機能にも注目して考察する必要があると思われる。

---

<sup>56</sup> 注 3 参照

## 《参考文献》

- 青木伶子 1977 「使役－自動詞・他動詞との関わりにおいて－」『成蹊国文』10 成蹊大学  
日本文学科研究室（再録：1995『動詞の自他』pp.26-39 ひつじ書房）
- 新井裕子 2004 「「シテイテ」の用法について」『日本研究教育年報』9 pp.65-80 東京外国  
語大学日本過程・留学生課共編
- 石川守 1994 「使役形の用法について」『語学研究』75 pp.1-41 拓殖大学語学研究所
- 井島正博 1997 「授受動詞文の多層的分布」『成蹊大学文学部紀要』32号 pp.63-94 成蹊大学  
文学部
- 江原由美子 2003 「付帯状況と逆接」『岡大国文論稿』31 pp.208-199 岡山大学文学部言語国  
語国文学会
- 大鹿薫久 1986 「「て」接続考」『叙説』12 奈良女子大学国語国文学研究室編（『国語学論説  
資料』23 第三分冊 pp.394-399 論説資料保存会所収）
- 奥田靖雄 1967 「語彙的な意味のあり方」『教育国語』8（松本泰丈『日本語研究の方法』pp.29-24  
むぎ書房などに再録）
- 奥田靖雄 1975 「連用、終止、連体……」『国語国文』6 宮城教育大学（『ことばの研究・  
序説』むぎ書房 pp.53-66 に再録）
- 奥田靖雄 1979 「意味と機能」『教育国語』58（『ことばの研究・序説』むぎ書房 pp.159-169  
に再録）
- 奥田靖雄 1968-1972 「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『教育国語』  
12,13,15,20,21,23,25,26,28 教育科学研究会国語部会（再録：言語学研究会編 1983『日  
本語文法・連語論（資料編）』pp.21-149 むぎ書房）
- 奥田靖雄 1986 「条件づけを表現するつきそい・あわせ文—その体系性をめぐって」『教育国  
語』87 pp.2-19 むぎ書房
- 笠松郁子 1993 「「しておく」を述語にする文」『ことばの科学 6』pp.117-139 むぎ書房
- 川越菜穂子 2002 「「ながら」節の用法の記述について—付帯状況・様態・逆接—」『人間文  
化学部研究年報』4 pp.51-62 帝塚山学院大学
- 川端善明 1958 「接続と修飾—「連用」についての序説—」『国語国文』27-5 pp.38-64
- 川村大 2003 「受身文の学説史から—「被影響」の有無をめぐる議論について—」『月刊言語』  
32-4 pp.42-49 大修館書店
- 教科研東京国語部会・言語教育研究サークル 1963 『文法教育—その内容と方法—』むぎ書  
房

- 権勝林 2008 「使役文のアスペクト」『日本研究』36 pp.343-360 韓国外国語大学校日本研究所
- 工藤浩 2005 「文の機能と叙法性」『国語と国文学』82・8 pp.1-15 東京大学国文学会
- 言語学研究会・構文論グループ 1989a 「なかどめ—動詞の第二なかどめのばあい—」『ことばの科学 2』pp.11-47 むぎ書房
- 言語学研究会・構文論グループ 1989b 「なかどめ—動詞の第一なかどめのばあい—」『ことばの科学 3』pp.163-179 むぎ書房
- 高京美 2009 「「V-サセテ」が表す使役の意味について—使役主体と使役対象がヒトである場合を中心に—」『日本研究教育年報』13 pp.83-95 東京外国語大学日本課程
- 高京美 2010 「連用の形の「V-サセル」が表す使役の意味—使役主体と使役対象がヒトである場合—」『日本研究教育年報』14 pp.21-38 東京外国語大学日本課程
- 高京美 2012 「「V-サセテオク」に関する一考察—使役性ともくろみ性の観点から」『コーパスに基づく言語学教育研究拠点研究報告 8』pp.165-183 東京外国語大学大学院総合国際学研究院グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」
- 国立国語研究所（宮島達夫）1972 『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 阪田雪子・倉持保男 1993 『文法Ⅱ 助動詞を中心として 教師用日本語教育ハンドブック』国際交流基金日本語国際センター
- 佐久間鼎 1941 『日本語の特質』育英書院（1995、くろしお出版）
- 佐藤里美 1986 「使役構造の文—人間の人間にたいするはたらきかけを表現するばあい—」言語学研究会編『ことばの科学 1』pp.89-179 むぎ書房
- 佐藤里美 1990 「使役構造の文(2)—因果関係を表現するばあい—」言語学研究会編『ことばの科学 4』pp.103-157 むぎ書房
- 柴谷方良 1978 『日本語の分析』大修館書店
- 須賀一好・早津恵美子編 1995 『動詞の自他』ひつじ書房
- 鈴木重幸 1972 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 鈴木智美 1998 「「～てしまう」の意味」『日本語教育』97号 pp.48-59 日本語教育学会
- 高橋太郎 1969 「すがたともくろみ」『日本語動詞のアスペクト』pp.117-153 むぎ書房
- 高橋太郎 1975 「文中にあらわれる所属関係の種々相」『国語学』103集 pp.1-17
- 高橋太郎 1983a 「構造と機能と意味—動詞の中止形（～して）とその転成をめぐる—」『日本語学』2-12 pp.13-21 明治書院
- 高橋太郎 1983b 「動詞の条件形の後置詞化」『副用語の研究』pp.293-316 明治書院
- 高橋太郎 2003 『動詞九章』ひつじ書房

- 崔瑞暎 2010『モノ・コト主語の使役文の諸相』東京外国語大学大学院地域文化研究科博士論文
- 角田太作 1991『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 坪井栄治郎 2003「受影性と他動性」『月刊言語』32-4 pp.50-55 大修館書店
- 寺村秀夫 1982『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版
- 豊田豊子 1974「補助動詞「やる・くれる・もらう」について」『日本語学校論集』1号 pp.77-96  
東京外国語大学外国語学部附属日本語学校
- 新川忠 1990「なかどめ—動詞の第一なかどめと第二なかどめとの共存のばあい—」『ことばの科学 4』pp.159-171 むぎ書房
- 仁田義雄 1995「シテ形接続をめぐって」『複文の研究（上）』pp.87-126 くろしお出版
- 早津恵美子 1991「所有者主語の使役について」『東京外国語大学日本語学科年報』13 pp. 1-25  
東京外国語大学日本語学科
- 早津恵美子 1998a「複文構造の使役文についてのおぼえがき—従属節と主節との関係」『言語研究Ⅷ』pp.57-96 東京外国語大学
- 早津恵美子 1998b「「知らせる」「聞かせる」の他動詞性・使役動詞性」『語学研究所論集』3 pp.45-65 東京外国語大学語学研究所
- 早津恵美子 2000a「「もたせる」における使役動詞性のあり方」『日本語意味と文法の風景—国広哲弥教授古希記念論文集—』pp.97-114 ひつじ書房
- 早津恵美子 2000b「現代日本語のヴォイスをめぐって」『日本語学』pp.16-27
- 早津恵美子 2000c「使役動詞と他動詞との意味的な分布—動詞リスト（初案）—」『言語研究Ⅹ』pp.191-281（東京外国語大学 1999 年度教育改善推進経費による刊行）
- 早津恵美子 2004「第 5 章 使役表現」尾上圭介編『朝倉日本語講座 6 文法Ⅱ』pp.128-150  
朝倉書店
- 早津恵美子 2006「現代日本語の使役文—文法構造と意味構造の相関—」京都大学・博士（文学）学位論文（未公開）
- 早津恵美子 2007「使役文の意味分類の観点について—山田孝雄（1908）の再評価—」『東京外国語大学論集』75. pp.49-86 東京外国語大学
- 早津恵美子 2011「心理変化の惹起を表現する日本語の使役文—「人ノ側面ヲ Vi-（サ）セル」型の使役文について—」『ユーラシア諸言語の動態Ⅱ（多重言語地域の言語研究）』pp.19-51 神戸市看護大学
- 早津恵美子 2012「使役動詞を条件節述語とする文の意味と機能」pp.167-190『日本語と中国語のヴォイス』白帝社



- 早津恵美子 2013a 「使役文と原動文との似通い—使役と原動の対立の弱まり—」 pp.23-42  
『日本語学研究』36 韓国日本語学会
- 早津恵美子 2013b 「使役文の文法的な意味について—「つかいだて」と「みちびき」—」  
pp.1-14 東京外国語大学語研定例研究会レジュメ(2013.12.4)
- 早津恵美子・高京美 2012 『コーパスに基づく日本語使役文・他動詞文の実態』コーパスに  
基づく言語学教育研究資料 6 東京外国語大学大学院総合国際学研究院グローバル  
COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」
- 藤井正 1971a 「使役」『日本文法大辞典』明治書院
- 藤井正 1971b 「日本語の使役態」『山口大学教育学部研究論叢』20-1pp.1-13
- 藤井由美 1992 「「してしまう」の意味」『ことばの科学 5』pp.17-40 むぎ書房
- 本多啓 1997 「「目を輝かせる」型の使役表現について」『駿河台大学論叢』14pp.33-57
- 前田直子 1991 「条件文分類の一考察」『日本語学科年報』13 pp.55-79 東京外国語大学
- 前田直子 2009 『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究—』くろしお出版
- 益岡隆志 2001 「日本語における授受動詞と恩恵性」『言語』30-5 pp.26-32 大修館書店
- 益岡隆志・田窪行則 1992 『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版
- 松下大三郎 1930 『改撰標準日本文法』中文館書店
- 松本泰丈 2005 「品詞と文の部分」(再録: 2006 『連語論と統語論』pp.249-269 至文堂)
- 南不二男 1993 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 三宅和宏 1995 「～ナガラと～タママと～テ」『日本語類義表現の文法 (下)』宮島達夫・仁  
田義雄編 pp.441-450 くろしお出版
- 宮地裕 1965 「「やる・くれる・もらう」を述語とする文の構造について」国語学 63 pp.21-33  
国語学会
- 宮地裕 1969 「使役の助動詞 せる・させる〈現代語〉」松村明編『古典語現代語助詞助動  
詞詳説』pp.89-96 学燈社
- 宮島達夫(国立国語研究所) 1972 『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 村木新次郎 1983 「迂言的なうけみ表現」『研究報告集 4』(国立国語研究所報告 74) pp.1-40  
国立国語研究所
- 森田良行 2002 「使役表現の諸相—「～せる/～させる」の問題」『日本語文法の発想』  
pp.181-199 ひつじ書房
- 山田敏弘 2004 『日本語のベネファクティブ—「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法』  
明治書院
- 山田孝雄 1908 『日本文法論』寶文館

- 山本裕子 2005 「「～ておく」の意味機能について」『名古屋女子大学紀要 51 号（人文・社会編）』 pp.207-218
- 柳田征司 1994 「意志動詞の無意志的用法—あわせて使役表現のいわゆる許容・放任・随順用法について」『国語論究 5 中世語の研究』 pp.327-361 明治書院
- 吉川武時 1976 「現代日本語のアスペクトの研究」『日本語動詞のアスペクト』 pp.155-327 むぎ書房
- 권승림 2003 「일본어 사역표현 재고-문법이론의 교육적 활용을 지향하며-」『일본연구』 제 21 호 pp.439-458 한국외국어대학교일본연구소
- (權勝林 2003 「日本語使役表現再考—文法理論の教育的活用を志向して—」『日本研究』 21 号 pp.439-458 韓国外国語大学校日本研究所)

## 《用例出典》

### 「基本資料」(五十音順)

#### ① 手作業による文学資料(36 冊)

- 浅田次郎 1997『地下鉄に乗って』講談社文庫 1999
- 有川浩 2005『レインツリーの国』新潮文庫 2008
- 石田衣良 2006『眠れぬ真珠』新潮文庫 2008
- 伊集院静 2009『大人の流儀』講談社 2011
- 江國香織 2003『号泣する準備はできていた』 新潮文庫 2006
- 井坂幸太郎 2002『重力ピエロ』新潮文庫 2005
- 遠藤周作 1958 年『海と毒薬』新潮文庫 2004
- 小川洋子 2003『博士の愛した数式』新潮文庫 2005
- 奥田英朗 2008『空中ブランコ』文春文庫
- 荻原浩 2004『僕たちの戦争』双葉文庫 2006
- 乙一 2000『夏と花火と私の死体』集英社文庫（「夏と花火と私の死体」/「優子」）
- 角田光代 2002『空中庭園』文春文庫
- 角田光代 2007『八日目の蝉』中央公論社 中央公論新社 2011
- 金城一紀 2000『GO』講談社文庫 2003
- 桐野夏生 1999『柔らかな頬（上）』文春文庫 2004
- 小林多喜二 1953『蟹工船・党生活者』（蟹工船 1928、党生活者 1932）新潮文庫
- 重松清 2000『ビタミン F』新潮文庫 2003
- 司馬遼太郎 1968『坂の上の雲(一)』文春文庫 1999
- 曾野綾子 2007『貧困の光景』新潮文庫 2009
- 高野和明 2001『13 階段』講談社講談社文庫 2004
- 乃南アサ 2004『しゃぼん玉』朝日新聞社 新潮文庫 2008
- 帚木蓬生 1994『閉鎖病棟』新潮社 新潮文庫 1997
- 東野圭吾 1999『白夜行』集英社文庫 2002
- 東野圭吾 2001『手紙』文春文庫 2006
- 東野圭吾 2004『さまよう刃』角川文庫 2008
- 松本清張 1980『黒革の手帖（上）』新潮文庫 1983
- 三崎亜記 2000『となり町戦争』集英社文庫 2006
- 道尾秀介 2008『ラットマン』光文社文庫 2010

湊かなえ 2008『告白』双葉文庫 2010  
宮部みゆき 1992『火車』新潮文庫 1998  
三島由紀夫 1954『潮騒』新潮文庫 1980  
山崎豊子 1965『白い巨塔（一）』新潮文庫 2002  
山田宗樹 2003『嫌われ松子の一生（上）』幻冬舎文庫 2004  
山本文緒 1993『きっと君は泣く』角川文庫 1997  
横山秀雄 2002『半落ち』講談社文庫 2005  
リリー・フランキー 2005『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』新潮文庫 2010

## ② 電子化資料

『CD-ROM 版 新潮文庫の 100 冊』新潮社（1995）より以下 46 作品

（括弧の中は作品の出版年）

赤川次郎『女社長に乾杯』（1984）  
阿川弘之『山本五十六』（1964）  
安部公房『砂の女』（1962）  
有吉佐和子『華岡青洲の妻』（1966）  
池波正太郎『剣客商売』（1972）  
石川淳『焼け跡のイエス・処女懐胎』（1946）  
石川達三『青春の蹉跌』（1968）  
五木寛之『風に吹かれて』（1968）  
井上ひさし『ブンとフン』（1970）  
井上靖『あすなろ物語』（1953）  
井伏鱒二『黒い雨』（1965）  
遠藤周作『沈黙』（1966）  
大江健三郎『死者の奢り・飼育』（1957）  
大岡昇平『野火』（1951）  
開高健『パニック・裸の王様』（1957）  
北杜夫『楡家の人びと』（1964）  
倉橋由美子『聖少女』（1965）  
小林秀雄『モオツアルト・無常という事』（1946）  
沢木耕太郎『一瞬の夏』（1981）  
椎名誠『新橋烏森口青春篇』（1985）

塩野七生『コンスタンティノーブルの陥落』(1991)  
司馬遼太郎『国盗り物語』(1963)  
曾野綾子『太郎物語』(1978)  
高野悦子『二十歳の原点』(1971)  
竹山道雄『ビルマの豎琴』(1947)  
太宰治『人間失格』(1948)  
立原正秋『冬の旅』(1969)  
田辺聖子『新源氏物語』(1978)  
筒井康隆『エディプスの恋人』(1981)  
壺井栄『二十四の瞳』(1952)  
新田次郎『孤高の人』(1969)  
野坂昭如『アメリカひじき・火垂るの墓』(1967)  
福永武彦『草の花』(1954)  
藤原正彦『若き数学者のアメリカ』(1978)  
星新一『人民は弱し官吏は強し』(1967)  
松本清張『点と線』(1957)  
三浦綾子『塩狩峠』(1968)  
三浦哲郎『忍ぶ川』(1960)  
三島由紀夫『金閣寺』(1956)  
水上勉『雁の寺・越前竹人形』(1961)  
宮本輝『錦繡』(1982)  
村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(1985)  
山本周五郎『さぶ』(1963)  
吉村昭『戦艦武蔵』(1966)  
吉行淳之介『砂の上の植物群』(1964)  
渡辺淳一『花埋み』(1970)

#### 「補助資料」

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ モニター公開データ 2009 年度版) の書籍  
データ

## 《表の一覧》

表 1：本論文で考察の対象とした「V-サセル」の用例数 .....	9
表 2：佐藤（1986）の「人間が人間にはたらきかける」文」の文法的な意味 .....	14
表 3：権（2008）の使役文の意味・用法 .....	22
表 4：連用の形の「V-サセル」における全体の分布 .....	28
表 5：連用の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅰ）の分布 .....	43
表 6：連用の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅱ）の分布 .....	47
表 7：条件の形の「V-サセル」における使役主体の特定・不特定による分布 .....	54
表 8：条件の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅰ）の分布 .....	63
表 9：条件の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅱ） .....	66
表 10：終止の形の「V-サセル」の文の形 .....	69
表 11：単文の述語の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅰ）の分布 .....	73
表 12：「V-サセル」が複文の主節述語である場合の従属節の形 .....	76
表 13：複文の主節述語の終止の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅰ）の分布 .....	91
表 14：複文の主節述語の終止の形の「V-サセル」が表す使役の意味（観点Ⅱ）の分布 .....	91
表 15：「V-サセテヤル」「V-サセテアゲル」「V-サセテクレル」の用例の分布 .....	99
表 16：「V-サセテヤル」「V-サセテアゲル」「V-サセテクレル」の恩恵性の有無 .....	100
表 17：「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」が表す使役の意味（観点Ⅰ）の分布 .....	107
表 18：「V-サセテヤル/アゲル」「V-サセテクレル」の V の語彙的な意味 .....	112
表 19：「V-サセテオク」が表す使役の意味（観点Ⅰ）の分布 .....	126
表 20：「V-サセテオク」の使役の意味（観点Ⅰ）と V の語彙的な意味 .....	131
表 21：「V-サセテシマウ」が表す使役の意味（観点Ⅰ）の分布 .....	142
表 22：「V-サセテシマウ」の V の語彙的な意味 .....	145
表 23：第Ⅲ部で考察した各形式における V の語彙的な意味による分布 .....	148
表 24：本論文で考察した「V-サセル」の形・機能による使役の意味（観点Ⅰ）の分布 .....	151